

---

# AngelBeatsMySong

姫龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Angel Beats My Song

### 【ZPDF】

Z0064M

### 【作者名】

姫龍

### 【あらすじ】

この物語は岩沢まさみ成仏後の日常を淡々と描くモノです。  
過度な期待はしないでください。

また、この物語には自由に作者の設定が足されています。  
アニメとは、まったくの別モノとお考えください。

感想の制限がなくなりました！ アドバイス等ありましたらどうぞよろしくお願いします！

8/26

# episode zero ~Where is my hope?~ (前書き)

初投稿です。

何か気になる点があつたら、指摘よろしくお願いいたします。

# episode zero ~Where is my hope?~

ずっと捗っていた、自分の生まれてきた意味を。

『……………どうして、私は生きり……………』

病室で自分の不幸を呪つた。  
動かない体、いつそ舌でも噛み切つて死のうとさえ思つた。  
まあ……思うだけで動かなかつたけど。

そして結局、死んでしまつてやつてきたこの世界。

意味もわからず、どうしていいかもわからず座り込んでいた私に、  
ゆりが声をかけてくれた。

ねえ、もしカミサマに復讐できるつていつたらどうする?

へー、あなた歌えるの……そうだ、バンドをつくりましょ?

たのんだわよ、今夜のライブ…………期待してるからね。

……………楽しかった。

ホント、ろくな事がない人生だつたけど。  
ここにきてからは、毎日が乐しかつた。  
死んだ後のほうが楽しいだなんて思わなかつた。

カミサマ……………ずるいよ。

これじゃあ、恨めないじゃん。

なんで、生きてる時は厳しくせに、死んだ後はこんなにやれっこ  
の？

ああ……こちたくない。  
まだ……ここにいたい。  
でも……もついない。

だつて……私は見つけたから。

もう、ううじで燃つてている訳にはいかないんだ。

カミサマ、次もどうか、ニンゲンにしてください。  
もう一度同じような家庭環境でもかまいません。

次は必ず、つかんでみせる。

だから………… わよなー、みんな。

『………… 那沢？』

どこかドロセコが私を呼んだ。  
だけど、もう振り向かない。

その日、私はこの世界にサヨナラした。

Where is my hope? ..... End

「トントン！」

「…………ん？」

軽い揺れだったが目が覚めた

「…………」

どうやら氣を失っていたらしい。  
目を開けて、周りを見る。

どうやら私は電車に乗っているようだ。

しかもローカル線。

「…………なぜ？」

どういう事だろ？

私は、確かにあの世界から消えたはずだ。  
ここはどこだろ？……まさか死後の世界の死後の世界とか……まさ  
か……ないよね？

だんだんと焦りが出てきた。

ここは……どこだ？

とりあえず、別の車両にいひつ。  
きっと誰かいるはずだ……

私は立ち上がった……と、その時、扉が開いた。

「目が覚めた？」

.....

〔冗談だろ。

そこに立っていたのは、手に飲み物を抱えた天使だった。

それから.....

軽くパニックになつた私は現在、天使と合席中だ。  
手には、天使から渡されたおいしい水（……なんで私の好きなのしつてんだろ？）

かの天使は私に水を渡した後、電池が切れたように動かないし、しゃべらない。

.....気まず！

私も何を言つていいか分からず、数分悩んだ末、とりあえずお礼を言おうと勇気をもつて天使に話かけてみた。

「.....あの」

「おめでとう、岩沢さん。貴女はしつかり見つけられたようね」

お礼を言う前に天使に無表情で淡々とした祝福の言葉をかけられたんですけど。

「ああ、セリヤジツも……」

とつあえず、お礼を言った後、

「あ、やつぱり私消えたんだね」

天使の言葉から私は確かに消えたことを確認した。

「ええ、今いることは『死んだ後の世界』ではないわ……かと言ひて生きていた世界でもない……ここはその狭間の世界……私は『幻想世界』と呼んでこよ」と

「セリヤなんだ……あ……じゃあ、私はこれから生き返るって説?..」

「セリヤ」

……正直に言ひつと、よく意味はわからなかつたのだが、どうやら流れ的にこべと、私は生き返れるらしい。

「じゃあ、何? あんたは見送りに来ててくれたの?..」

「セリヤ、こいつになるとなるわね」

「そりやどいつも……まさか最後に天使が見送つてくれるなんで思わなかつたよ」

まるで、これから死ぬみたいじゃん……

「一応、あの世界の生徒会長だから……最後に見送るのも仕事」

「ああ、善意でやつた訳じやないって?..」

あくまで、仕事か……だよな、せんざとやつてきたからな……そりや、嫌われるか……

「…………あのセリヤ、えつと……『メンな? 今まで……』

とつあえず謝った。

さすがにこれを言つとかないと田覓めが悪くなりそうだ。

今までやんせんマシンガンとか、グレネードとか、ロケランとか…  
…思い出すといろいろこいつに撃ち込んだな。（もちろん、私はやつてない。面白がってやつたのはひせい達だ）

「……大丈夫、私は氣にしてない」

「お、大物だな……」

あれを氣にしないとは……

そんな事を考えていると、今度は天使が自分から口を開いた。

「…………貴女は本当に満足した？ 別に今からでも戻れるわよ？」  
「…………ホントに？」

おもわず、食いついてしまつた。  
数秒、見つめ合つ。

「…………」  
「…………（フツ）」

すると天使は可笑しそうに微笑んだ。

「…………本気とした？」

「いや、いじでまさかの『冗談オチ！？』

おもねず、音無しのよにシッコンでしまつた！

「…………だつて、もし本当に戻れるとしても貴女は戻らないでしょ？」

「いや、確かにそうだけじゃ…………」

天使の言葉で、思い出した。

「……そうだな、簡単に決めた訳じゃない。」

悩んで悩んで悩んで……そして手に入れた答えだつたじゃないか。  
この程度で揺らぐような決意じゃない……

「…………本当に大丈夫みたいね」

「ああ、悪いな…………もう、大丈夫だ」

天使は私を試しているんだ……ホントに大丈夫かどうか……

最終確認をしているんだ。

だつたら、弱いところなんて見せられない。

私は新たに決意を固めなおした。

ローン

『「JR乗車ありがとうございます。次は…………でござります。お忘れ  
モノのないよう……』

アナウンスが私の生前住んでいた町を告げた。

「…………そろそろね」

「ああ、しかも…………どうやらまた、人間みたいだな」

たぶん、予想だと姿も変わらないだろう……私はあの病室からやり直すのだ。

「再スタートって訳か……」

そういうとなぜか、天使は表情をくもらせた。

「どうした？」

「……………いえ、別に……ただ、いいの？ 貴女にはこのまま」」  
を通り過ぎて、全てを忘れて一からやり直す道もあるのよ。」

天使は暗に『辛さを抱える必要はない、最初からやり直せ』と言つ  
ているのだと理解できた。

だから」」や……私は、こいつ、天使に言葉を返す。

「上等だよ、むしろ好都合だ。最初からどん底なら、もう、失わな  
い。後は……掴むだけさ」

私の言つた言葉に天使は一度目を開いた後。

「そり…………よかつた」

微笑んだ。

ローン

『い』乗車ありがとうございました。 駅

駅で『い』ります』

「じゃあ、行くか……」

私は立ち上がった。

そして、天使の方をむく。

「えっと……じゃあな」

「さよなら」

「あー……最後に名前聞いてもいいか?」

最後の最後で何失礼な事を言つてるんだらと思つたが、これだけは確認しておきたかった。

……天使、ちよつと涙目……」「めん。

「立華……立華奏」

でも……天使、いや奏はちゃんと教えてくれた。

「そう……奏、ね。いい名前……覚えておくよ」

音を奏でる、か……

「じゃあね、奏。最後にあんたと話せてよかつた」

「そり」

「…………戦線の奴ら、あんま嫌わないでくれな  
「わかったわ……じゃあね…………rebels against

the world

「?」

最後の言葉は聞き取れなかつたが、まあいいか。

私は奏に背を向けると歩き出した。

左手を上げて別れの挨拶。  
もづ振り返らない。

私は、ローカル線から降りた。

プレゼント、大切に。

最後に聞こえたのは奏の声。  
……意味はわからんけど……ありがとう。

私を光が包んだ。

見送った、手を振った、よかつたね……と。

B e g i n n i n g P l a c e ..... E n d

目を開けば、そこは一面真っ白な空間だった。  
すぐここが病室だと理解する。

(やうか 戻ってきたんな)

声は……出なかつた。  
でも、私には確かにあの世界で掴んだ答えがある。  
だから、絶望はしない。  
どこまでやれるか……

「…………」

無意識で天井に向かつて手を伸ばしていた。  
そして……手を伸ばせることに気づいた。

なるほど……

(これが、プレゼントってやつか……)  
奏……あんた最高にいい奴だよ。

声は出ないけど、体は動く。

これだけで……十分だ。

私はまだ……戦える。

後は、掴むだけだ。

私は、コールブザーを掴んで、連打した。

さあ、来い。

ここからだ……

ゲームスタート！

Morning awakening  
.....End

病室。

そこは普通なら、病人がおとなしく寝て傷を癒す場所なのだらう。

しかし……

「ふ、ふ、ふ……」

いつもは無音な空間も今は規則正しい息が響く、ジムのよつたな場所になつてゐる。

私はベットの上で腕立て伏せに励んでいた。  
何もおかしくなつた訳じゃない。

ただ、あの世界にいたころ高松が

『腹筋や腕などを鍛えてはどうですか？ 肺活量が上がれば、歌の幅が広がりますでしようし、腕が丈夫になればスピードは勿論、耐久力も上昇しますから、さらにレベルの高いパフォーマンスが可能になるのでは？』

と言つていたのを思い出したのだ。

あの時は、メンバーと一緒になつて笑い飛ばしたが、今になつて思うと確かに一理あるのかもしれないと思つ。

(高松……悪いな、あの時は笑い飛ばしちまつて……)

少し、反省しようか……と一瞬思つたが

『いえいえ、今活かされてるだけで十分です』  
と言ひ、高松の声（妄想）が聞こえたのでやつぱりやめた。

だいたい、後悔したところで仕方ないし、高松ならまあ、気にしないだろうと思ったからだが……（ちなみに、高松は笑い者にされた事を気にしていた。これが後のテスト妨害作戦に繋がっていくのだが、正直なところ、岩沢には関係ないし、知る事もないことだった）

（97、98、99……200、よし、腕立て伏せ終了）

起き上がると、近くに置いておいたタオルで汗を拭きながら水を飲む。

まだ、私は病院の中だ。

目覚めてから、一週間がたつていた。

後で聞いた話だが、最初、私がブザーを連打した時、ナースステーションは大混乱に陥つたらしい。

なんせ『身寄りのないほぼ、植物状態の少女が一人眠る部屋』から、突然の連打「ールだ。

病院側から見たら、最高に恐ろしかつたのだろう。

三十分後に来た若い看護師（山田さん・25歳・女・独身）は人身御供にされた娘のようにこの世の終わりみたいな顔をしてやって來た。

あの顔を見た時は悪いが大爆笑だつた。

その後、精密検査を受けて出た結果は私を驚かせた。

私は植物状態から回復しただけでなく、失語症ではなく失声症と診断されたのだ。

難しいので、説明は割愛させてもらひが要は私の病気は『いつか治るもの』になつたのである。

……秦のプレゼント恐るべし。

ほぼ、完治と診断された私を見て、医者は「俺は……神を信じるかもな」と話していた。

つまりところ、私的には万々歳名な結果といつ訳だが……世の中、そう上手くは廻らないらしい。

今私は、確かに健康になりつつある。しかし忘れていいのは、私は一週間前までは、ほぼ危篤の患者だつたということだ。

そつ……あまりに悪すぎて両親に隠れられるくらい、私は重症だつた。

先生が言つには親権者が行方不明で、見つかるまでは病院にいてくださいね、という事らしい。

……あの馬鹿ども、ゆるすまじ。

そんな訳で、私は病院から出れずにはいる。まあ、私としては三食しつかり出て、寝るところも住むところにも困らない（そして何より料金が両親負担な）ここは意外と住み“じ”がいいのだ。

おかげで、私はただいま病院に無銭衣食住状態のパラサイト状態だ。  
早く……両親が見つかるといい、そして苦しむがいい、……

「岩沢さん、検温ですよ」

そんな事を考えていると看護師の山田さんが部屋に入ってきて、体温計を渡してきた。

私は黙つて、検温することにする。

数分後、体温計を山田さんに渡す。

「はい、どうも。……36・5、思いつきり平熱ですね」

「最近、白衣の天使の仮面がはげかけてるな……ちょっと怖い。」

「早く」両親見つかるといいわね  
「クン（ええ、まったく。そうしないとそろそろ私の命が危ないかもしないし）

「やっぱり寂しい？」

ふるふる（いえ、まったく。再開はドロップキックつて決めてますから）

「無理して……強がらなくていいのよ~」

「クン（強がってませんから……ひとつじこじまで意思疎通が難しいとは……）

まったく、会話が噛み合わない……手話でも覚えた方がいいのかもな……

山田さんの話を聞きながらそん事を考えていると……

ローン

(あつ……放送?)  
なぜか、放送がなつた。

「おかしいわね……今検温やつたばかりなのに……」

山田さんも首をかしげている。  
どうやら、緊急放送らしい。

なんだらう……熊でも出たのかな。

『あー、テステス……124号室の皆沢さん、お荷物です』

やる氣のないおつせんの声が響く……なるほど、お届けものね。  
24号室に……つて私じゃん!

「へー、お荷物ね……まつてて、とつてきてあげるから

山田さんは、そう言つて病室を出ていった。  
いい人だ……しかし、誰からだらう?

(まつたく、思い浮かばない……)

両親からだつたら、速効破棄……そんな事を思つていると山田さん  
が戻ってきた。

なんですか? その横40? 高さ1メートル弱はあるひつかといふ  
超巨大段ボールは……

大人8人がかりで持つてこられたそれは、私の病室の4分の1を占

めるくらいこの大きさだった。  
これ……いつたいどうじろと？

『これ、なんですか？』

さすがに今日はしつかり意思疎通が必要とマジックボードに文字を  
書いて山田さんに見せた。

「何つて……お届けものよ？」

『いや……それはわかりますから……誰からですか？』

「それがね……」

山田さんが領収書を見せる。（しつかり親名義）  
その差出人の名前を見て、私は固まつた。

「立華奏さんからよ」

それは、死後の世界の……奏からの贈り物だった。

Preacher - s Wife ..... End

## episode eins ~Treasure~

私は速攻で山田さんを追い出すると、ダンボールを開けた。

中には……死後の世界で使っていた私の私物、そして茶封筒が入っていた。

私は茶封筒を開いた、中身は戦線メンバーと撮った写真、そしてゆりからの手紙が入っていた。

拝啓

ひそしごり……とうとうのむおかしいわね

元気にしてた？ 岩沢さん

もしかしたら、この手紙が貴女に『届く』とは無いのかもしね

滑稽よね、私達が思い出にすがるなんて……

あのね、天使が来たの……

『岩沢まさみの使っていた部屋を早く開ける』

つて言つてきたのよ？

思わず、全面戦争になる所だったわ……

でもね、彼女……

『捨てる句で言つてない……彼女に渡すものがあれば私が送つてあげるか』

つて言つたのよ……

当然、最初は済つたわ……でもね、ガルデモのみんなが、、送るうつて言つから

うつして送ることになつたわ

何でも、天使が言つことは書いてある住所に送れば、一いつちの世界にも届くらしこの

まあ、期待はしないけど……暇な時はたまに連絡ぢよつだい？

じゃあね

ゆうりょく

「…………」

我慢しようと思つたんだけどな……

私は、一週間ぶりに泣いた。

手紙を読み終わり、他の荷物を見てみる。

ギターが三つにアンプ、チューナー、楽譜といった音楽関係のもの、  
SSSの制服、そして……『コイツ』

……いる。

これがあれば、また私は音楽ができる。

それに、これからはあっちの世界ともやり取りができるらしいし……

(……………いけるや)

かなり幸先いいスタートが切れる。

(……………造るか)

G i r l s D e a d M o n s t e r …… ガルデモをもう一度。

(……………そりあえず、初めに一人、ずっといてくれる……ひたむきのよくな仲間を探そう。

そこから徐々に大きくしていくつ。

大体のプランを練った私は、パジャマを脱いだ。  
そして、SSS制服に着替えた。

(……………さあ、始めようか)

私は病室を出る…………ついでに手にはマジックボード。

re b e l s   a g a i n s t

t h e

g o d

神への反逆を

もう一度始めよっ

T r e a s o n   . . . E n d

これは若沢が仲間を探し始める2日前の話。

それは、若沢さんが消えてから4日目の事。  
本来なら下っ端の私が来れる所ではないのだが、今日、私は戦線の  
本部に来ていた。

理由は一つ。

私は次期ガルデモのメンバー候補に選ばれたのである……！

「ありえねえ……」「ガルデモはロックバンドですよ?」「アイド  
ルユニットにでもするつもりか」

などと、散々先輩方からダメ出しをくらつたが、持前の根性（雑草  
精神ともいう）と技術で何とかガルデモのメンバーに選ばれた。

し・か・し

敵は思わぬところから現れたのである…………！

「まあ、後はメンバーにまかせましょ」「いやつたー！ひわいさんと組めるっ……！」

隊長さんの一声で皆がなつとくしあけた時

ブゥーン！ 鉄球の音

（あつ…………誰か引っかかった…………）

シユパーン！ 何かが切れた音

（?????）

後ろの扉で何か音がした。

みんなが振り返るとそこには………… 天使が立っていた。

「臨戦態勢！」

隊長さんの声で、一瞬停止した思考が呼び戻される。  
な、なんで天使が…………もしかしてこれって…………

ピンチってやつですか？

「…………待つて」

無数の銃に臆することなく平然と構えている天使。  
お、大物だ…………などど、どうでもいい事が頭をよぎる…………私、  
動搖してんだな…………

「…………何の用？」

隊長さんが代表して天使に問いかける。

怖いなあ…………あんな顔と声で問いただされたら漏らしそう…………  
それでも、天使は無表情のポーカーフェイスを崩さない。  
そしてこう言った。

場が凍りついた。

「やっぱ、てめえの仕業かよ！」  
やさぐれあんちゃん先輩が叫ぶ。

「一人で来るのはいい度胸だな…………今度こそ千回死なせてくれるー！」

「お、おいー やめろってー！」  
「そうだぜー お前じやかなわねえからー！」  
「ひぬせえ、はなせえー！」

いつもオノ持つてる先輩が先走りうつとしてひなつち先輩とえつと  
音無？先輩におさえられた。

ほかにも、にんじや先輩がいつもより焦った声で「あさはかなり  
つてつぶやいたり、めがね先輩が一人揃つてめがねクイッ！ つて  
やつたり、T K先輩が「Carnival of Despair  
……」て言つたりと、みんな反応はいろいろだけど、天使のセリフ  
が気になつてるみたいだ……

代表して隊長さんが天使と話している。

「どういう事？ まさか貴女が…………」  
「違う。それは貴女にもわかるはず」  
「…………そうね」  
「おいつー ゆりつペそいつの話なんて聞かなくてもー！」  
「ちよつと、黙つてー！」

「で、何？ 岩沢さんの話って？」

「彼女が使つてた部屋、空けてもらひえるかしら？」

「なぜ？」

「ほかにも使いたいって生徒がいるのよ……それにもう、彼女はないわ」

「…………無意味だと？」

隊長さんの声にかすかに怒りが混じる。  
でも、天使は全く気にしない。

そして「う、言い放つた。

「ええ、正直な所、早く部屋開けてくれないかしら」

「…………コイツ。

みんな、いっせいに押し黙る。

「貴女一體…………」

隊長さんが切れかけな口調で言葉を吐きことした時

「別に捨てるとは言つてないわ」

「じゃあ…………」

「彼女に必要だと思うものがあるなら、私が送つてあげる

天使が…………そづ言った。

みんな今度は別の意味で黙る。

私は、今天使が言った言葉の意味を考える。

(それって……)

「………… 渡せるって事ですか？………… ジリの世界からあつ  
ちこ…………」

つぶやきが口から洩れた。

「ええ、そういう事」

天使が認めた事で、考えが正しかつたと知る。

「そんな事…… 一体どうやって？」

隊長さんが天使に質問する。

「それは秘密」

「なんで！？」

「だって………… もし、あっちの世界………… 生きていた世界の方に銃や槍  
や刀がいったらどうするの？」

「そ、それは…………」

「おこらない………… とは、言い切れない………… いつの時代も間違い  
はある………… どんなに結束しても」  
「わかったわ…………」

隊長さんの諦めた声。

だけど確かに…… お母さんのいる世界でそれはイヤだな…………

「いいのかよ………… ゆうつペ」「やうだぜ？ そんな事あるわけが…………」

「仕方ないでしょ？ 私たちのわがままで、あっちに迷惑をかける

訳にはいかない

「わかつた」「りょーかい」

隊長さんの声で一応、みんな納得した。

「わかつたわ……お願いする。少し時間をくれない？」

「いいわよ……準備ができたら教えて」

そつ言つて、天使は出て行こうとしたところ……なぜか立ち止まり、振り向いた。

「どつしたの？」

「…………そこ」のあなた

隊長さんの声を無視して天使が指をした先には

「…………く？」

私がいた。

「えつ……わ、私？」

「そう」

「え、えつと何かな？」

何かしたかな…………

「こ」の間のライブの時に張ったポスター…………ちゃんとはがして

ね？」

「み、見てたんだ……」

「わかった……しつかりはがします」

「わかった……しつかりはがします」

ついでに部屋の壁に貼つまへやひつ。

「あと……」

「まだ何か？」

これで終わりかと思ったが、まだあるよつだ。

「貴女……ガルデモにはいるの？」

「ええ、まあ……」

き、聞いてたんだ……

「そう……」

あ、やっぱ注意くらう？

そう思つて身構えた私に天使が言つた言葉は……

「もつと、練習しなさい……このままじゃバンド死ぬわよ。」

「なつ！？」

まさかのダメ出しだった……

天使は後は何も言わず本部から出ていった。

後に残つたのは、新た発見に驚くメンバーと

「おこ……天使にまでダメ出しひりつたぞ？」 「やっぱ、ダメじゅ

「うう……可憐なつだよ」「ね?」

the next is 「修行あるのみだな」

屍となつた私だけだつた……

やつぱ、天使なんて嫌いだああああああああ！――！

Angel attack  
...  
End

とりあえず私は街に出た。

ばれたら、山田さんに怒られるだろうが、別にたいしたことはない。

今は、メンバー集めが大事だ……

それから、数時間。

私のメンバー勧誘は熾烈を極めた。

とりあえず、声が出ないので基本相手を叩いてから話しかけるのだがこれにキレられたのが、20回。

何とか話を聞いてもらいつつも、声が出ないんじゃ……と断られたのが42回。

変なおっさんに話しかけられたのが8回。（この制服はコスプレじゃない！）

と、こんな感じである。

現在、私は意氣消沈して公園のブランコで揺れていた。

さすがに何時間もやって疲れた……

おいしい水片手に、溜息をつく……

（世の中、もう上手くいかないか……）

みんな忙しいのだ。

生きることに必死なのだ。

赤の他人に……私なんかにかまつてゐるヒマはないのだ……

わかつてゐる……わかつてゐるけど。

(あきらめない)

やめるわけにはいかない、その内声も戻るのだから、頑張らなくては……

「ねえ」

(よし、またがんばろ)

「ねえつてば」

「…………」

右手のこぶしを握り、決意を新たにしていた私は、話しかけてくる人に気がつかなかつた。

顔を上げると目の前に少女が立つていた。  
まだ、少し幼いようだが、顔立ちはなかなか端整なかわいい子で緋色の髪が印象的だつた……おつと、思わず見とれてしまった、一応この子も勧誘してみるか……  
すばやく、マジックペンをはしらせる。

『なんかようか?』

『なんで、それで話すの?』

『私は、声が出ない』

『そ、そうなの? 『めんなさい』…………』

『気にすることはない』

『ありがと……』

『それで? 何かよう?』

『えつと……なんだか暗い顔してたから……大丈夫?』

そうか……こんな子供に心配されるほどの顔になつてたのか……

『大丈夫だ……ありがとう』  
「い、いえ……」ちからこや、余計な事を……」

……引っ込み思案なようだが、今時珍しいくらいやさしい子だな……  
ほしいな。

『…………名前は?』

少し、欲を出して切りこんでみた。  
案の定、少女は答えてくれる。

少女よ……私が言えないが人をもつと疑うべきだな。

「えっと……初音……音無初音つていいます」

なるほど……音無初音ちゃんね……

「ああ、呼び捨てでもかまわないです」  
『どうも』

何がが、引っかかった気がしたが気にしないことにした……まあ、  
無関係だろう。

『あれ?』  
「はい? なんですか? えっと……名前は?」  
『ああ、じめん……岩沢まさみだ、よろしく』  
「なるほど……おやぢやんさんですね」  
(…………)

……おやぢやんさん。

ゆつづく並にひびこあだ名だ。

(ヤンスの悪戯な口向並だな)

「どうかしました?」

『いや……別に』

「もうですか……あー、まあちゃんとせんぱいの学校に通つてるんですけど? あんまり見かけない制服ですか?」

『まさちやんさんさんはやめなさい?』

「へ? ……もうですか、わかりましたじゃあお詫びをうで」

「うん……もうの方がしつくつくるな。

『私は、今学校には通つてない、この制服は……前の学校のもの。そりなんですか……すいません』

正確にこうのなら一応、まだ学校には入つているのだなが、そりこえば、初音は何年生なのだな? 「何学」だけど。

『初音は何年生? とこつよつ小学生以上だよね?』

「し、失礼ですよ? 茂沢さん……初音はこれでも高校生ですか?」

なんとまあ……予想外。

これが噂の口利属性持ちとこつやつなのか……

と、不意に頭にある可能性が浮かんだ……まあか……

『悪いな……ちなみに何年生?』

「…………まだ一年生です。」

よかつた……タメだ。

「どうしたんですか？ 何か安心してるみたいでけど……」

『いや、別に？ …… なあ、初音？』

「なんでしょう？」

私は、気合いと祈りを込めて……書いた！

『バンドをやらないか？』

届け！ 私の想い！

初音は一瞬「へ？」と間が抜けたような顔をした。

「バ、バンドですか……」

『やらない？ やろうよ、といつかやって！ 楽しいよ？』

「私、経験無いんですけど……」

よし……嫌がってるわけじゃない。

いける……

『大丈夫！ 私が一から教えるから！ こう見えて人に教えるの得意だよ？』

精一杯書く。

「でも……」

マズイ……渋り始めた。

こうなつたら……

『わかった……』

「すいません……」

『聞かせてあげる』

実力行使だな。

「えつ……？」

てつきり、諦めたのだと思つたのだろう。

初音は驚いた顔をした。

『聞かせてやるよ……私の音楽』

「そんな……悪いですよ氣を使つてもうつては……初音はやつてもいいですよ?」

本当にいい子だな、初音。

気が利いて優しくて……でもね、私は無理やりじゃなく、初音自身の意志で私に共感してほしいんだ……これがわがままだつて事はわかってる。でも……この想いは止められない！

『いいから、来て』

「あつ……ちょっと、岩沢さん」

私は初音の手を引いて歩きだした。

確かに一步を歩きだした。

:  
E  
n  
d

「ちよひと阪沢さん！？　いいですよ、私やりますよ。」

「…………」

「いへこつ時だけ、無言になるのが嫌くないですかー。？」

しばらいくつして手を引いて歩いている。

その内、初音が「わかりましたもう逃げないのではなしてくだれ」と言ったので手を離した。

「もひ……意外と強引ですね、阪沢さん」

『「めん……反省します』

「もし若佐さんが男の人なら通報しますよ」

あれから初音は「立腹だ。

しかたない……今回は私が悪い。

『ホント』めんなさい

「もうここです……ホントいつもこの所はお兄ちゃんをひくつで

す

『…………ん？　何か言つた？』

「ホントやつくりです！」

「う……何か余計怒らせた。

しばらくの間、初音は無言だった。

それから、数分後。

「岩沢さんの家って結構初音の家に近いですね」

「無言に堪えれなくなつたのか、初音の方が先に折れた。」

『いや、私の家はこっちじゃないよ。』

『はい？　じゃあなんでこっちに来たんですか？』

『いや、私現在入院中だから……』

「なるほど……納得です」

「しかし、病院でギター鳴らしていいんですか？」

『大丈夫、完全防音だから……』

なぜかね……

ふーん、と初音は納得した後、また黙り込んだ。  
結構、恨みは長いらしい。

それから更なる気まずい無言空間をへて、病院についた時、私は一  
息ついた。

「あら、岩沢さんおかえりなさい……お友達？」

『そんな所だよ……山田さん』

山田さんに挨拶をした後、病室に入る。

「一人部屋なんですか……さびしくないですか？」

『いや……快適だよ？』

さもざまな機械をセットしながら、会話をする。

そして……

『よし、できた……』

「わあ……中々すい」いです

軽いモノだが、特設ステージみたいなかんじだ。

初音に歌詞カードを渡す

歌う曲はもちろん……

「2曲ですか……えつと『Crow Son』と『Alchemy』でいいんですか?」

『ああ、そうだよ、歌詞は今はないけどな……じゃあ、聞いてくれ……』

ジャーン!

私は弾き始めた。

『Crow Son』には過去の苦に思いを混ぜて……

『Alchemy』には過去の幸せと満足感でいた思いを乗せて……

私ができる最高の演奏をした。

『……………えりうだつた?』

演奏が、終わってしばらくしたが、初音は無言だった  
ダメだったんだろうか……ダメだったんだろうな

(そり、調子よく事は進まないか……)

だが、それならせめて感想でも聞いり、私は初音の肩を叩いた。

ビクン！

……痙攣しましたけど？

『…………どうだつた？』

「あつ…………えつと…………その…………」

『ダメだつたか…………』

「いや…………えつと…………すく心に響きました、最初の歌は人生の理不尽を呪つているよつて聞いていて吸い込まれそうでしたし、次の歌はすごい幸せそつで…………それでもなんだか自虐的で…………えつと…………すいません、つまく言葉にできないです…………」

……すいina、そこまで感じて聞いてくれたのか。

「あの若沢さん…………？」

『…………ありがとう』

「えつ？」

『ありがとう…………』

なんだか、涙がでそうだった。  
私はそれを必死にこらえる。  
まだ、泣くのは先だ。  
今は……聞かなきやな。

『あのや…………』

「若沢さん、私に音楽教えてください」

一緒にやらないか？ と聞く前に初音がいこと言つてくれた。  
やりたいと……

「ちよつ……じりじたんですか？ なんで泣いてるんですか？」

こらえきれなかつた……

私は、少しの間、初音の腕で泣いた。

なんだか、とても温かかった。

その後。

初音が「友達になつてくれたお礼です。今日は初音がおじりやい  
ます」と晩御飯に誘つてくれた。

一応、山田さんに聞くと「いつじりしゃい……」と言つてくれた  
ので、今日は初音の家で晩御飯を御馳走になる事する。

初音の家は病院のすぐ近くだつた。

「えつと、家にはお兄ちゃんがいますけど、大丈夫ですよ？ 怖く  
ないですから」

『そう、なんだか悪いね』

「いえいえ、全然かまいませんよ……ただいまー」

私は声が出ないので『おじやまします』と書かれたマジックボード  
を掲げて家におじやました。

「少し、まつててください」

初音はそう言って、家の中に入つていった。

数分後。

「紹介します、おにいちゃんです」

「兄の音無コズルです。こんばんわ」

出迎えに来てくれた初音の兄貴は…………『記憶なし』にそつくり  
だった。

Listen to my songs! ..... End

これは、まだ私が『死後の世界』にいたころの話だ。

私が『消えた』ライブの練習をしている時、あいつ……音無が覗きに来ていた。

いつもなら、無視するところだが、その日はたまたま、メンバーの中で演奏中に弦を切った奴がいたので、貼りなおすまでの間、私はそいつと少しおしゃべりをしたのだ。

「あんたも……辛いことがあったのか？」

「そうか……あんた記憶ないんだっけ？」

音無は不思議な奴だった、普通の……『記憶』がある奴なら、絶対に聞いてこない事を聞いてきた。

正直、話しちゃダメなんてルールはなかつたが、誰も話さないようにしてたから、そんな暗黙のルールを破つたイレギュラーな存在が私には新鮮だったのかもしれない。

私は、いつの間にか音無に自分の過去を話し始めていた。

家庭のこと……歌に出会ったこと……歌い始めて……そして倒れたこと……

音無は私の言葉一つ聞き漏らすまい……とでも言つてから集中して私の過去を聞いていた。

今にして思つと、あいつは暗くても……どんなに辛くとも、『生きる目的』を持つていてる私達がうらやましかったのではないか、と思

つた。

だって……私は『音楽』という死んでも持てる希望があった。  
しかし、音無にはそれもない、『後悔』がないのだ。

悔しかったことも、楽しかったことも音無こはない。

あつたのは、『戦つ』という選択肢だけ

そんな音無が不憫だな……と勝手に思つた私は、話のあと、飲みかけだつた「おいしい水」をくれてやつた。

普通に音無は飲んだ。

……やっぱ、ここつ記憶ねえんだなと思つた。

たく、知らない女の子と今のおまえにとっては『初めて』の間接キスだぜ？

せつかく『思い出』貯めてやつたんだから、少しば喜べよな……

……これは音無が知る事のない若沢の裏話。

Know the story behind his ... End

## episode eins ~Happy Landscape~

「岩沢さんはバンドやつてるんだ?」

『はい……一応』

「とっても上手なんですよ、岩沢さん」

「へー、今度ぜひ聞いてみたいな」

『ありがとうございます……』

初音の家で、私は夕飯を「ちやつになつていた。

しかし……記憶なしのやつ、年上だったのか……

初音の兄貴、音無コズルはあっちの世界にいた「音無」にやつくりな奴だった。

……これが世界の可能性といつやつなのだらつか?

違うのは、髪型くらいであっちの世界の音無が短髪だったのに対し  
こっちの音無は長髪。詳しく説明するなり……まあ、そんな詳しくはないのだが……全体的に長く、正面から見た時、右側の耳が隠れるようになつている。

……なんとこっかまあ……バンドでもやつてそつ。

『音無さんはバンドとかやつてないんですか?』

「えつ、俺? まさか……やってないよ」

そりなんだ……なんかがつかり。

そんな私の表情を読んだのか、なぜだか初音はジト目になつていた。

「…………岩沢さん、何だか失礼な想像してません?」

『いや……まあ……』

だつて髪型アレだしな……ひきこもり? 違つよね?

「…………」されでも医大志望の優等生さんなんですよ? 国立ですよ~?」

『…………は?』

なんですよ~?»

そんな……あいつ寒は頭良かつたのか……

「まあ、初見じゃそんな風には見えないよね……ひきこもり……とか思つたでしょ?」

『…………ええ、まあ…………すいません』

「失礼です沼沢さん…………でも…………わざがにその髪型はなんとかした方がいいと初音も思こます」

( ( 思つてたんじやん ) )

まあ……なんだかんだ言つけど兄貴があんな髪型じゃね……音無は「その内切るか……」と少しあびしそうにつぶやいていた。

「へえー、そうなんですか……やっぱり少し難しそうですね」

『まあね、最初は少し大変だけど、すぐになれるよ』

「うなんだ……俺もやってみようかな」

食後、私は音無兄弟とおしゃべりを楽しんでいた。

初音も音無も恋この手が上手く、話していくとても楽しい。

私は時間が過ぎるのも忘れて、すっかり話し込んでしまった。

「…………岩沢さん、病院に入院中なんだよね？」

『…………ええ、まあ……もういつでも退院できるんですけどね』

「あ、そうでした！ 岩沢さん、時間大丈夫ですか？」

…………あつ

『しまった！』

忘れてた！

私はこれでも入院中の患者だったんだ……しかも入院費滞納者！

(まづい……)

逃げたとか思われたら都合悪いな……

『…………すいません、そろそろ帰ります』

「そう？…………初音、送つてけ」

「了解です！」

『…………えつ…………いや…………』

結構です…………と言いたいところだったが、初音がゼひ行きたい！  
といつ田をしていたので断れなかつた…………

夜道はあんまり好きじゃない。

でも…………隣に誰かいて、一緒に歩いてくれるのは、うれしい事…………  
なのかも知れない。

私と初音はおしゃべりしながら、夜道を歩く。

明日から、私は初音と音楽を始める。

ガルデモは再び歩き始めたのだ。

H a p p y   L a n d s c a p e   . . . E n d

## Another episode Hatsume ~Her secrets~

出合つてから数日がたちました。

初音は毎日、がんばつて沢さんと練習してこます。

でも……

『初音…… いりませーいり…… いりしふー…… 忘れたへ。』

「せつ…… あこません。がんばつます」

『めいへつやひいりいりめいへ。』

「………… はこ」

中々、いまへはなれません……  
やはづ、やう簡単にできるものではないでしょ  
でも…… あきらめませんよー

だつて…… 沢さん、私に期待してくれてますから…… がんばらな  
いとこけません！

『よし…… 今田せりへりこりしておへか』

「………… あいがといひわこました……」

『おこねこ…… そんな氣、落とすなよ…… 簡単にこくもんじやない  
わ……』

沢さんが慰めてくれますが……

「…………同情はこりなこのやつ……出血してしまおむす」

今の私は……迷いつひこ……

『や、せつか……』

「指沢さん……家で練習するので、貸して貰ってだよ……」

『あ……ああ、ここせつ?』

「ありがとうございます……」

私は、指沢さんがことと離れたギターを握ると立ち上がった。

『歸るのか?』

「はこ」

『送るよ……』

「いえ、今日は結構です。初音は……今日せま自分のこれまでを反省しつつ帰る事にします」

『や、それは……』

「心配しないでください……明日には不死鳥のよう甦ります

から……」

『せつか……』

「では、さよなら」

『ああ……がんばれよ……』

指沢さんに挨拶することもなく、私は病室を出た。

「せー…………ひつたひ、つまく弾けるよつこなるとじゅう」  
独つ言をつぶやながら私は歩いてくる。

毎日、朝から夕暮れまで練習しているがあんまり上達していない気がする……いや、別に岩沢さんの指導は悪くない。習い事の先生みたいに怒らないで丁寧に教えてくれるし、なにより私を見捨てたりはしない。

もつと……もつと頑張らなきゃ……

決意を新たに、私は家へと急いだ……の、だが……

「…………鍵がありません……」

岩沢さんの病室に家の鍵を忘れてしました。  
しかもこんな日に限って、おにいちゃんは今日、遅帰りです。  
…………しかたありませんね。

「取りにいりますわ……」

実際に間抜けなんですが……

病院に戻ると、辺りはもう、すっかり暗くなっていました。

「あら？ 初音ちゃん……今日は遅いのね」

「いえ……初音はちょっとわすれものをしたです」

山田さんに事情を説明したりしながら、岩沢さんの病室へ急ぐ。  
そして……岩沢さんの病室近くに来た時、私はある違和感に気がついた。

(あれ……誰かお見舞いに来てるのでしょうか?)

岩沢さんの病室から、……瓶が聞こえる。

「…………初音は随分頑張りものだな」

それは、……とても綺麗な、……女人の声だった。

(私を知ってるみたいですね。誰でしょう?)

「でもな、……あんまり焦つてもいい事はないんだぜ?」

「ゆつくり、……少しずつ、上手くなつていけばいい、……」

「それにして、……いつまで、……ここにいるんだ?」

……全然、会話がつながりませんね。

これは、……

(会話というより、……独り言ですね、……)

(誰が、話しているんだろう、……気になるな)

少し、あつかましい気もしましたが、私もそろそろ鍵を持って帰らないとおにいちゃんが帰つて来てしまつくらい遅い時間になつてしまひました。

ちょっと悪いですがお邪魔することになります。

ノンノン

「岩沢さん、初音です。失礼しますよー」

私はそつまつて、部屋に入つた。

「…………!!」

「あれ? 誰もいませんね?」

部屋にいたのは、岩沢さん一人だった

H e r   s e c r e t   . . . E n d

## episode eins ~My Secrets~

田常が壊れるのは一瞬だった。

「若沢ちゃん、初音です。失礼しますよー」

……私はひとつ前に「待つてー」と言ことやつになつた口を慌てて押える。

その間にもう初音は入つて来てしまつた。

「……………！」

「あれ？ 誰もいませんね？」

……失敗した。

初音はもう……聞いてしまつていた……誤魔化せるか……

『どうしたんだ？……………忘れものか』

「あ、はい……家の鍵を……つて、さつ キモで誰と話してたんですか？ お姿が見えませんけど？」

『……………なんの事だ？』

「なんの事だ、って……さつき誰かと話してたじゃないですか？」

初音は私が誰かと話してたと思いこんでる様子だ……………いつも音が漏れないようにするために窓も閉め切つたままだし……………誤魔化せないか……

『……………そうか、聞いてしまつたのか……』

「ん？ どういう事ですか？」

意外と、早かつたな……

「うーん」とだよ、初音上

一  
えつ

あなたが聞いたのは、私の声だよ

私は、順を追つては話し始めた。

「2日前、声が戻ったんだ」

「はあ……よかつたですね、あんまりきれいな声だったんで誰かと思っちゃいましたよ……でもなんですが言つてくれなかつたんですねか?」

— なんでだと思ひ？

「わからませんよ…………誤魔化せないでください」

悪し……それには初音……あなたに私の歌を聴かせるためだ」

...と云ふ事ですか?

だよな、そう思うよな……でも大切なんだぜ？

「最近……悩んでるだろ？」

「……そんな事ないです」

初音……無駄だよ、あんたは思つてることが顔に出るんだ。

「だからや……あなたに音楽の楽しさを改めて教えたいな……と思つたんだ」

「でも……いきなりは歌えなかつた…………だからこつそり訓練してたんだよ」

この2日寝ないでな…………

「…………だけじゃ、ばれひやつたからもう隠さない」

「聞いてくれない？ 私の歌を」

私は初音に問い合わせた

初音はしばらく無言になつた後

「いいんですか？ 私なんかで？」

そう言った。

あ……

「あんたじやなきやダメなんだよ…………初音」

この世界に来てから初めてできた私の友達。  
いきなり誰とも知らない私なんかのために一生懸命になつてくれた  
あなた。

だから…………

「あんたに聞いてほしいんだ…………」

私は、やつて初音の手をとつた…………

若沢

とつあえず、初音の手をつかんだ私は、病室を出た。

「えつ……どこ行くんですか？」

「…………秘密」

「なんですかそれ！？」

すでに場所は決まっている。

公園だ……あの公園に行く。

あそこは私たちの始まりの場所だ。

あそこで……私は初音に聞いてもらいたい。  
私は歩き続ける。

「あれ？ 若沢さんどこ行くの？」

「散歩だよ、山田さん」

「わつ…………え？」

驚いた山田さんを置いて私は病院を出た。

初音

病院から、出て少し歩いたところで、若沢さんは手を放してくれた。  
これから、歌を聞かせてくれるらしきが、一体どこに行く

んだる「へ.

「岩沢さん、どこに行くの？」

私が改めて聞くと岩沢さんは短く「公園」と答えてくれた。

公園？……あつ！

「もしかして始めてあつた所？」

「やうだよ」

「遠くないかな？ちょっと……」

「でも……あそこは、初音が私に初めて声をかけてくれた場所だ。  
だからあそこで聞いてほしいんだ」

そう言われたら、何も言えない。

私は岩沢さんが歌を聞かせてくれる……岩沢さんの本当の実力が見  
れる。

そう思ひどどからか、抑えきれない何かが溢れ出してくるのが私  
にはわかった。

「わかつた……聞かせて。貴女の歌を」

「ああ、見てる」

岩沢さんはそう言って前を向いて歩きました。

私もそれに続ぐ。

彼女はどんな歌を私に聞かせてくれるのだろうか？

すっかり遅くなってしまった。

初音……待ってるだろな……一人で。

俺は家路へと急ぐ。

でも、もう前ほどは急いでいない。

なぜか……

それは最近、初音に友達ができたからだ。  
名前は岩沢まさみ。

最初に会った時は、なんて皮肉なんだと思った。  
彼女は声が出ないと初音は言っていた。

医学大学志望の俺にはわかる。

彼女は失語症ではなく、失声症だった。

『失声症は、主に家庭環境が悪く、多大なストレスを与えた人  
間が発症する精神病』

俺にはわかった……

初音は、無意識のうちに同族の彼女を友達にしていたのだ。  
自分と同じような境遇の彼女に引き寄せられているのだ。

彼女が、来た時なぜ俺と初音しかいなかつたか……  
彼女はうすうす気づいていたはずだ。

俺たちには、親がないのだ。

小さい時、俺と初音を残して親は消えたのだ……

あれから、初音はあまり笑わなかつた……  
俺しか世界にいなかのようこ、友達もつべらうず、ずっと俺と一緒に  
にいようとしていた。  
でも……

彼女が『初音の世界』に来てから、初音は変わつたのだ。  
毎日のように彼女と遊び、毎日笑うようになつていた。

彼女は、初音に救われると同時に初音を救つていたのだ……

これから……もつともつと……よくなつていけばいい。

そう、思い歩いていると……

(あれは……)

田に若沢と歩く初音の姿が映つた。

(まつたく……)

元気になつたとたん夜遊びかよ……

俺はすぐに話しかけることはせず一人の後を追つた……

山田

どうして、黙つていかせてしまったのだろう……  
それはきっと若沢さんが「散歩」としゃべったからだ。

彼女は……失声症がいつの間にか治っていたのだ。

彼女は不思議な患者だ。

植物状態から奇跡の復活を遂げたと思ったたら、親に逃げられ、わけのわからない友人から巨大な荷物が届いたりして、毎日どこに学校の制服か分からぬ制服を着て、ギターを病院で弾きながらして、無銭衣食住を要求していく……

でも、そんな彼女をなぜか憎めないのだ。

奇跡をおこした彼女は自分の夢に向かつて猛然と挑んでいる。

その姿がなぜか……まぶしいのだ。

つるやくてたまらないはずのギターも結局一度も苦情が来ない。

彼女のがんばっている姿は……この病院に希望といつもの巣立てるのかもしれない。

でも……だからと書いて、このままにしておくわけにもいかない……

「彼女……どこ行ったのかしら？」

彼女を探さなければ……しかし、どう?

しばらく考えた私は……

(…………あそこだ!)

一つの場所が頭に浮かんだ。

一度だけ、岩沢さんがうれしそうに話していた。

…………最近よく来る初音ひやんと出会った場所。

(…………公園だ)

わいと彼女はそこにある可能性が高いだらう。

私は、院長に許可をもらひ、病院を出た。

岩沢

歩き始めて、数十分。

私達はついに公園についた。

「ああ、聴かせてやるよ……私の歌……Girls Dead Monsterの歌を……」

「Girls Dead Monster?」

「私がやってたバンドの名前だよ……Girls Dead Monster……略してガルデモってな」

私は作業しながら、さまざまな事を初音に話す。

自分が閉じこもつてた日のこと……ゆりが声をかけてくれたこと……

そして彼女たちと別れたこと……

死後の世界のことはさすがに割愛したが、ほぼ真実を私は話した。

## 初音

「………… いろんなところかな、私の今までの人生ってやつは……」「………… やっぱり凄いです、岩沢さん……」

岩沢さんの過去の話を聞いて、私が思った感想と言えば…… 隨分と陳腐なものだつた。

……自分の人生にしつかりと向き合つて『ニンゲン』と向き合つてない『モノ』ではこんなにも差が出るのだ……

「別に凄くなんかないよ……私は、逃げて逃げて逃げて……その先で偶然答えを見つけただけだ……私は初音と同じ人間を……神に見放されて……それでも抗い続ける人間なんだ……」

「………… 神には……運命には勝てませんよ…………」

だつて私はもう……負けているのだから……

その言葉を聞いた岩沢さんは…………なぜか笑つた……

## 岩沢

神には……運命には勝てませんよ……

初音の言葉は、私にある光景を思い出させる。それは、ゆりと私の初めての会話だ。

「はは……」

「何がおかしいんですか？」

「いや……今の言葉、ゆりに聞かせてやりたいなと思つただけ」

「ゆりつて……さつき言つてた、お知り合いの？」

「ああ……なあ、初音」

「…………なんでしょう」

「私もな……初めはそう思つてた……でもな、ゆりが言つたんだ『  
そうね……確かに私たちは無力なのかもしれない……でもね、だか  
らつてあきらめていい訳じやない……抗い続ければ、いつかその支  
配者ぶつた大バカ野郎の顔面に一発くらわせてやれるかもしれない  
……あきらめず、戦い続ければね……』ってな、傑作だろ？　あい  
つは……ゆりはな……神をいつか殴つてやるつて……本氣で言つて  
んだぜ？　本気で神に……人生に抗つていたんだ……」

本当に……強い奴だよ、あいつは……

「凄いです……その人」

「だろ？　だから、もう少しもつちよつと……あと少しだけ……つ  
らい時に努力するようにすればいいんだ……」

さて……話している内に準備は整つた……やるかな……

「さあ、準備は整つたぜ？」

私は初音の方を向いた……

初音

「さあ、準備は整つたぜ？」

岩沢さんが、私の目を見る……

ついに……岩沢さんの全力を見ることができるのだ……

「……お願いします」

さあ、やれり……そつまつて前を向いた岩沢さんの、目が変わった。

岩沢さんが、私に何かのスイッチを投げ渡した。

「なんですか？」『れ』

「ん？ 見ての通りスイッチだけど？」

「……いや、それはわかりますけど……」

「ああ、曲の始まる時、押してくれない？」

なんでも岩沢さんが言つとこじろによると、これを押すと仲間だったサイドギターさん2人とドラムさんの音が流れるそつだ……

「つて、流れる音に合わせて弾けるんですか？」

「おいおい……何万回弾いたと思つてんだよ……じゃあ、頼むわ……

「了解です……ポツチッと……」

私はボタンを押した。

最初は……crows song……

The place I feel like this  
forever . . . who says it was a  
iso  
If you just say . . . it is  
annoying—— raven feathers wash

ed away , get away!

歌詞が、付くことでこの歌は、音楽に出会って一人で歌い始めたころの曲だとわかった。

(「るるやこ」とだけ言つなら……漆黒の羽根にのまれて消えろ……)

大人の助言も友のアドバイスも……このころの歩き始めた若沢さんにとってはただの雑音でしかなかったのだろう……そして彼女は一度、全てを奪われた……

I 'll be here forever because

I like singing on stage darkness closed in , I will sing You're tired because you ! You can reach the back . . . The back light . . . like a song , a song . . .

ふと周りを見ると、たくさんの人気が、足を止めてこちらを見ていた。

たしかに、気になるよね……すぐきれいでいい声だもん……

『――』

独特の始まりかたをする2曲目の中の歌はAlchemy

I want to . . . can live in d

e f i n i t e l y o n l i v i n g i n d e f i n i t e  
l y a l l c o m e t r u e

(無限に生きたい……そうできたら、全て叶う)

再び、音楽を始めた岩沢さん。

仲間と出会い、彼女は……満たされていた時の歌……

Looking back and walked away . . . It was also really bad at , I'm already tired . . .  
Beaming it touches goes . . .  
I go on living the way the song was so . . .

そして彼女は、なぜか仲間と別れたのだ……なぜ？

(つて、わあ！ すごい人だかりです！)

……いつのまにか、私の後ろに……大勢の人気が……つて！？ 警察

しまった、忘れてた……そりやこんな遅い時間にゲリラライブなんてやつたら、警察も来る……

私は、岩沢さんに田で合図を送る。

(今のことには引き上げましょ！)

私の合図を受けた岩沢さんはちりっと、警察を見た後……

「..... My song .....

……………歌い始めた……………

音無

ついて来て驚いた。

「さあ、始めましょうか……………」

彼女……………声が戻ってる！  
なるほど……………完治したのか……………  
しかし……………なにするつもりだ？

そう思いながら、見守っていた俺の前で、彼女は歌い始めた……………

普通の歌とは何かが違う……………いつもTVで見るような安い歌手たち  
とは比べ物にもならない……………

その歌には信念が込められていた。  
この歌は、彼女の人生そのものだ。

辛くとも、悲しくても……………必死に生きてきた彼女の証なのだ……………そ  
う理解できた。

だからだろう……………警察が来た時、俺はとっさに周りの人間に「押さえ  
ろー」と言つてしまつた。

そして岩沢が最後の歌を歌い始めた……………

岩沢

Welcome . . . you crying, yo  
u'll correct what I human lone  
ly . . . . . . .  
I say, dropping a tear, no  
t a lie so beautiful . . .  
I'll give you a real word .  
. .

この歌は、私の答えた。

これを見つけたから、私はあの世界から去る事が出来た……

ゆっくり観客を見まわしながら歌う。

みんなは……茫然とこの歌を聴いていた……私を取り押さえにきた警官も今はこの歌に聞き入ってくれている。

Confidence and strength an  
d fight again . . . This song . . .  
It says so much . . . tears  
feel . . . dirty, ugly in the wo  
rld met in miracles . . .  
Thanks . . .

そして、私は歌い終わつた……

Their feelings in my heart . . . E

$n_d$

## Another episode Hatsune After lives

……岩沢さんが歌い終わった。

私は茫然と立ち尽くしている……ダメだ……」の想いを何と表現すればいいのだろ?……

(言葉にできない)

それほど、岩沢さんの歌は……神がかっていた。

どんな歌でも、彼女の前では劣ってしまいますだろう。……そりゃ君の歌手では話にならない……彼女の歌はそんな領域だ。

周りを見ると観客も……警察官もみんな、固まっていた

(ああ……みんなも同じ想いなんだな……)

人間は自分の処理能力を超えたものを見ると、脳がフリーズしてしまふんだ……

そんな事を考えていると誰かが私の手を引いた……

「どうした?……すらかるや」  
「えつ……はい……」

岩沢さんは私の手を引いて歩きだした。

その後、病院に戻るには『まづことこの辺の意見により、今は私の家に泊めてこく』と云った。

「それで……どうだつた?」  
「えつと……凄すきで言葉にできません……」  
「わつか……そつやありがとい」  
「やうだね……おいかつた……」  
「ありがとうござります……」

「わからぬ兄ちゃんも聞いていたり……」

「しかしどうじよね……もしかして本業は歌手さん?」  
「違いますよそんなものじゃないです……」

そんな風に話をしている内に時間は過ぎ……

「そろそろ初音、寝いです……」  
「やうだね……寝ようか?」  
「わですね……」

私の記憶はここまででした。

A f t e r l i v e …… E n d

「あーあ、こんなところで寝ちゃって……」

少し目を離した隙に初音は寝てしまったようだ……

「「あんね、岩沢さんすぐ」「」……」

「…………別に大丈夫です…………結構うれしいので」

岩沢さんの膝の上で寝てしまつた初音を俺はどうとしながら、岩沢さんがいいなり……

「じゃあ、もう少し、そのままでいい?」

「ええ、かまいません……」

「のままにしておくとさぬ……と、なぜか岩沢さんがまじめな顔をしていた。

「ん? どうした?」

「あの…………少しお話しませんか?」

「うん? 僕はいこよ?」

「…………大切な話です」

その表情から、本当に重要な話をするのだとわかつた。  
俺も表情を正す……

「今日は、初音さんを遅くまで…………すみませんでした」  
「いじょ、初音にはちよつといいこんだ……あいつはまじめな奴だか  
ら……これからこの茶田つ氣があつたほうがいい……それより、今

田のライブは本当にすごかつたね……びっくりしたよ？

「ありがとうございます……でもまだまだです。もつと上手くならないと……」

「そり……無理しなこようでね？」

「…………はい」

「それで本題に入らうか？」

「…………はい」

彼女はもう一度自分の言つ事を整理するよつに少し、黙つた。  
そして顔を上げる。

「あの…………私をここに住まわせてくれませんか？」

「…………なかなか難しいね、そもそも俺や初音がいいと言つても  
『両親がいいとは言わないだろ？』

なんだかんだ言つても家族だ。

彼女がどんな経験を積んで何を思つたといふで、この関係だけは絶  
対に崩せるものではないだろ？

「俺達、兄妹はあんたなら大歓迎だよ。でも……君の『両親はなん  
て言つかな？』

「両親のことなら大丈夫です……もう、いませんから」

我ながら、墓穴を掘つたものだ……彼女は初音と同じだと言つたの  
は自分なのにな。

「それは……すまん、でも……いいのか？」

「音無さんは……なぜ私が病院で暮らしているか分かります？」

「…………それは、失声症だから……だろ？」

「違います。私は……本当は目覚めてすぐに退院できるはずでした。でも……親が……親が逃げたんです。私はもう目覚めないだらうつて……そもそも原因を作ったのは自分たちのくせに……私の足を引っ張り続けた挙句、私にお金をかけたくないくて……逃げたんですよ！」

……なんだと。

（そんな……なんて親だ。こつちは……一緒にいたくてもいれないのに……ずっと一緒にいたいと初音がどんなに泣いても……一緒に入れないのに！）

それを見捨てて、逃げただと？……狂つてやがる……

「…………わかつた、いいよ」

「ホントですか！？」

「ああ、別にかわいそうとか思つたわけじゃない……って事はわかるよね？」

「はい……これからよろしくお願ひします！…………コズルさん！」

「ああ、いらっしゃようしく……まさみさん」

分かつてているとは思つが言つておけり……

俺が彼女に感じたのは同情や未練などといった気持じやない。俺が感じたのは……怒りだ。

この世界に対する怒りだ。

俺は俺たちに対する当つけに怒りを感じた。だから……抗つてやるのと思つたんだ……

「…………一つ、約束してくれ」

「なんですか？」

「初音と一緒にいてやつてくれ」

「はい……喜んで」

……これは、妹が知る事のない俺と彼女の約束の話だ。

P r o m i s e . . . E n d

## episode eins ~Today, I start walking~

But . . . I will sing Let me  
see . . . destiny . . .

……夜明けだ。

温かさがある場所で田覓めるのはあの世界以来な気がする……今日、私は退院しよう。

そして……ここから、新たな生活を始めるんだ……

「…………おはよひ、咲みさん……」

「おはよひおはこめす、コズルさん。…………咲み付けなくていいですよ? 年下ですから、呼び捨てでもかまわないです……」

正直、さん付けは、はずかしい……

「やつ……じやあ、俺も呼び捨てでいいよ? ……咲み?..」

「やうですね……コズル」

……つて、なんか新婚夫婦みたいなんですが?..

互いにそんな事を思つてしまつたのか……私たちほんと少し赤くなつていた。

「おはよひおはこめす……岩沢さん、お兄ちゃん」

「おはよひ、初音……今日から、この家に住むことになったから」

さうつと咲みはじめる……

初音は寝ぼけ眼をこすりながらも、意味を理解したよつで……

「ふえ……？…………せい！？ほ、ほんとうですか！？」

「ああ、まさみは今日から俺たちの家族だよ」

「まさみ！？…………い、いつのまにそんな親しく……ま、まさか……昨日初音が寝た後……お兄ちゃんと岩沢ちゃんは…………！」  
を一人の愛の巣に！？」

「「なつー？」」

呼び捨てが変な誤解を招いた！

「違うよ初音！…………意味じやないから！……ただ、同じ家に住んでるのに苗字は少し変だな？」

「ああ、やう言つ事ですか…………安心しました」

「そうじつこと…………ね？お兄さん？」

「あれ？ゴズルじゃなくなつた訳？」

「ああ、実は恥ずかしいんで……」

すこしきびしそうな顔をする音無…………まあ、悪いな。私にも羞恥心とこりものはあるんだ。

わて…………話はこれくらいでござるか。

「飯にしようぜ？」

「あつ…………はい、やうですね」

「…………どうが家主なんだか……」

…………私は歩き始めたのだろつ。

## episode eins final ~New steps~ (前書き)

ひとつあげず……一区切り付きました……

いいから、繋げるかどうかは……少し考へる」といっつまく

盛さんの意図……お願いします

「」飯を食べた後、私は一人と一緒に病院へ向かった。  
……さて、病院側……とくに山田さんには何と言おうか?

「あ……山田さん…」

病院に着いてすぐ、私は山田さんを見つけた。  
声をかけると……山田さんは

「あ、岩沢さん……退院するのね」

「」「」「」「」「」

何か一発で当てときやがりましたけど?  
いつから、属性にエスパーがついたんですか?

話を聞くと山田さんは、昨日のライブを見ていたらしい。それで帰つてこない私がその内、退院するのだろうと思った、と山田さんは話した。

しかもご親切なことに、荷物も大方、まとめてくれてたらしく……もし、私が退院しなかつたらどうしたのか……と聞くと、山田さんは少し苦い表情を浮かべ……

「別によかったわよ……実は近いうちに強制退院になる予定だったし……その前に新しい生活が見つかってよかったですわね……」  
「…………私、その内無一文で放り出される感じだったんですね……」

よかつた……住居が見つかって本当によかつた……

それから、担当医の先生とも話をした。

……主に病気じゃなくて、料金の話だつたが、私は済して譲らず、親負担で話を押し通した。

「…………お願いします。これしか認めませんから」

「…………わかつたよ。絶対、ご両親見つけなきやね。絶対に」

「ごめん先生……」

私は、青い顔して「とばされる……」そのままじや、とばされる……と呟く先生を背に病室を後にした。

「あ、まさみ？ 荷物積み終わったよ！」

病院の外に出ると、トライックに私の荷物がすでに積んであり、脇で音無と初音と何人かの知らない人たちがコーラ片手に話し込んでいた。

「すいません……迷惑をかけてしまって」

「いえいえ、初音は全然平氣ですよ？」

「別にたいした量じゃなかつたし……岡崎たちが手伝ってくれたから」

「岡崎？」

「ああ、学校の友達」

そう言つて音無が知らない人たちの自己紹介を始めたのだが……なんだか見てくれが悪いといふか……やせぐれていふといふのか……そんな友達が多いんだが……

音無の話によると、金髪の頭悪そうのが、春原陽平。隣にいる田付きは悪いが顔をはそこそこ整つていて、頭の悪い女子に受けそう

なのが、岡崎朋也。その岡崎の隣で笑つてゐる線の細い氣の弱そうな少女が

古河渚……つて、おい大丈夫か？　いいのかこんな悪そうな一人と一緒にいて……そして最後に煙草をくわえたやせぐれあんちゃん風な男が古河秋生……渚さんのお兄さんだらうか？

「すいません皆さんにも」迷惑をおかけしてしまって……」

「何……いいてことよ……小僧の友は俺の友、つまりお密様だからよ」

「何言つてんだ？　おっさん……」

「それよりさ……キミ、かわいいよね？　どう？　これから、僕とれ……何か食べにいかない？」

「…………いいえ、結構です」

……何か、一筋縄ではいかなそうな人達だ……」の春原は馬鹿らしげ……

ちょっと露骨に顔に出てしまつたのだろう、女人……渚さんが話しかけてくれた。

「『めんなさい』……えっと……」

「若沢です」

「若沢さん……春原さんは悪い人ではないんですけど、ちょっと頭が弱いだけで……」

「地味にヒドイこと言つよね！？　渚ちゃん」

「あー？　てめえ……このキンピカ小僧……俺の娘がひどいだと？」

「ひいいいいいー『』『めんなさいー』」

む、娘つて……

このやさぐれあんちゃん<sup>2号</sup>（1号は藤巻）は保護者？……しかも渚さんの？

不覚な事にその疑問が顔に出てしまつたりじ。

渚さんは……

「まあ、始めての人にはよく言われます……気にしなくても結構です」

「あ、ありがとうございます……すみません」

何か、わざわざから、ありがとうとか、すみませんとか言つてばかりだな……

その後、私は岡崎軍団（なんかもう集団。岡崎本人とはしゃべっていないけど）に音無家……今日から、私が住む家に送つてもらい、引っ越し作業を手伝つてもらつた。

さすがに悪ふつてゐだけあって、みんな体力には自信があるらしく、作業は昼前には終わつてしまつた。

「じゃあ、俺たちはいくぜ……また呼びな岩沢の姉ちゃん?」

「はい……その内お礼に行きます。今日はありがとうございました渚さんのお父さん」

「お父さん……いい響きだぜ……」

「何言つてんだ? おっさん……」

「てめえも見習えつて事だよ! 小僧!」

「言つてないだろ……」

そうして、岡崎軍団は去つて行つた……

「はあ……なんか疲れる人たちですね」  
「そう? ……まあ、最初はそつかもしれないけど、いい奴らだったでしょ?」

「そうですが……」

「初音もあり……得意ではないかもしません」

「初音まで?」

「…………だつて、あの人たちとこると初音は薄くなつてしまつますから…………」

「…………」「…………」

「何か言つてくださいよー? 岩沢さん、おにこちゃん!…?」

悪い……初音、何とも言へないぞ……それに関しては……

そして、夜。  
音無家の食卓で……

「せひ、それでは……岩沢まさみさん……我が家へよひこなれ

「よひこなれー」

「ありがとうございます……これから、よろしくお願ひします」

私は音無兄妹に迎えられ、この家の暮らし始めた……

これは、出発になるのだろうか?

……それはまだ、わからなー……でも。

これだけは……言える。

これが……この光景が……笑い合う人たちと食卓を囲む光景が、私がこの世界に戻つて来て始めて掴んだものだということだ……戦いはこれからだ……

私はもっと多くのものを掴んでみせる……

N  
e  
w  
  
s  
t  
e  
p  
.  
.  
.  
E  
n  
d

ゆりへ

そつちの世界はどうだ？

ガルデモはちゃんとやつてるか？

私なら大丈夫だ……神への復讐、任せたぜ……

岩沢

(おかしい……)

どう考へても、おかしい。

なぜ、死んだ後の世界に手紙が届く？

なぜ、彼女は転生後も同じ人生を歩み続けられる？

天使が嘘を付いているとは思えない……彼女は嘘を付けないだろ？  
から。

ならば、導ける答えは一つ。

(この世界にはカラクリが存在する)

不老不死でいられ、土くれから武器を生み出せるカラクリ……

それを探る必要がある……・

『はい、なんでしょう?』

『遊佐? ちよつと私の部屋に来てくれる?』

私は動き始めた。

W h y   i s   s h e   t h e r e?   . . . E n d

この世界に神はない……なら僕が神になろう。  
この腐った世界を僕が癒そう……

「直井くん……この書類お願い」

「はい、わかりました会長」

普段僕は、会長と一緒に生徒会で活動している……正直、あんな人間もどき（ゆり達が言つ所のNPC）の為に僕が働く理由は無いのだが、仕方ない……

なんせ、今の僕はNPCの生徒会副会長なのだ……

偽装は完璧だ……普段ちゃんと授業に出て、テストでも全教科90点以上（当たり前だ……何年も同じテスト受けいれば、そりや暗記できる）誰にでも親切で365日ほぼ、同じ言動と行動しかしない。

しかも、会長こと天使様は、現在SSSとか言つ奴らの相手で精一杯だ。

これほどの幸運……やはり神に相応しいのは僕だ。

..... Another Player.

会長が使っているソフトのダミー……「トイツさえあれば、若干性能は落ちるが、会長と同じ力を得ることができる……

催眠術と地下牢獄……準備は整つた……

さあ、後はSSS……あいつらが馬鹿をするだけでいい……

それで、全てが変わる……

僕が、神になる！

I  
w  
a  
s  
y  
o  
u  
n  
g  
b  
a  
c  
k  
t  
h  
e  
n  
:  
E  
n  
d

episode zwei | You Never Surprise people

第一期始動です

これからもどうぞお楽しみください

朝、目が覚めると同時に頭が痛くなつた。

「…………なんですか？」「これ…………」

それは、私の目の前に高く積み上げられていた……

現文、古文、数学1、数学A、理科、現社、保体、家庭、情報……

「見てわからない？」  
「わからないですか？」

いや……そんな不思議そうな顔すんなよ……

それは、参考書の山だった。

先ほどあげた教科の参考書が一教科につき平均5冊くらい積み上げ  
られている……

「正直……わかんないんですけど……お兄さん？」  
「まさみには……学校に通つてもう？」  
「Why? I do not know the meaning.  
（なぜ？ 意味がわからないんだけど？）」  
「That's, I know you promised?  
I stay with me the other day at  
night Miku?（それはね、約束しただろ？ こな  
いだの夜に初音と一緒にいてくれって？）」  
「…………」

あの約束つて、一緒に学校に通えつて事かよ！」

「 Apart from me , I'm not my brother to go to school ? 」（別に私、学校に行く必要無いんだけどお兄ちゃん？）

「 To be sure . . . great English . . . I really mind ? 」（確かにね……凄い英語力……実は頭いいの？）

「 No , no . . . ( いえいえ . . . ) 」

「あの……さっきから何を話しているんですか？ 一人とも……初音にわかるように話してください！」

「 初音、お前……兄はこんな頭いいのに……不便なやつ。」

「 三咲？ 但我？ 怎麼？？ 兄弟？ 」（初音はああ言つてますけど、どうします？ お兄ちゃん？）

「 這令人感到驚訝 . . . 我已經習慣了中國 . . . 」（本当に凄いね……中国語まで使えるんだ……）

「 さらばにわかりにくくなつた！？」

驚く初音……まあ、悪いが私は人より勉強できたからな

……真実を言つなら、音楽に出会つ前は勉強とバイト以外やる事がなかつたからだが。

「 . . . ( まあ、前の学校も事実

上クビになつちやこましたからね……わかりました勉強します……」

「…………？」

「いや……じゃあ再受験で」と云ふのかな?」

「…………? (できるんですか?)」

「…………? (じゃあ、お願いします)」

Tsute (ああ、大丈夫……ツテはあるかい……) 「

「それじゃあ、朝)はんにしようが……」

「はい……おい、初音どうした? "J飯だぞ?"

「まつ…………初音は何を…………」

“Jつやひり、朝から限界を超えたまつたらしいな…………

「飯だぞ?」

「は、はい準備しましょ'つー」

すぐに復活したがな。

その後、飯を食つてゐる。

「ああ、さうだまやみ?」

「なんですか、お兄ちゃん?」

「そのままで止めませんか? 初音何かおかしくなりそうです

…………」

「今日、俺達と一緒に学校に行つてもいいから

「…………何ですか?」

「学校見学、今日しか時間ないんだって…………」

……正直、行くか迷つか迷つた。

でも……

「わかりました」

「やったーーー！ またみちやんと学校ですかーーー！」

初音……その時は反則だ……

そんな理由で私は今日、学校に行くことになりました。

You never surprise people? . . .  
nd E

## episode zwei ~Dead World Front~ (前書き)

前回3番目に使ったのはロシア語です

音無は設定上、勉強が出来なくてはいけないので……

ついでにこれからもクラナドは登場します

keyキャラクターは物語上、重要な役割を担っているので外せないんです

ご了承ください

では、姫龍の群像劇、引き続きお楽しみください

「じゃあ、後でね……生徒会長が玄関で待ってるはずだから」「わかりました……10時ですね、しつかり行きますから……」「残念です……初音、せつかくまたみなさんと一緒に学校に行けると思つたんですが……」

「大丈夫だよ、学校で会えるかどうか掛け合つてみるから……」

「じゃあ、行つてらっしゃい」

「行つてきまーす!」「S-tu-n dem? k!」

「何語!?」

私と初音のシッピミが玄関に響いた……やるな……音無。

一人を見送った後、食器を洗い、洗濯物を干して……シャワーを浴びる。

「さて、どの制服を着ようか……」

前の学校の制服とSSS制服……私は少し迷つたが、SSS制服に袖を通した。

やはり、新しい学校には「希望」というものを背負つていきたい……

(よし……準備完了)

玄関に鍵をかけたのを確認し、私は家を出た。

さて……新たな学校とは一体どんな所だろう……楽しみだ。

D e a d   W o r l d   F r o n t   . . . E n d

今回からクラナドキャラ本格参戦です

贊否両論あると思います

感想待つてます

この町はキレイだ……

忘れない思い出が染み付いた町だから。

……この町は嫌いだ。

「あ、おはよー」やこます生徒会長さん……

「おはよう」

「岡崎、今日書類持つていいくから」

「ああ、持つてこ」……

「岡崎……」

「誰か助けてくれー！春原だーー！」

「僕の扱い酷くないですかー？」

なぜなら俺は生徒会長だから……

はじめは、ほんの「冗談」だった。

春原と一緒に冷やかしで生徒会長選挙に出たのだ。

結果は予想通り、惨敗……となるはずだったのだが……

「しかし意外だよねー、岡崎がまさか生徒会長になっちゃうなんて

……」

「まつたくだ」

「しかも『生徒会長になつたからには無断欠席や遅刻は絶対ダメだ』

つて、副会長の女の子が朝家に起こしに来てくれるんでしょ？

はたして、それが幸か不幸か……「うらやましい」

「不幸だよ……親父には誤解されるし、同棲疑惑は湧き上がるし……」

「一体どんな嫌がらせだ」

「でもさ、その子かなり美少女じゃん!…」

「めっちゃ、強いけどな……」

「ウソだろ?」

「一回部屋に鍵をかけたら、親父の許可を取ったとか言つて、ドアをぶち破りやがったんだ……」

「……大変だな」

「ああ、まつたく……じゃあな」

「どこ行くんだよ？ 教室にしちだぜ？」

「今日は、生徒会長として接待の仕事だ」

「ああ……」苦労だね

「じゃあな」

俺は春原と別れて生徒会室に向かつた。

一応、生徒会の仕事はまじめにやつている。

成績も、内申も生徒会長になつてからは悪くはない。（とこいつよつ、悪くさせてくれない）

これはこれで悪くないかもな、将来的に……そつぽつしている自分もいた。

バスケットを無くしてから、無気力だった俺は悪ふざけから始めたこの大役を見事こなせるだらうか？  
そんな事を考えながら、部屋の戸を開けた。

「おはよー、生徒会長……今日はすいぶん粋なマネをしてくれたな  
「な……なんの事かな」

中には生徒会副会長、坂上智代様が全身から悪鬼の如きオーラを出しながら鎮座しておられた。

「どほけるのか……自分の部屋と親父さんの部屋を入れ替えただろ……」

「さあ、記憶にないな……」

「ならば、思い出させてやる。………… 今日の朝、お前がまた部屋に鍵をかけていると思った私はリビングにあった『智也君が寝ていたら起こしてあげてください坂上さん』と書かれた置き手紙に従い、扉を蹴り破った。………… そしたら、中で寝ていたのはお前の親父さんで…… 私は見られる前に気絶させて、お前よりも早く登校してここでお前を待っていたという訳だ…… どうだ岡崎？ 私の話の感想は？」

「不法侵入して器物破損の挙句、暴行に脅喝か……ダメじゃね？」

俺は正直に感想を告げてやると…… 智代はさうに怒る。

「……殺す

「残念だけどな、今回そりゃ無理だ」

「なぜだ？」

「俺は今日、編入希望のとある少女の学校案内をしなきゃならないんだよ……だから、今絶するとか学校が困る」

「くつ……卑怯だぞ」

悔しがる智代…… まあ、普段さんざんやられてるからな、これくらいは許されるだろ

「今日は見逃してやる。………… そのかわり学校案内しへじるなよ

「ああ、任せとけ」

「やうだな、信じてやる」

そう言って、智代は生徒会を後にした。

……今日は生き延びてやつたぜ。

「さて……確かに来るのは10時だったか……」

後、1時間半つて所か……

「何して過ごしそうかな……」

正直ヒマだ。

でも、授業には出たくないしな……しかたないな。

(寝るか……)

俺は寝た。

「…………ん」

時計を確認すると9時55分。

「そりそろだな……」

我ながらグットタイミング。

俺は、玄関に向かった。

校門前には紅色の奇麗な髪をした少女が立っていた。

$n_d$

その学校は、坂の上にあった。

電車で30分揺られ、言われた通りの道を歩く。

なぜか死ぬ前の事を思い出す……

あの頃は、毎日学校に行くのが苦痛で仕方がなかつた。別に友達がいなかつた訳じゃないし、勉強ができなかつた訳でもない。

ただ、生きるのが苦痛だつただけだ。

目的もなく希望も持てずただ諾々と生きていたあの日。

あの日から……私は歩き出せているのだらうか?

校門の前に着いた……

音無が言つこには生徒会長とやらが出迎えてくれるらしいが、まだ姿はない。

まあ、生徒会長も授業があつたりと忙しだらうつ…………少し待つか。  
五分くらい待つただううか?

「すいません! お待たせしました!」

「あつ……こえ全然そんな事ないで……

「どうかしましたか…………って、あつ……

走ってきた生徒会長はこの間、引っ越しの時、手伝つてもうつた……

「岡崎さん?」

「ああ、そうだ……じゃねえ、そうです、生徒会長の岡崎朋也です  
「生徒会長だつたんですか……」

びっくりだ……この姿で生徒会長……世の中は広いな。

「驚きました、まさか生徒会長とは」

「俺も驚いたよ、この間手伝つた…………えつと」

「ああ、岩沢です」

「悪いな、まさか岩沢だとは思わなかつたよ、何転校でもしてくれん  
の?」

「ええ、まあ……そんな感じです」

実際は約束を守るためであつて、正直学校なんかどうでもいいのだが。

「やめとけ、ろくな奴がいねえぞ? この学校……大体、俺が生徒  
会長やつてる時点で予想つくだろ?」

「確かにそうですけど……岡崎さん見た日より優しそうですし、学  
校も特に落書きあるわけじゃないし、まあ……大丈夫かなつと……  
それより岡崎さん私が知人と分かつたとたん、敬語じゃなくなりま  
したね……気になせんけど」

「普段、散々無理させられてるからな……まあ、学校案内はちゃんと  
とするからさ、じゃあついて来い」

そんな適当生徒会長、岡崎に連れられ、私は学校を見学することに  
なつた。

外見もそつたが校舎の中も目立つた傷や破損はなかつた。

しかし……

「なんでこの校舎、所々人型に凹んでるんですか？ 恐いんですけど……」

「ああ、それは春原が飛ばされたり、めり込んだりした後だから気ににするな」

「春原さんって……あの馬鹿そつた金髪の健康低能児さん？」

「ああ」

ああつて、随分簡単に肯定するな、この人……

「岡崎さんって自分の友達が馬鹿にされてもなんとも思わない人ですか？」

「友達……ああ、一応俺の友達と……本人は信じてるからな、あまり蔑まないでやってくれ……喜んじまつから」

「……そうですか」

まあ、友情の形つて人それぞれだよね……

そう思った私と岡崎が校舎を歩いていると何処からか「筋肉筋肉！」  
といづ声がした。

「…………なんですか？ 今のは」

「この学校の名物『革命キンニクンの咆哮』だ。聞くと筋肉の量が5%アップするらしい」

「意味分かんないんですけど……」

「噂なんてそんなもんだ」

なぜか受け流されたんだが、いいか……びこの学校にも一人いるよ  
な……そんな奴

学校見学は続く。

途中、チャイムが鳴つた。

どうやら休み時間のようだ。

教室から生徒達がわらわらと出でくる。

彼らは私と岡崎を興味深そうに見てきた……正直あまりいい気はない。

「会長！ 誰ですかその人？」

「まさか……彼女ですか？」

「一体、なんまたかけるんですか？ 会長」

「うるせえな……お前ら、学校見学者が見てるんだぞ？ しつかりしゃがれ……そして俺はそんなダメ人間じゃねえよ」

「えつ……そうだったんですね？」

「ああ、当たり前だ……って、岩沢お前まで言つか？」

「すいません、つい……」

……どうやら、岡崎は随分、生徒から好かれているらしい……これは実力とかそういうのじゃなくて、人望だな。

かつてゆりがそただつたようなこの少年には一種のカリスマがあるらしい。

うらやましい事だ……

「あー、うぜーぞ！ お前ら！ セツセツ戻れ！」

本人はあまりうれしくないようだが……

こうした事を2・3度挟みつつ、私は学校見学を終えた。

その夜、我が家にて……

「どうだった？ なかなか面白い学校だる？」

「ああ、なかなか面白かったよ」

「残念です、学校ではまさみちゃんに会えませんでした……」

「気にするな初音、学校に通い始めたらいつも一緒だ」

「本当ですか？」

「ああ、本当だ」

岡崎に初音と同じクラスがいいと言つたら、軽くオーケーしてもらつたのだ……うれしいがそれでいいのか？ 生徒会長？

「やつたー絶対……絶対ですよ？」

「ああ、わかつたよ……」

……初音は笑つてくれたのでいいとするか。

「じゃあ、飯食つたら勉強してその後、ギター練習しような

「はい！」

私達二人は音無の注意する声を無視して、飯をかき込んだ……

Element of surprise ... End

かつて銀髪の魔女と呼ばれていた。

全てがどうでもよくて、何もかも……世界の全てが気にくわなくて、何も考えず拳を振るつていたあの時から、私は変われただろうか？いや……変わらなければならない。だって今の私には全てを失つても叶えたい願いがあるのだから……

きつかけは同級生に聞いたある噂からだつた。

「ねえ副会長、知ってる？ 最近編入してきた人の話なんだけど」「いや、よくは知らないが……何かあったのか？」  
「それがね……」

なんでもその編入生、岩沢まさみは随分といろいろな噂があるらしい。

編入時のテストが全科目100点だつたとか体育の時間に全ての種目で陸上部以上の記録を出したなど、よく聞く勉強、運動共に凄い万能人間だ、などという『良い噂』から、三年生の男子と同棲している、夜中にストリートライブをやつているなどといつ『悪い噂』まで、実にさまざま噂が流れているらしい。

「別にだからどうしたいって訳じやないんだけじね……一応さ、真実だつたら困るじゃん？ なんか最近その子三年生グループに田づけられてるみたいだし……」

「わかった、調べてみよつ……感謝する」

「「めんね」

このままでは、たとえ噂が嘘でも三年生に田をつかられるかもしない……

それはあまりその子にとつても良くない事だろ。そんな理由もあり、私は坂上智代はしばらへの間、岩沢まさみを監視することにした。

「おい、初音いくぞ」

「待つてくださいまさみちゃん！」

彼女 岩沢の噂の一つに『三年生の男子と同棲している』という噂があつたが……どうやらこれは真実だつたようだ。しかも、その同棲中の相手は同じ生徒会役員の音無コズルだつた……まあ、妹も一緒に住んでるし、一人きりで同棲という訳じやないのだろうが……はたしてこれは許されるのだろうか？

後日生徒会でこの話を議題にあげてみると音無コズルは「学校と役所から既に許可はもらっている」と言っていたので、これはオーケーだつたらしい。

次の勉強＆運動万能伝説については、別に悪いことではないが、個人的に気になつたので調べた。

結果は……噂どおりの万能ぶりだつた。

……予想以上だ、フカ国語も使える高校生がこの世にいよつとは……私もまだまだだな。

以上が岩沢を監視した結果なのだが、とくに悪いところもなく彼女は別に問題なしというのが結論だ。ストリートライブについてはこ

れはあくまで個人の趣味なので私は調べはしなかつたのだが……せめて忠告はしておるべきだったのかもしれない「最近、目をつけられてるから気をつけろ」と……

それが起こうとした時にはもう遅かったのだが……

S i l v e r - h a i r e d w i t c h ..... E n d

学校に通いはじめて一週間がたつた。

……正直、学校というのは退屈だ。

なぜ、みんなこんな巨大な立方体の中で寿司詰めにされて過ごせりうるのだろう？

というか、死ぬ前の私はよく、こんな箱の中で過ごせたものだ。

……誰も気づいていない。

私達の人生はこんな箱の中で紙きれに名前を書き殴つてたるだけで決まるようなものじゃない。

迷つて探して悩みぬいて、始めて答えが得られるのだ。

こんな所にいるのは、ハッキリ言つて時間の無駄だ。

私は初音にばれない様に教室を抜け出した。

授業をボイコットした私は、一人緑溢れる中庭をぶらぶら散歩中だ。

「いい天気だな……寝ながら歌でも考えるか」

どこかでチャイムが鳴つたが私は気にしない。

大体、こんな天気のいい日に暑苦しい教室という密閉空間で数学教師の長話を一時間聞くとか、正氣の沙汰とは思えない。

「数学が人生の役に立つ時なんて、釣り銭数えるか家計簿つける時だけだろが……」

あんなもの聞くだけ人生の無駄だ……生涯をかけて最終定理解きたい人とかだけ頑張つて勉強すればいい。

私はとりあえず木漏れ日を浴びながら新曲でも考へることにしよう。そう思い、適当な木に腰かけようとした時……

(…………ん)

ふと、私は違和感を感じた。

なぜか誰かに見られている気がしたのだ。

(…………これは、アレだな…………初めて椎名に会った時みたいだ)

椎名というのは死んだ世界にいた時の知り合いでいつも忍者の格好をしていた少女の事だ。

詳しい説明は省くがかなり現代から離れた忍者っ子だったと説明しておこう。

そんな彼女から聞いたのだが『誰かに見られていると思つたら、後ろを見る前に視線と反対の方を見るがいい。素人なら無理だろうが達人などは自分の立つ反対の方向から殺氣を送る事が可能だ。聞いて損はないだろ』そう言つていたのを思い出したのだ。

正直、半信半疑だったが言われたとおりに視線とは反対の方向を見てみる。

(…………椎名、お前凄え奴だったんだな)

…………本当に人がいた。

背が高い女子生徒が木の陰に立っていた。

「…………驚いたな、見破られたのは初めてだよ」

「そう…………そりや残念だったね。で……何か用?」

「いいや、そう言つ訳じやない。ただ、こんな所まで見に来る物好き教師もいたのだな……と思つてな、少しからかつてやうびつと思つたんだが、そしたら君が歩いてきたという訳さ、一年の岩沢まさみ女史」

女史つて……なかなか珍しい言い回しをする人だな……  
ただ、あやしさ爆発なんだが?

「名前まで覚えてもらつてると光榮だね。あんた……名前は?」「一年の来ヶ谷唯湖だ……別に覚えてもらわなくとも結構だが」

……そんな事言わると余計覚えるのだが。  
しかし一年生か……見えないな、二年生かと思つた。

「それで、来ヶ谷先輩はなんでこんな所にいるんですか?」  
「君と一緒にサボつているだけさ……どうだ? これからお茶にしようと思つてるんだが、一緒にいかがかね?」「いや……わるいんですけど」  
「なに、遠慮は無用だ。来たまえ」

それだけ言つと来ヶ谷先輩は私に背を向け歩きだした。

少し考えたが、結局「じちそうにならひつ」という考えに行きついた私は  
彼女の後を追つた。

彼女を追つてさらに奥にきた私は丁度よく木漏れ日が当たるテーブルセットを見つけた。

「さあ、座りたまえ」

「よく、作りましたね。こんなもの……結構サボるんですか？」

「まあな」

彼女に勧められるままに私はイスに腰掛ける。

「さて、紅茶は何がいい？ 結構種類はあるが？」

「あんまり紅茶には詳しくないので、先輩のお勧めをお願いします」

「了解だ」

彼女は慣れた手つきで紅茶を入れていく。

「さあ、飲みたまえ私のお勧めだ」

「ありがとうございます。いただきます」

差し出された紅茶に口をつける。

ちゅうどいに甘さと熱さが口の中に広がった。

「…………おいしいです」

自然と顔がほころぶ。

「そうか、それは光栄だ」

彼女も少しうれしそうに紅茶を口に運んだ。

それからじばらぐ、彼女とおしゃべりを楽しんだ。

「へー、じゃあもう先輩は卒業分の単位は揃えたんですか？」

「ああ、あの愚かな数学教師に感謝しないといけないな……ありがたい事だ。そういう君も結構余裕だな、自分の頭脳に中々自信があるようだが?」

「ええまあ……そんなたいしたモノではないんですけど……高校程度なら余裕ですね」

「…………君も中々、癖がある人間なのだな」「何か言いました?」

「いいや……そのクッキーはどうだ? 私のお勧めなんだが……」「凄いおいしいです…………Kukki pakupaku」

「君も好きなんだな、S e s a m e s t r e e t ……」

そしていつのまにか話は私がバンドをしている話になつた。

「意外だな……君のような可憐な少女が髪を振り乱して歌う姿はあまり想像できないが?」

「可憐と言われたのは初めてですけど……そうですか? 私そんなキャラに見えませんかね?」

「実際歌う姿を見ないとな……たゞがに信じられん」

「どうか……バンドやつてるより今は見えないか……  
彼女の言葉が意外と胸に来た……見えないか……」

「じゃあ、ゲリラライブいきますか?」

「…………気づくと私はそんな事を言つていた。

「…………なに?」

「だから、ゲリラライブです。放課後、みんなが下校しようとついでにギターかき鳴らしてやりますよ」

「…………意外と直情思考なんだな」

彼女は少し唖然とした後、少々意外そうな顔をして私を見た。  
そんな彼女に私は言つ。

「なに、他人事みたいに言つてるんですか？」

「いや……実際、他人事なんだが？」

「はは……先輩、嘘ついちゃいけませんよ？ 指を見ればわかりますから……先輩はギター弾けますよね？」

少しの間彼女は沈黙する……そして折れた。

「…………少しは……な、だが人に聞かせられるよつのレベルじゃないよ」

「大丈夫です……弾けつていうことじゃありませんから」

「…………どういう事だ？」

「だから……何にも知らない素人に聞いてもらうよりは私のレベルが伝わりやすいよな……つていう話です」

「…………そう言つ事か……まあ、手伝うくらいなら私も協力するが？」

「先輩は話が早くて助かります……じゃあ…………」

それから、しばらく打ち合わせをした後、私は彼女と別れた。

教室にて

「あー！ まさみちゃん！ 何で授業サボったんですか！」

「悪いな、初音……ちょっと気分が悪くてな……」

「そ、なんですか？ ……じゃあ、仕方ないですわ」

「ウソだけどな……」

「はい？」

「いや……なんでもないそれよりも……」

私は初音から生徒が一番多く帰る時間帯を聞いた。

そして……放課後。

「本当にやるのか？」

「ええ、なんですか？ 先輩、実は臆病ですか？」

「馬鹿な事を言うな……私は後輩の未来を案じているから！」  
にいるんだ」

「じゃあ、最後まで見ててください」

そう言って、私はギターを一度、鳴らす。

みんなが突然響いた音に驚いてこっちを見た。  
じゃあ……始めようか。

私は歌い始めた。

C o m e o n ! H e s i t a t i o n R u n ! B  
e l i e v e i n y o u r s e l f , y o u u n l e a s  
h a s t r o n g i n t i m a t e d r e a m s !  
P e n e t r a t e t h e w h o l e , s p r e a  
d s a c r o s s t h e l i g h t . . . i s c e r  
t a i n l y a d i f f e r e n t w o r l d  
S o j u m p K o e r o ! R u n t h r o u g h  
t h e c r i t i c a l s p i r i t b u r n i n g !

今日歌うのは新曲だ。

この世界に来てから作った曲。

走り出した私の未来を歌つてやつた。

演奏が終わる。

少しの間生徒たちは茫然としていたが1人……また1人と拍手をしてくれて、最後にはその場にいた全員が拍手をしてくれた。

ただ……残念だ。

私はそれを聞いている暇はない……風紀委員が走つて来ているのが見えた。

早々に立ち去らなければ……

私は茫然としていた来ヶ谷を捕まえてその場から走りさつた。

「……で、どうでしたか？」

「…………素晴らしい……あんな演奏を聞くのは久しぶりだ……」

君の実力は本物のようだな

「それはどうも……先輩にそう言つてもうえるとうれしいです」

「…………来ヶ谷だ」

「…………はい？」

「来ヶ谷と呼んでくれ。キミにはその権利がある。呼び捨てで構わない……私は来ヶ谷だ」

…………どうやら、予想以上に感動してくれたらしい。

先輩から呼び捨て許可を貰つてしまつた。

「じゃあ……来ヶ谷、私も岩沢と呼んでくれ」

「ああ、わかつた……岩沢、キミの演奏は私の胸を打つた私も君に何か恩返しをしなければな」

「いや……別に私はいいよ?」

恩を着せるために歌つたわけじゃないしな。  
私が遠慮していると……

「いた！ そこの二人、止まりなさい！」

突然そんな声があたりに響いた。

「その生徒、あなたを校則違反の現行犯で拘束します」

現れたのは長いクリムゾンレットの髪をなびかせた一人の女子生徒。彼女の腕には髪の色と同じ腕章が掲げられていた。

彼女の腕には髪の色と同じ腕章が掲げられていた。

そこに書いてあるのは黒で書かれた『風紀委員』の4文字。

……心のやうに私は、風紀委員に見つかってしまったようだつた。

G u e r r i l l a      L i v e      . . . E n d

episode zweiservice President of char

最近、調子悪いです……

「そこ」の生徒、あなたを校則違反の容疑で拘束します」

その風紀委員はそんな事を言つた。

「おいおい、拘束つて……大袈裟だろ」

「大袈裟じゃないぞ……」

以外にも私の言つ事に異論をはさんだのは来ヶ谷だった。

「…………どういふ事?」

「彼女は、そのくらいの権限を学校から」「えりされている」という事をさ

「…………そうだろ? 風紀委員長?」

「ええ、その通りよ来ヶ谷さん」

「…………つて、この子が風紀委員長!?

以外…………確かに真面目そうだけど…………

「あー、『めんなさい』あの、私その…………最近編入してきたばかりでそういう事よく知らなくて…………」

「いい訳は結構です。話しあは反省室で聞きます」

「おいおい、問答無用かよ…………

さすがにそれはないだろ…………

ません?」

「ダメです。次があると思つてゐるんですか?」

……ダメみたいだな。

「…………来ヶ谷」

「なんだ」

「…………逃げていいか?」

「…………奇遇だな、私もそいつ考へていたところだ」

「…………逃げるとでも?」

「…………無理か…………」

今回はダメらしい……私は来ヶ谷と一緒に[反省室]に連れていかれた。

一時間後……さんざん詰問された挙句、なぜか牛丼を差し出された  
りなんかもして、私達はやっと解放された。  
部屋を出ると……来ヶ谷が話しかけてきた。

「災難だつたな……まあ、私は完全に無罪だつたが」「ズルイよ……来ヶ谷、まったくフォローしてくれないし、私は怒

鳴られつ放しだつたよ」

「まあ、中々めずらしい体験ができる良かつたじやないか……次、  
捕まらない様にすればいい」

「簡単に言つなよ……まあ、次もやるけどさ」

「…………私はジョークを交えつつの反省を促したはずなのだがな

……」

「無駄だつて事は分かつてんでしょ?」

「…………」

「まあな……短い時間がだがキミの性格はよく理解したからな」「そんなこと…………つて、あ……」

「どうした……………そう言つ事か」

私と来ヶ谷は一人揃つて押し黙つた。

目の前には……音無が仁王立ちしていた。

「まったく……何を考えてるんだまさみも来ヶ谷も…」

「ごめんなさい」「うむ、今回はお姉さんに非があつたかもしけん」「特に来ヶ谷……お前は生徒会役員だらうが！ 恥ずかしいだろ、また……智代に怒られるぞ」

「うむ……智代君はなかなか可愛いが怒ると手が付けられないからな……わかつた反省することにするよ」

「まさみは後で……初音に怒つてもううから」

「それは……勘弁してくれないかな？」

「それじゃ、罰にならないだろ」

マジですか……初音の説教は長いんだよね……

「しかし、音無君……キミは岩沢とずいぶんと親しいようだな？」

大体の説教が終わつた時、ふと来ヶ谷がそんな事を聞いてきた。

「はつ？ まあ……一応、同居人だからな」

「そうか……同居中か、生徒会役員が女性と同居……」

「おいつー……勘違いするなよ、一人でじやないぞ？ 妹も一緒にだからな？」

「なるほど……家族公認か……」

「いや、違つつて……」

なんだかだんだん来ヶ谷のペースになってきた。  
もしかしたら押し通せるかもしれない。

がんばれ来ヶ谷！

私は心中で応援をしたが……

「そこまでだ……来ヶ谷、まったく君という奴は……  
」

「…………智代君か」

残念ながら、音無側に応援が来てしまったようだ。

「だれだ？」

私は来ヶ谷に尋ねる

「生徒会副会長さ…………名前は坂上智代」

「そうだ、副会長の坂上智代だ」

「あ…………」

「まったく、岩沢君キミは……監視を解いた次の日に問題を起こす  
とは…………」

…………監視を解いた次の日？

「私、監視されてたの？」

「ああ、最近キミの周りでいい噂を聞かないでな……悪いとは思  
つたつが少し監視させてもらつた」

「…………私つてそんな問題児なわけ？」

「いや……あくまで噂だったから私本人としては信じてなかつたが

噂とは時に眞実を呼ぶからな」

「そうですか……」

さつさも思つたがこの学校の役員とか委員会つて積極的だよな……

「今回の事は反省します。次は……極力やりません」

「それは……反省してるのか？まあ、いい今日はもう遅いしな、だが、次はちゃんと許可をとれ……生徒会長いや……朋也ならすぐオーケーを出してくれるさ。……それじゃあこの話はこれで終わりだ……音無」

「……なんだ？」

「来ヶ谷言い負かされてるな……副会長の名が泣くぞ、大体、来ヶ谷に言い負かされるようじや、」こいつらのリーダーを制御なんてできないんだからな」

「ああ、善処するよ……」

「それと来ヶ谷」

こつそり逃げようとしていた来ヶ谷が呼び止められてビック！と震えた。

「…………何かな、智代君」

「お前は生徒会室に來い。説教だ」

「…………分かった、お姉さん反省するよ」

来ヶ谷も大人しく捕まつた……なんか格好悪いぞ。

「それではな」

来ヶ谷の手を引いて副会長は去つていった。  
後に残されたのは私と音無だけ……

「…………何と言つたか、嵐のよつな人だな……それでいてうるさいとは思わない」

「ああ、あれが彼女の持ち味なんだ。一方的な言いがただが彼女が  
言つと嫌みじやない……常に正々堂々正面から行つて状況を解決す  
る……それでついたあだ名が『突撃副会長』さ」

「『突撃副会長』…………どつかで聞いたことがあるな」

「ああ、岡崎が漫画見て決めたあだ名だからな……」

「…………なんか疲れた」

「…………なんか疲れた」

「…………なんか疲れた」

私と音無はまごとまごと学校を後にした。

それから家で……

「まつたくまさみちやんは…………」

私は初音にたつぱりと絞られた。

…………今日は疲れた…………始まりはサボつた事にあるんだよな  
しばらくサボりはやめよう。

私はそう思った。

e p i s o d e   z w e i   s i b e l i e v e   t h e   p e o p l e

質問いたしました来ヶ谷……下の名前は「ゆこい」です

読み仮名付けなくすみません

風紀委員長様に説教へうつてから、数日後のこと。

前回の非を反省する事もなく、今日も私は授業をサボっていた。  
ちなみに説教の次の日、私は罰としてなぜかテストを受けたのだが、  
結果は全教科100点。

教師たちの引き攣った笑顔は中々、面白かった。  
さて……今日はどこへ行こう？  
そんな事を考えながら私はぶらぶら歩いていた。

ふと、図書室の看板が目に入った。

(…………たまには図書室で静かに本でも読みながら歌を考えるのもいいかもしない)

最近忘れがちだが、もともと私の歌う曲のジャンルはバラードなのだ。

死んだ後の世界にいた時はN.P.Cの氣を引く、という目的もあったのでロックを歌っていたが、ここはもうあの世界じゃない。

(……バラード作曲してみるか)

私は、図書室の扉を開けた。

部屋に入ると同時に本特有のカビ臭いにおいが鼻の周り覆いつ。この閉じた世界の匂い……私は嫌いじゃない。

奥に進むと意外な事に私以外の先客がいた。  
その少女は床に座り込んで本を読んでいた……

「よひ

何となく私は声をかける。

少女はビク！ と一度震えた後、顔をあげた。

……中々、可愛い顔してるな。こんな少女もサボリとは……

「…………あなたはだあれ？」

「私は…………一年の古沢まさみだ……あなたは？」

「…………三年の一之瀬ことみ。読み方はひらがなみつで『こと  
み』……呼ぶ時は『ことみちゃん』

「へー…………じゃあそ、『ことみちゃん』。あなたは『ことみ』で何してんの？..

「…………勉強」

「授業、サボつてんのに？」

「…………授業は特別な場合を除いて出なくてもいいの。私は……

……」

話を聞いて驚いた。

要約すると…………この少女は、全国模試で常にトップの成績を誇る天才少女で教師に教えてもらうよりここで一人勉強した方が身に入るからか、ここで勉強しているのだという事だ。  
しかも……

「学校公認？…………凄いな」

学校に許可まで貰っているらしい。

……うらやましい。全国模試…………私も一位とかなつたら授業免除さ  
れるかな？

「凄いんだな……！」とみちゃん

「そんな事ないの……それよつまれみちゃんは今日、ビリしたの？」

……サボリ？」「

「まあ……そんな所だよ、私もことみちゃんと同じ……とまではいかないけど、授業受けなくとも心配ない人なんだ」

「そうなの……でもあんまりサボリはよくないの

「わかつてるよ」

なんだか知らないけどこのよくわからない先輩と喋つてると癒される気がするな……私はもう少し話がしたくて先輩の隣に座つた。

「となりいいですか？」

「いいの……どうぞ？」

「…………先輩は勉強好きですか？」

「好きなの……勉強していると私の世界が広がっていくのが分かつてとても楽しいの」

「そうなんだ……ちなみに今読んでる本のタイトルは？」

「『？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？』」

「…………何語？」

音無のほかにも私の知らない言葉を使っこなす人がいた！……さすが天才少女。

「イディッシュ語なの。日本語訳は『相対性理論を読み解く』なの……おもしろいよ？」

「ごめん私には理解できません。

「……と、とりあえず、本の話はおしまいにして……」ひとみちゃん  
は音楽は好き?」

残念だけどこの先輩と趣味を共有するのは不可能だ……と私は感じたので自分の得意分野に話題を変えた

「……んー、むずかしいの……クラシック?」

「クラシックか……私のやつてる音楽とは見事に正反対だな」

「そうなの? ……でも私はロックとかバーラードとかデスメタルとかも好きなの」

「いや……無理しなくていいから、その困った顔でデスメタル好きとか言われても困るから」

「…………」めんなの

…………しまった、先輩がうつむいてしまった!  
私は何か言おうとしたが、つまらない言葉が見つからない。

「あ、あの……」

「大丈夫なの。冗談なんの」

「つて、『冗談かよ!』

思わず突っ込んでしまった……マジで焦ったんですけどね?  
そんな私を見て先輩は少しおかしそうに微笑んだ。

「ふふ……まあみちゃんおもしろいの……朋也君もつくづく

「へつ? ……朋也って生徒会長の岡崎朋也ですか?」

「…………」知り合い?

「ええ、まあ……」

「…………また、朋也君あたりしこ女の人に増やしてるの……な

なんか急に先輩の周りに嫌なオーラが漂い始めたのだが？

「先輩？」

「どうしましたか？」

「…………別に何でもないの…………ただ……」コートン力学を使えば、朋也君により効率よく攻撃できるとか思つただけなの…………」「いや！？ せつかくの頭を復讐につかつたらダメですよ？」

この先輩が本気出したら完全密室犯罪になつてしまつ！

「大丈夫なの……死にはしないの」

「それ大丈夫じゃないから…………」

そこからしばらく先輩を宥めてた。

20分後、やつと先輩の調子が元に戻つた……疲れるな。

「ことみちゃんと生徒会長は知り合ひなんですか？」

「幼馴染なの」

「へー、やうなんだ……会長って昔からあんな感じだつたんですか？」

？

「うん……朋也君は口は悪いし見た目は怖いけど実はとっても優しいの……みんな、そんな朋也君を知つてるから朋也君は生徒会長になつたの」

「…………あの人、意外と信頼されてるんですね」

そんな感じで話をしていたが、その時はやつてくる。

……どこかでチャイムが鳴った。

そろそろ帰らなければ。

「……」とみちゃん……私はチャイムが鳴ったからもう教室に戻るね  
「うん……また来てほしいの」  
「わかった……じゃあね」  
「さよならなの」

私は立ち上がりて図書室の入り口に向かつ。

「………… Pyes veten n? se me karakter  
er privat p? r gr a p? r k? t? bot  
? . . . . .」

途中、先輩が何か呟いたが……意味が分らなかつた。

(もつと……勉強しなきやな)

私は図書室から出た。

図書室からの帰り。

作曲はできなかつたが何となく曲のイメージはできた。  
歌詞をつけるならこんな所だ。

I wonder nobody in the cou  
ntry met her  
She smiles , smiling person  
in the world . . .

(……いい感じだ、バラードできやう)

私は、中々の収穫に結構上機嫌になっていた。

ホント、人生油断は禁物だ。

上機嫌になつていておかげで、私はいつもなら気にならない喧騒がこの時はどうも気になつた。

そして……喧噪のなかに近づいてしまったのだ。

そこにいたのは……

「勝負だ！ マスク・ザ・齊藤！」

「はりやほれうまう～！～」

音無と謎のマスクマンだった……

I b e l i e v e t h e p e o p l e h e . . . E n d

「勝負だ！ 今日こそ決着をつけてやる、マスク・ザ・齊藤！」  
「はりやほれ、まつ～！！」

大勢の人に囲まれた中で音無は謎の変態マスクに向かつて熱く叫んでいた……あの馬鹿……

（恥ずかしくないのかよ…………）

自分でも珍しいと思うくらい顔が赤くなっていた。  
大体、何だ勝負って？ こいつら高校生だよな？  
私の羞恥心に火を点けてるとも知らないのだろう……音無は相変わらず熱く叫ぶ。

「さあ、みんな！ 武器を投げてくれ！」

（投げる訳ないだろ…………って、ウソだろ！？）

私のツツ「ミミとは裏腹に

「これを使え！ このために準備しといたんだ！」 「私の命を力に！」

とか何とか言いながらみんな何かを投げ始めた……この学校の生徒は頭がおかしいのか？

投げ入れられる武器は様々だ……消しゴム、トランプ、ギター（こらあ！？）、カセットテープ……「又槍……って、あれはロンギヌス！？」

ほかにもアイルランドの光の御子が使った槍とか、めっちゃ禍々しい大剣とかが投げ込まれる。

こここの生徒はどれだけキャラが広いんだらう……

そして……

「見えた！」 「はりやまれつまつー。」

音無が蠅たたき、マスク・ザ・斎藤が……団子大家族を手に取った！

「わあ、あんだけいろいろ投げてたくせに武器ショボー！」

なんだかんだ安全は考慮してんだな……

私は先ほど投げ込まれたギターを胸に抱えながらそいつ思った。

「じゃあ、始めようぜ……」

「はりやほれ……」

武器を構えにらみ合つ一人（第三者視点から見ると音無が蠅たたきをマスクマンが団子のぬいぐるみを持って突つ立てるだけなのだが）

そして……

見ているだけでも正直、イタイ戦いが始まった……

バトルランкиング

実は秀才  
音無ユズル

謎の仮面男

マスク・ザ・齊藤

「一応……努力してるからな

「はりやほれ」

マスク・ザ・齊藤の攻撃！

齊藤は団子大家族を空に掲げた！

空（天井）があやしく曇り始める……

「超常現象！？」

音無の攻撃！

音無は蠅たたきで齊藤を叩いた！

「はりやほれ（汚！）」

齊藤に500のダメージ！

齊藤の攻撃！

齊藤は天井から団子大家族を召還した！  
団子大家族が音無の上に漂い始めた……

「どうなつてんの」「れー？」

音無の攻撃！

「おりー！」

音無は蠅たたきで齊藤に殴りかかった！

「はっしゃほれつまつ（甘いなー）」

大量の団子が降り注ぎ齊藤の身を守る。ついでに音無の頭の上に向個か落ちた！

音無に500のダメージ

「くそ、もつもたない……」

齊藤の攻撃！

「ぱりゅぱれつまつ（Gate of Babylon）」

団子が一斉に音無の上に落ちた！

「いたたたたた……」

音無に一個 $50 \times 20$ のダメージ！

「つざやあー」

音無は潰れた！

マスク・ザ・齊藤の勝利！

（あーあ、負けちゃったんですけど?）

なんだかよく分からぬうちに、音無が負けた。

マスク・ザ・斎藤が団子大家族の下敷きになつた音無に近寄る。

「く、来るな……俺はまだ……」

「いい試合だつたぜ？ 音無！」

……マスク・ザ・斎藤が普通に喋つた。

「「「しゃべれんのかよ！」「」」

周りが一斉にツッコム。

「当たり前だろ？ こんなの飾りだよ」

そつ言つて、マスク・ザ・斎藤が仮面をとつた……

B a t t l e   R a n k i n g s   . . . E n d

アニメ終わったな……面白かった

アニメは面白いけど、この話は正直面白くないかもしません  
それでも、見てくれる全ての人々へ姫龍はありがとうと言いたい  
最近、暴走気味です……感想ならぬ『指導』をよろしくお願いします

それではどうぞ

「当たり前だろ?」

仮面の下から現れた男子生徒の素顔は……まあ、中々整っている部類に入っているだろうが、正直……あんなものを見せられた後に見てもアホにしか見えない。

「ま、まさかお前がマスク・ザ・齊藤だつたなんて……」

前回から頭のネジが外れてしまった音無が驚いた様に呟いた。  
「どうか……誰かもわからず戦つてたのかこいつは……あの世界の音無よりアホになつてるな……」

「しかし、なにゆえ!?」

「何故はお前の頭だよ、馬鹿兄貴……勉強のしそぎでおかしくなつてんのか?」

音無は『お兄さん』から『兄貴』にランクダウンした!

私がそうツッコムと音無は勢いよく振り向き、そして悪態してた所を親に見つかった子供……みたいな顔をした。

「…………いたのか、まさみ」

「ああ、割と最初からな、馬鹿兄貴が惨めに負ける所しつかり見といたぜ?」

「馬鹿兄貴つて……そりや、負けたけどぞ……」

「いや、問題は負けた所じやながら」

「ほつ……あんた音無の妹なのか？」

途中、変態仮面先輩（仮）が会話に割り込んできた。

「そうんですけど……それが何か？」

「いや、苗字が違うなと思ったんだよ？…………一年の若沢まさみだよな？」

なんでこの先輩、私の名前知つてんだ?

まさか。

「…………ストーカー？」

「ちげえよー 何でそうなるんだよー？」

「だつて…………変態仮面先輩が一年生の名前覚えてるって…………」

「なんだよ、変態仮面先輩って…………俺の名前は棗恭介だ！」

棗恭介…………知らないな、そんな人。

「やつぱリストーカー…………」

「いや違うからなー? そんなに俺が信じられないか!」

「…………もしもし、警察ですか?」

「…………音無、説明してやつてくれ」

変態仮面先輩（棗恭介）は泣きながら音無に弁解を求めた。

その後……

音無の捕捉によるところの棗恭介という男は音無や智代と同じ副会長でこの学校のナンバー2らしい（ナンバー2は3人いるが）…………信じられんが

「じゃあ何……」この人偉いの？」

「ああ、一応な」

なぜか胸を張る恭介。

私は冷たく対応する。

「ホント、一応だね」

「…………理樹以上に冷たいツツコミだぜ…………」

「そして、何か口調も変わってるよな、まさみ」

「うるさい」

「「すいません」」

目の前で正座する、先輩2人…………しかも生徒会役員…………なわけな！  
私は、そんな2人をイスの上から見下しつつ、お茶を啜った。（ちなみに現在、私たちは生徒会室にいる。お茶は勝手に押借した）

「でつ？ 説明してもらえるか？ 何なんだ、さつきの騒ぎは？」

「それが先輩、いや兄に対する態度か？」

「…………こいつはとんだ無礼者だぜ編入生」

「説明」

「「はい」」

馬鹿2人の話すと「うひょ」とみると、この学校でごくまれに起ころる喧嘩を解決する手段としてさつきのアホな戦いが行われるらしい。ルールは単純。お互い観客が投げ入れた物を武器に、それを正規の使用法で使い、先に相手を倒した方が勝ちらしい…………なんだそのシステム……確かに誰も怪我しないのはいいかもしれないがそれを学

校が認めてるひどいつなのよ？

「IJの学校は教師もアホなのか？」

「それは違うぜ、編入生？…………誰もケガしない様にと願う俺達生徒会の善意が上を動かしたのぞ」

「はいはい黙れ」

「…………理樹、お前のやせこじーしち ハリガ恋しいぜ…………」

恭介は折れた。

再起不能になつた恭介を尻目に私は音無に問いかける。

「それで？ 何か弁解するアホ兄貴」

「いや…………悪い事はしていないから、説明してなくて『ゴメン』…………としか言ひようがないんだけど」

「はあー…………まあ、そうか」

「いや！？ 納得するのかよ！」

途端、恭介は起き上がつた。

「ああ、棗先輩？ 復活早いんだな」

「お前のテンション戻るスピードには負けたけどなー！」

「褒めたつて何も出ないぜ？」

「褒めてねえよ…………もういい。しかし…………編入生はなんで……」

「岩沢様でいいぜ、別に」

「様は付けねえよ…………岩沢は何で俺と音無がただバトルしてただけでそんな怒つたんだ？」

恭介にとつてはそれが一番の疑問なんだな……まあ、理由くらい話してやるか。

私は怒った理由を話し始めた。

「それは…………投げられる武器の中にギターがあつたからだよ」

「「何?」」

その答えが意外だったのだろう……2人は少し、驚いた顔をした。

「私にとつてギターはとても大切なものなんだ……兄貴ならわかるだろ?」

「ああ…………」

「…………そうだったのか」

恭介も相槌を打つ…………分かつてくれるかは分からぬが私は話し続ける。

「そのギターが…………誰のかは知らないが、投げられていた…………それも喧嘩の道具に…………それを見た時許せなかつたんだ」

私は立ち上がり、壁に立てかけてあつた…………投げられていたギターハンドルに手を触れる。

「こいつはさ…………喧嘩の道具なんかじゃない…………少なくとも、私にとっては『希望』なんだよ…………どんなに古くなつても、もう使わないとしても…………そんな理由でこいつを投げるなんてふざけた根性した奴が一緒に学校にいる…………それが私には許せなかつた。これが理由だ。…………兄貴と先輩にはハツ当たりしちまつたな…………ごめん」

私は素直な想いを2人に打ち明けた。

「2人は黙っている。そりや、いきなり『こんなこと』と言われて納得できるわけないよな。」

「あのわ……」

「いいよ、謝らなくて」

「…………先輩？」

「悪いな…………今までそんな事思つてる奴がいるなんて考えたこともなかつた…………やうだよな、自分の大切なものが蔑にされてたら怒るよな」

「…………分かってくれるんですか、先輩は？」

「ああ、悪いな岩沢…………みんなにもこれからはギターは禁止だって言つておくれよ」

「…………棗恭介に私の想いが通じたようだ。  
話せばわかるとはよく言つけれど、本当に伝わるもんなんだな。」

「ありがとうございます」

「…………その代わりだ」

「はい？」

「その代り、投げられたギターは…………そいつはお前が使つてやつてくれ」

「…………分かりました」

「…………」  
「いっは、大切にしよう。  
この気持ちを忘れないために。」

「じゃあ、そろそろ俺はいくぜ」

恭介は納得したように立ち上がった。

「大切に……するから」

私は恭介と約束した。

帰り道。

私は音無と家へと帰る。

「……………なあ、まさみ」

「……………なんだ」

「お前や……恭介と話してる時、地だつたろ?」

「……………わかつた?」

「ああ、まあな…………」

「……………」めん」

「いいよ別に……ただ、約束は破るなよ?」

「わかつてるよ」

新たなギターを腕に抱えつつ、私はそう言った。

What kind of, I'm a treasure!  
..... End

## Another episode Yuri ~She together~

『報告します、ゆりっぺさん。手紙を渡してから数日の間、天使を24時間態勢で監視しましたが天使に特別な動きはありません』

「そう……ありがと。何かあつたらまた連絡をちょうだい」

『了解しました』

私はトランシーバーの電源を落とした。

なぜだ……なぜ、天使はすぐ手紙を出さない？ 出せないのか？

(あー、わからないわ……といつよりあの手紙つて本当に皆沢さんから届いたもののかしら？ もしかしたら天使が嘘をついてる？  
まさかね、あの子は嘘つけるような子じやないし……そもそも嘘をつく必要がない……もしかして天使が知らないうちに勝手に送られて届けられるとか？ ……まさかね、それなら私たちにだって送れるはずだわ……)

いくら考えても答えは出ない。

一体、天使はどうやって手紙を送るのだらうか？

(いつその事、本人に聞いてみようかしら……って馬鹿か私は……  
天使が教えてくれるわけがない)

そんな感じで私がどうどう巡りをしていると……

トントン

誰かが扉を叩いた。

「あいてるわよ？」

私は何も考えず返事をしてしまった。

「お邪魔するわ」

「えつ…………ええ！」

…………天使が入ってきた。

S h e t o g e t h e r , h o w ?  
…… E n d

若沢さんへ

本当に手紙が届いたよしね……驚いたわ

……一体、この世界って何なのかな?

実は私達、死んでないとそういうオチはないわよね?

まあ、そんな訳ないだろ? けど……

若沢さんも何か気付いたことがあつたら教えて?

あと、そつちの世界じゃ死んだら生き返れないって事忘れないよ? う  
に?

それじゃあね

ゆり

「やつぱりゆりも思つたか……」

手紙を読むうち、「私はそう呟いていた。  
確かにおかしいのだ……あそこが死後の世界なり、この世界にモノ  
を届けられる訳がない。

……やう考えるとある一つの仮説を造る事が出来る。

それはあの世界が死後では無いといふ仮説だ。  
思えば、私が一度『死んで』から次の『人生』が始まるまでの間は  
1年しか空いていなかつた。

私は…………あの世界で最低、10年は過ぐしていたはずなのに。

(…………時間の流れが違う?..)

それも考えられる。

しかし……そうなるとあの世界の意味とはなんだ?

なぜ……後悔を払拭せたり、生きる意味を見つけさせる必要があ  
る?

ま・だ・生・き・て・る・と・い・う・の・で?

何かがあるのか? 一度死ぬ必要のある何か……

それを調べる必要があるかも知れない

「まさみちゃん、練習しようよ?..」

「ああ、わかつたよ……ちよつとは上手くなつたか?..」  
「なつてるよ!..」

初音に返事をしつつ、私は思つた。  
この世界の秘密を暴いてやる!と。

……私は動き始める。

## Another episode Iwasawa's strangeness

M?n m?nim kimi ba?qa m??lli f  
l?rin ?s?rl?ri . . oxum aq ist?  
diyiniz fikir dig?r g?n v? laz  
?ml? trailer's M?n v?ziyy?ti  
yerl? dirilmi? v? ?sas xarakte  
rit?kil , xarakteri data v? y  
az?l? , yazma . . But trailer in  
dig?r? tez - tez , m?nd? xarici  
dil trailer . . etmek laz?md  
?r  
Flow g?lib

### 日本語訳

先日、他の作者様の作品を読んで思つたんですが……後書きつて便利ですね。主人公の置かれてる状況を整理したり、キャラクターのデータ書いたり、次回予告書いたり……そんな訳でこれからはちょくちょく、後書きも入れていこうと思います……外国語で。

姫龍

「お邪魔するわ」

「えつ……ええー!」

状況を整理しよう。

私は部屋で遊佐と連絡を取りながら、なぜ天使は手紙などを遣り取りできるのかを話し合っていた。

……結局、答えはせず、天使が手紙を送る方法も分からずじまいでもう今日は寝るかなー、とか思っていた所、天使が私の部屋にやって来た、というのが現在の状況である。

「な……なんで、貴女が私の部屋に来るのよ?」

「…………ダメなの?」

「いや、ダメだから! 私と貴女は敵同士だから!」

「…………そうなの?」

「そうなのって…………ん? 何で貴女そんな顔赤いの?」

「ふえ…………?」

慌てた私は、銃を抜くのも忘れて天使と話していた…………そこで、天使の違和感に気づいた。

なぜか…………天使の視線が微妙に定まっているのだ……しかも、制服が妙に着崩れている。

これではまるで…………酔った人みたいではないか。

私は、腰の銃に手を伸ばしつつ、会話を続ける。

「…………貴女、お酒でも飲んでるの?」

「な……ん、で?」

「だつて……顔赤いし、千鳥足じやない…………」

「そ、そんにや事ないわあ…………（バタン！）」

「わっ！ だ、大丈夫？」

「ふにゅ……」

突然天使が倒れた……敵ではあるが、一応は人間の形をしてるし、大体こんな所に放置しておくわけにもいかない。

「…………」これは、どういう風の吹きまわしなのかしら？』

私は天使を自室へと運んだ。

D o    y o u    d r u n k ?    . . . E n d

Another episode Yuri So you drunk?

Yuri  
S  
D  
O

日本語訳

またかの天使ちゃん飲酒疑惑です

アニメは実にけやくしまとまりましたが、この世界は……少なくとも姫龍の中ではそうはいきません……意外性を追及していく。これこそが一次創作の醍醐味だと姫龍は考へていますから

次回は『天使ちゃん吠える！（仮）』をお送りします。お楽しみに

\* ここの後書きには嘘が混じります。ご注意ください

それは、私が珍しく授業を受けていた日の話。

一時間目の数学を終えた後……私は机に突っ伏した。

「どうしたんですか、またみちゃん？」

「あー……うー……」

不思議そうに初音が声をかけてきたが、私はまともに答えれない。理由は……そう、暑いからだ。

季節はまだ梅雨明け直後だというのにこの町の最近の平均気温は25度。もはや夏じゃね？……地球もそろそろ終わりだな……と、なんだかしみじみ思つてしまつくらいの暑さだ。

しかも……そんな暑い日に熱い教室で無駄に厚い数学教師の顔を見ながらの授業である。まわりのNPC……じやなかつた、生徒もみな一応に机に突っ伏したり、団扇で煽いだりと私と同じような行動をとっている。…………それほど今日は暑かった。

「…………初音は暑くないのか？」

「いえ……そんなに暑くはないですよ？　汗とかはさすがに少し搔きますけど……」

「だよな……ああ、やる気でないな…………逃げよっかな……」

「ダメですよ？」

「分かつてると……冗談だよ、冗談」

□ではそつ言につつも、半ば本気で私がプランを練っている事を初

音は知らない。

といふか知られたら困る。」の暑い日に3時間弱の初音の説教を受けたら……それこそ私の精神が崩壊してしまつ。

(それにしても……暑いのに初音は元気だよな)

そんな初音を見て、私はふと思つ。

いつも一緒に授業受けてるわけではないが（サボつてるので）初音は何でこんなに真面目に授業を受け続けられるのだろうか？ 将来やりたことでもあるのだろうか？

「…………それにしても初音はいつも真面目に授業受けてるよな……」

「いや……まさみちゃんは不真面目過ぎますからね？」

「いいんだよ私は……このまま音楽の道に進むから」

「…………思つたんですけど、まさみちゃんは入院する前、バイトしながら音楽関係の仕事の面接受ける生活だったんですね？」

突然、初音が私の過去話を持ちだした。

「ああ、そうだったが……それが？」

「言つたくはないんですけどね……まさみちゃんのためですからね……初音、鬼になります」

「なんだよ、訳わかんないよ？ もつたいてぶつてないで話してよ？」

私の言葉に初音は一息ついた後、「うわー」と言つた……

「まさみちゃんが面接受からなかつたのって……技術が足りないとかじやなくて学歴が中卒だったからじゃないんですか？」

なに！？

「そ、そんな訳……ないだろ？　だつて世のアイドルなんか、それ  
」そ中卒してるかどうかすらあやしいのばっかなのに……」

「…………なんで、アイドルが基準なんですか？　言つておくと彼  
女たちは私達、一般市民とはかけ離れた存在ですからね？」

初音の言葉が今、始めて私の胸を貫いた。……そんな。私が面  
接受からなかつたのつて……中卒だつたからなのか……

（そんな馬鹿な…………一理あるかも知れない。……そうだよな、中  
卒で社会に出る奴なんかはそれこそ才能に溢れてる奴か、家庭に事  
情を抱えてる奴だもんな…………）

「…………盲点…………だつた。まさか…………そりなのかな…………」  
「だつて、初音が聞いてる限りですけど…………まさみちゃんの歌唱力  
も演奏力もＴＶ出ている人なんかよりもずっと上手ですし…………ケチ  
のつけようがないんですね…………このレベルでも面接接受からないと  
したら…………もう、経歴に問題あるとしか…………」  
「…………わかったよ初音…………もう何も言わなくていい」  
「…………落ち込まないでくださいね？」

心配そうに初音が声をかけてくれる。……大丈夫さ初音、原因が  
わかつたのならもう私は迷わない！

「…………必ず、高校卒業してやるー！」  
「…………わー、高校に毎日通つてる人が今さら言つてしまつセリフじゃな  
いよーそれ」

なんだか初音のツツコミが雑になつたが、そんなこと気にしてる場

会じやない。

「………… とりあえず、定期考査は必ず受けよ。田端さんは全科目  
100点だ」

「それができるまでもちやんの頭脳がこの時はかりは憎たらしきで  
すね」

なんだか教室中から嫉妬と殺意の視線を受けたが、そんなものの毎日  
死にかけていたあの世界で過ごした私には怖くない。

「ああ、やうと決まれば、少しは眞面目にせんかな…… 一時間の默  
想」

「いや…… それ眞面目に授業受けたて言こませんからね?」

「次は音楽だな…… ラッキー、めつけや樂じやん」

「聞いてくれませんね……」

「よし、行くぞ初音」

素早くものを準備した私は初音の手を引いて教室を後にした。

そして、現在私達は音楽室を指して歩いている訳だが問題が一つ  
ある。

それは……

「………… 音楽室はどこだつけ?」

「知らないんですか?」

「だつて、まだ受けたことないんだもん」

私が音楽室の場所を知らなかつた言つ事だ。

弁解をせてもらえるなら、音楽の授業はもつとギターを取り入れて

いぐべせだ

だいたい現代っ子の中に「バッハ大好き！」と言える子がどれだけいるか……お門違いなのは分かるがもつとこ……ロックなんかも取り入れていくべきだと私は思う。

「分かりました……音楽室ですね」「

悪しなき初音

「……やめよう」

結局、初音に案内しても「うつ事になつた。

この学校の音楽室は2年生の教室が並ぶ階の一番奥にある。  
1年生は通る時なんかは結構ドキドキらしいが2年生にしてみれば  
3年生が通る時はもつとドキドキらしい  
まあ……私には分からぬ感覚だが。

「大体、この学校の先輩つて怖くないだろ？」

「それはどうかも知らないけど……おれみのせんぱいやつと怖がらなさ過ぎなんだよ……」

されはもしかしてじゅないけど、褒めてないよね?」

そんな会話をしていた時だつた

『なんでお前は、イチゴオーレとプロテインを間違えるんだじや、ボケえーー!!』

ドカン！

突然、2年生の教室の壁が吹き飛び、1人の生徒が飛んできた！  
その生徒は廊下側の壁に当たった後、動かなくなる……

「…………えっと…………」

「助けるんですかね？…………私達」

私と初音は突然の出来事に驚きながらも、その動かない生徒に近づいた。

O n e   h o t   d a y   e v e n t   . . . E n d

episode zwei sone hot day events (後書き)

? ? ? ? ? ? ? ?

四庫全書

予告

「やつは遠足にはプロテインだろ！」

「こいつアホだろ」

「凄い……恭介以外の人に初めてそう思つたんだ」

# 次回 Little Busteruss

「聞  
け！  
私  
の歌  
を！」

episode zweigesche will change the world

最近、本当に筆力低下中です  
面白くなかったら御免なさい

「「あのー、大丈夫ですか?」」

とりあえず、吹っ飛んだ生徒に話しかけてみる。

「.....あー、白目向いてますね」

「ダメだなこりゃ、保健室かな」

ツンツンヘッドのバンダナ巻いた先輩は完全に気を失っていた。

「持てるのか.....私達に?」

「先輩の力を借りないと無理かもしだせん」

とりあえず、持ちあげてみようとしたが.....やっぱり無理だ。どうやつても持ち上がらない。

「ダメだな.....あー、先輩方！ ちょっと手伝ってくれません?」

「.....また、命知らずな事を」

「いいだろ、非常時だよ」

初音の非難をよそに、私は先輩を呼んだ。

「呼んだかね？」 岩沢女史

「ああ、来ヶ谷.....久し振り、このクラスだったんだ」

最近友達になつた来ヶ谷が穴から出てきた。

「それで、何か用かね？」

「何かつて……この人、このシンシンヘッド先輩どうしたらいいの？」

？」

「ああ、それのことか……放置してかまわんよ、馬鹿は死なん」

「そう……？」

「いや、まさみちゃん！ 納得しないでくださいよー！」

納得しかけた所を初音に睨められた…………何か面倒な事になつて  
きたな……

「でもどうする、初音？ 唯一知り合いの先輩に別に助けなくとも  
いいって言われたら私達にできる事なんてないぞ？」

「それはそうですが……でも」

「…………どうやら、君は優しすぎるようだな、音無氏の妹さん？」

「兄を存知なんですか？」

「ああ、一応同じ生徒会役員だからな……初音君と呼んでいいか？」

「ええ、結構ですけど……」

「ありがとう……では本題だ。初音君に岩沢女史……君たちはイチ  
ゴオーレが飲みたくて仕方ないとしそう」

「はあ」「私は水しか飲まないんですけど」

「だが、今は仕事で身動きがとれない…………そこで買い出しをヒ

マそうな生徒に頼んだ…………しかしその生徒はただ「あつた」と  
いう理由でプロテインを買つてきたのだ……君たちなりどうする？」

「許せませんよね？ それ」

「プロテインか……水に入れて飲んでみるくらいならいいかも」

「…………まあ、個人によつて解釈に差が出るだろ？ が、自分のお金で飲み物じやなくてプロテインを買つてこられれば、大抵の女子生徒は怒る。それが、現在のこの状態だ」

「要約するところのシンシンヘッド先輩はイチゴオーレの買い出しを  
頼まれたにも関わらず、プロテインを買つてきたと……それで壁に

穴が開くくらい蹴り飛ばされた……ってことですか？」

「まあ、そういう事だ」

なんだそれ…… IJの先輩最低だな……

急にこの先輩を助けようとした自分が情けなく思えてきた。隣を見ると初音も白い目で先輩を見ている。

「じゃあもう放置して行つていいいんですね？」

「ああ、かまわんよ……しかし、君たちには迷惑をかけてしまったな」

「いや、大丈夫ですよ。きつぎりだつたけど怪我もしませんでした」

「そうです、初音もびつくりしましたが、怪我はしませんでした」「そりが?…………なら、いいんだが」

「せつきから誰と話してゐるの? 来ヶ谷さん」

……その声は、来ヶ谷の後ろから聞こえた。

「ああ、理樹君。なに、ちょっとな……知り合にがこの馬鹿の巻き添えをくらいかけていたのでな……怪我はないか確認していたのさ」

「ええ! だ、大丈夫?」

声の主が慌てて顔を出した。

姿を見せたのは小柄な男子生徒だった。

Another episode

Yusa's Shadow ruler

物語的にはゆりが天使を部屋に入れた次の日の話です

……だんだんと漆黒から赤紫に変わった空を見上げながら私は想ひつ。いつか、私にも満足する日が来るのだろうか？

いつか……あの忌まわしい日々を『過去』と笑い飛ばして、ここから卒業する日が来るのだろうか？

私の答えはまだ、見つかってはいない……でも、この世界になら私の居場所はある。

ここなら、私の存在は許される。

さあ、今日もがんばり。必要としてくれる人たちのために。

(……さて、部屋に戻るか)

私は屋上を後にした。

「…………じうじう」とですか？ 異常事態つて？

『いいから早く来てくれよ！ 遊佐

「落ち着いてください藤巻さん」

『これが落ち着いていられるか！ 早く来てくれ！』

そう言い残し、藤巻さんからの通信は切れた。

「…………」

事の経緯を整理してみる。

屋上から自分の部屋に戻った後、いつものように校内を巡回していく

た私のもとに藤巻さんから連絡が入ったのだ。藤巻さんは興奮して  
いて通信内容は完全には理解できなかつたが、要約すると

『ゆりっぺに連絡がつかない』　『異常事態だ』　『お前も  
早く来いー。』

とこゝの事、りしー……

「また大袈裟ですね藤巻さん」

いつも思つが、戦線メンバーはゆりっぺさん」に依存しそぎなのだ。  
それが戦線の強さでもある。しかし、こゝにして何か異変が起つると  
彼らは自分では動けなくなつてしまつのだ。

「…………しかたない、本部にいく」と云つますか

これが彼らのためにならぬことは分かつてゐる。  
しかし、こゝのままにしておく訳にはいかないところとも事実だ。  
私は、本部へと向かつた。

「それで、どうこゝの事ですか？ ゆりっぺさんがいなつて」

あれから数分後、本部にきた私は戦線メンバーから事情を聞いていた。

「文字通りの意味です。朝からゆりっぺさんを見た者がいない」  
「風邪でもひいたんじゃねえか？」  
「それはないだろ……こゝは『誰も病まない』世界だぞ？」  
「じゃあなにか！？ ゆりっぺは消えちまつたってことがよー！？」

「そんな！」

「D o o m s d a y ……」

……戦線内は予想以上に酷くなっていた。

高松さんも日向さんも音無さんも藤巻さんも大山さんトクさんも動搖して話にならない。

私はとりあえず彼らを放置して椎名さんから話を聞くことにした。

「それで……彼らはああ言っていますが、どうなんですか？」

「高松が言っている事が確定情報、後の残りは可能性だ」

「あなた個人の意見としては？」

「消えてはいないだろが、身動きが取れないのではないかと考えている」

「そうですか……しかし、いつ言つてはなんですが、皆さんがゆりつペさんがないだけで慌て過ぎですね……情けない」

「あさはかなり」

大方の事情はつかめた。

後は、探すしかないだろう。

私は、天井に向けて一発、銃を放つた。

バン！

途端、シンとなる本部みんなが驚いたように私を見る。

「…………みなさん、落ち着いてください。余計な事をしている時間はありません。これからは、私の指示に従つて行動してください」

私は、静かにしかしあつさうと呟つた。

説明しておくとあまり知られてはいないが、戦線の中には一応、序列がある。

リーダーのゆりっぺさんがナンバー1とすると、ナンバー2はチャさん。そしてナンバー3が……私だ。

ゆりっぺさんの仕事は組織の指揮と戦闘、チャさんの仕事はギルド内の統率と武器生産にある。

そして私の仕事はガルデモのアシストに非戦闘時の情報収集、そして非常事態の際の組織統率なのだ。

やつた事はないがやるしかない。

私は、ゆりっぺさんの席に腰掛ける。

「状況を確認します。現在、ゆりっぺさんが行方不明。これにより戦線の指揮権は私、遊佐に移行されました。これより私の指示に従って行動してください」

「しかたあるまい、ゆりっぺのためだ……それで、俺達は何をすればいい？」

いつもは、自分勝手な野田が今日は積極的に指示に従おうとしている。

やはり……ゆりっぺさんの存在は絶対なのだ。  
このミッション……絶対失敗は許されない。

私は、PCを動かしつつ、作戦行動のための準備を進めていく。

「戦線の現メンバーは……戦闘員は8名、非戦闘員は私、竹山さん、高松さんを含め62名……計70名です。竹山さん、現在機械系に精通している戦線メンバーはどれくらいいますか？」

「現在、約10名です。僕を入れると11名……あと僕の事は……」

「わかりました。では、竹山さんと松下さんはここに残つてください。ガルデモメンバーは本部にて待機、後の戦線メンバーはゆりっぺさんの捜索、もしくは保護を優先してください。仮にこれが天使または他の敵性生物の罠……という事も考えられます。常に2人以上で行動し、銃、予備弾薬、サバイバルナイフの所持を忘れずに行動するようにしてください。今、機械系に精通した非戦闘員を各ポジションに配置しています。これから配布するプリントをなくさない様に。何か情報が得られた場合はこのポイントにいる戦線メンバーに報告してください」

「凄い……アホの集団があつといつまに組織化されていく……」

「さすがだぜ……遊佐」

「Ruler behind the front……」

「では皆さん健闘を祈ります……ミッションスタート」

「ひじて、ゆりっぺさん捜索作戦が始まった……」

Shadow ruler ..... End

## Another episode

## Yusa S Shadow

## ruler

See on armas, ta . . . ta Yusa  
Ma?t leksin, k?ik inglid, draa  
konid on mu lem mik printsess c  
han Yusa (naerab)  
Noh, ma p?rast tem a ingel . .  
no, auaste m?rke, et nii . . M  
atead sin, hea ja ?ige . Nad k?  
ik nagu lohe print sess . Seep?r  
ast Jumal and eks tem a andsite  
meile vastuv? etav.  
See luguei ole l?ppenud nagu  
anime. Kas ma pean l?petaja k?  
igiga? See v?ib Jumala poolto  
led?  
Ma is egi niisutatud leige vee g  
Ma tahan elada seda lugu . . N  
ad tahav ad naerda . . see ongi  
see lugu . .  
Palun nautida j?rgmine kord  
N?eme

## 日本語訳

可愛いですね、彼女……遊佐ちゃん

みんな天使がいって言つけど、姫龍は遊佐ちゃん一番好きです（

(笑)

まあ、次は天使ちゃんなんですが……いや、そういう風にキャラにランクを付けるのはやっぱり良くないですね……訂正します。姫龍は彼女たちみんな好きです。だからこそ、そんな彼女達に理不尽を与える神が許せない。

この物語は、アニメのような終わり方はしません。みんな卒業しなきゃいけない？ それこそ、神の勝手でしょ？

ぬるま湯に浸かっていてもいい……そんな世界があつたていいじゃないか！

この物語の中だけでもいい……彼女たちには笑ってもらいたい……それがこの物語の理由ですから……  
次回もどうぞお楽しみください  
それではまた

episode zwei senior shambles (前書き)

男主人公には試練を……これが男性ユーザーの心理です

「だ、大丈夫?」

その小柄な先輩は慌てたように私達に駆け寄つて来た。  
どことなく大山に似てる人だと私は思った。なんか特徴がないのが  
特徴とか言いだしそう……

「大丈夫ですけど……まさか、先輩がやつたんですか? この人を

……

「いや、そんな訳ないから!」

「はは……冗談ですよ、そうですよね……そんな訳ないですよね」

意外だ……この学校で初めてまともな人にあつた気がする……  
しかもツツコミ役……稀少だな。

「じゃあ、一体だれがこのツンツンヘッド先輩をこんな目に……いや、初音は別にかわいそうとは思いませんけど? ここにあると邪魔ですよねこれ……」

「うわー、真人全然心配されてないね……」

「当たり前だ、プロテインを女の子に買つてくる奴が世界のどこにいる? 女の敵だよ真人少年は」

「それは……そうだけど……ごめん真人。今回ばかりは真人に弁解の余地はないね……まったく言葉が思いつかないよ……」

……さつそくあの先輩にまで諦められたツンツンヘッド先輩。（真人といいうらしい）  
哀れ、その屍はいつまでも放置されてたそうな……どんとほらえつと。

「いや、そこのキミ何かもう飽きてるでしょー?」

「凄いですね、先輩。まさか私の地の文にまでツツユミを入れるなんて……先輩はツツユミの女神ですか?」

直枝理樹は『ツツユミの女神』の称号を得た!

「いやあかしいからね! ? なんなのさ、ツツユミの女神つて! この娘、地の文がなんたら言つてるけど、わざきからずつと普通に声に出してしゃべってたからね! ? セシテこの称号はいやだよー。」

「凄い……一瞬で今、筆者が出したツツユミ所を全部言いつぶしてた……やりますね先輩」

「キミの頭にはかなわないけどね! ?」

なぜだらり? ……この優男な先輩(理樹)があの金髪馬鹿にちょっとだけ被つた気がする……

何故だかわからないが、もつとの先輩をからかいたくなつてきた……さらに私は会話を続けようとしたが……

「それくらいで勘弁してくれないか? 岩沢君」

「…………わかりました、来ヶ谷がそういうなら…………しかたありませんね」

「…………なんで来ヶ谷さんには従順なのを……呼び捨てだけど」「理樹君ももうつっこまなくていい」

「…………わかつたよ」

来ヶ谷に止められてしまつた。

しかたない。来ヶ谷の言つ事には従おつ。

「じゃあ、そろそろ私達授業がありますから」

「そりが……すまんな、この馬鹿のせいで時間を浪費させてしまつた……こいつは後で理樹君が片付けるから安心していい」「いや、僕！？」

「そうですか、ありがとうござります理樹先輩」「いや……もういいよ」「じゃあ、失礼します……おい、いくぞ初音」「あ……えっと、失礼します」「ああ、また今度な」

私と初音は来ケ谷別れを告げて音楽室に向かおうとしたその時……教室から複数の人影が出てきた。

「理樹どうした？あの馬鹿そんなに重症か？」  
「理樹君どうしたの」授業始まるよ～「わふー、リキなにかトラブルでも？」  
「直枝さん……どうかされましたか？」  
「理樹君どうしたのなんか面白い事でもあつたデスか？」  
「直枝……早く席に戻りなさい。授業が……」「直枝……いつまで遊んでますの？」  
「理樹も来ケ谷もいつまで真人の馬鹿にかまつてるんだ……俺が寂しいじゃないか！！！」

……出でてきたのはみんな女子生徒ばかり（例外も1人いるが）だつた……

どことなく、猫の尻尾を連想させるポニーテールが印象的な先輩。ショートボブの髪型で、大きめのセーターを着用している、なんだか和んでしまう先輩。

白い帽子とマントを身につけた小柄な先輩……クオーターかな？影が薄そうな蒼色の髪をした先輩……赤いウイッグ似合つてますよ？髪型がかなり特徴的なツーテールな先輩……あの私、見覚えあるん

ですけど？

そして、風紀委員長様……あの前文のツーテールさんは「J氏族ですか？」というか瓜一つなんですけど？

長毛種の猫の耳をイメージしたようなリボンをつけた先輩……あ、野球部レギュラーの人だ……

そして最後に現れたなぜか袴姿の男子生徒……そのけがありそうな顔してるな……

以上、説明終了と。

追記すると女子生徒みんな美人で可愛い……少しうらやましい。

そのまま、立ち去ろうと思つたが一応挨拶しておけばこれが何かの縁になるんじゃないかな……と思つた私は立ち止つて振り向いた。

「先輩……意外と節操無しですね」

とりあえず理樹先輩を詰つてみる。

「え……何が？」

「だつて……こんな美少女ばかり集めて……ハーレムですか？」

「いや！ そんな訳ないからね！」

「そんな……みんな遊びだったんですか……？」  
「女の敵」

直枝理樹は『女の敵』ハーレム王の末路』の称号を得た！

「いやいやいや！？ サラに酷くなってる！？ なんなのさ、ハーレム王の末路つて！ 僕、ハーレムなんか形成してないからね？ みんな友達だから！ というか何でこの天の声はこんなにもこの一年生に従順なのさ…」

「先輩…… やよなら」「

「いや、ツッ『ミミ』に對してボケがなんの反應も示さないのは反則だからね！？」

詰め寄つてくる理樹先輩肩を掴まれて以上のセリフを一息でお吐かれになつた……よく息続くな……先輩の必死の説得を左から右へと聞き流しつつ、私は来ヶ谷へと田で合図を送る。来ヶ谷の唇の動きから「了解した」と言つたのがわかつた。

「見る…… 理樹君があんなにも必死に一年生を引摺とめている……これは本気だぞ……」

「そんな…… 理樹の奴…… 年下好きだったのか…… きも」「鈴ちゃん、そんな事言つたらダメだよ～…… でもちょっと寂しいな～」

「わふー、リキは年下好きですか！……………これはチャンスなのです！」

「……………直枝さん、あなたには失望しました……」

「理樹君年下好きか～、どうする？ お姉ちゃん？」

「ど、どつにもしないわよ…… ただ、放課後反省室行きね」「直枝…… 後で後悔させてあげますわ～！」

「そんな…… 理樹…… 僕たちというものがアリながら……」

「いや！？ みんな本気にしないでよ？ なにこの状況！？」

「ツケがやつて来たんでしょうね……」

「まったく…… 少しは節操を持つたらどうだ？ 少年」

自分たちが持ち上げた事は棚に上げて、私と来ヶ谷はさぞ眞然といつように先輩に言つた。

「…………恨むからね、来ヶ谷さんに一年の…………」

「岩沢まさみです」

「…………君、恭介並に大物だね。今、僕は恭介以外で初めて凄いと人に対する思つたよ」

「ありがとうございます」

「…………褒めてないんだけどな…………」

勿論、わかってますとも…………

さらには会話を続けようと思つたが、今度こそ終わるのようだった。

……チャイムが鳴った。

「じゃあ、私達はこれで失礼します。……先輩」

「なにかな…………」

「…………強く、生きてくださいね…………人生まだまだこれからです」

「君に言われたくないよ…………！」

そんな、先輩の絶叫を後に私は音楽室へと向かつた。後に残つたのは屍となつた先輩と囁う来ヶ谷。女子生徒のみなさん

に取り囲まれる哀れな理樹先輩だけだった…………

その後、どうなつたかは知らないが、来ヶ谷に聞いた話によると、それから3日間、理樹先輩は学校を休んだらしい。

…………少し、やり過ぎたかなと思ったがまあ、私のせいじゃないでしょ？

…………これは、ある暑い日の熱い先輩達のお話。

## Another episode Yuri's Black Angel

遊佐が指揮をとつて、ゆりっぺ搜索作戦を始める。時間ほど前の事。

「この娘、どうしようかしら……」

私は途方に暮れていた。

その理由は、私のベットで眠る天使。

成り行きで保護したとはいえ、仮にも天使は戦線の宿敵である。  
誰かに相談しようとも思つたが、もう時刻は真夜中。だれも起きて  
はいないう。

それに、こんな状況を誰かに見られた戦線の士気に係わる……

「やつぱり、自分で何とかするしかないわね……」

とりあえず、どうするか考えてみる。

…………やつぱり起<sup>ハ</sup>すところのが一番妥当だ。

「…………やつてみるか」

いつじて、天使を起こすオペレーションが始まった……

Operation 1 普通に起こす

「…………起きなさい、天使」

まずはポピュラーな搖するから……私が生きていた時、お母さんはいつもこれで私を起こしていた……これは期待できる。

私は天使を揺すってみた…………が

「うわっ！？」

ブン！

普段の訓練のおかげで反射的に体が動いた。  
私の目の前を鋼色の刃が通り過ぎていく……  
間一髪でよける事ができたが……危なかつた。

「…………寝ぼけてハンドソニックって一体何なのよ……死ぬ所だ

つた

「…………ちひ

「ちょっとー 今、舌打ちしたわよねー！？」

「…………

「…………寝言で舌打ちとか、どんなタイミングよ……ホントに寝てるのかしら？」の娘

危なく、死にかけた……

「今度は別 の方法で起こしてみようかしら？」

私は、備え付けの台所に向かった。

ガンガンガンガンガン！

「起きなさい！」

私は、台所から持つてきただ鍋をお玉で精一杯叩く。  
……「れはすごい五月蠅い……しかし。

「…………」  
「起きないわね…………って、耳栓してるじゃない、この娘！ 誰よ、耳栓つけたのは！ ていうか、起きてるでしょ、あなた！」

天使はなぜか耳栓を装備していた……絶対起きてるでしょ、この娘。頭にきたので、もう銃で起こそうと私は引き金に指をかけたその時。

「こひー、うるさいわよ！」「今何時だと思つてんの！？」「ちょっと出てきなさいよ！」

「…………しまったわ

……今が夜だという事をすっかり忘れていた。  
外からNPCの怒鳴り声が聞こえる。

「無視すれば大丈夫でしょう……って、天使がいるじゃない！」

もし、NPCが集まつて来て部屋の中に入られれば、ここに天使がいるとばれる……そうなつたら……

「破滅だわ……」

女子同士でお泊り会やりつてました」とかそういう事ではすまされない……なんせ私はSSSのリーダー、寝てるこの娘は宿敵、天

使なのだ……

一緒にいたことがばれると非常にまずい……

「…………あんた、後で覚えておきなさいよ…………」

私は、怒鳴られ覚悟で部屋の扉を開けた……

「くう…………なんで私がＺＰＣなんかに説教がまされなきやならないのよー！」

結局、あれから一時間、廊下で正座しながらＺＰＣに説教された……なんて屈辱だ。

運よく戦線メンバーには見られなかつたがまさかＺＰＣに曝し者にされるとは……

「神を見つけたら、今回の分もきつあつ殴る…………」

私は決意を新たに部屋に戻つた。

部屋に戻つて私が見たのは……ベットに腰掛ける天使だった。

「大変だつたわね」

「…………これは、目の錯覚かしら？　私にはあなたが起きている  
ように見えるのだけれど？」

「ん？…………大丈夫よ、貴女の目に見えるもの、それが真実だから  
「そう…………」

つまり、あんたは起きてた訳ね…………ずっと。

私は何も言わず、天使の額めがけてナイフを投擲した。……が

「なつ！？」

「……今私はそんなに甘くないわよ？」

なんと天使は飛んできたナイフを人差指と中指で掴んだのだ。

……ありえない、投擲したナイフは遅くても時速100キロ弱は出ているのだ。彼女は秒速約280mで動く物体が見えるのか？ しかも……ナイフは彼女の額、数ミリという所まで来ていたのに瞬き一つしない。

……なんという度胸だ。

「やつぱり、ただの人間って訳じやないのね……あなた

「あなたこそ……おしいわね」

「…………どういう事？」

「今の私じゃなれば、確実にあなたは『天使』を倒せてたという」と

……今の私じゃなけば？

「じゃあなに？ 今のあなたはいつも天使とは違うの？」

「ええ、そういう事になるわね」

「…………どういう事なの？」

「私が、敵に情報を与えるとでも思つ？ ……まあ、いいわ。この後どうなるうと私には関係ないから、教えてあげる。…………原因は誤作動よ

「誤作動？ ……具体的にいいなさいよ？」

「ガードスキルつてあるでしょ？ その中の『harmonics』というスキルが誤作動を起こしたの。本来、『harmonics』は分身を造るスキルなんだけど……発動した時、彼女すごく情緒不

安定な状態だつたの……それで出てきたのが私。普段の彼女とは違  
い私は攻撃性の塊……彼女、慌てて私を戻したわ……でもその時、  
運悪く『harmonics』が誤作動。私の自我は消えることなく彼女の体に戻つた……まあ、わかりやすく言つなら? ジギルと  
ハイドつてところね。一つの体にいい子の天使ちゃんと悪い子の私  
の二つの自我が同時に存在する状況になつたの……それで、天使ち  
ゃんは誰かに助けを求める内に偶然、貴女の部屋の前に来て気を失  
つたので、代わりに私が出たつて訳。わかつた?」

「…………なんで最初、彼女酔つたみたいになつてたの?」

「ああ、それは私が途中お酒飲ませたから……彼女、酒弱すぎね」

なるほど……そういう事だつたのか。  
しかしそうなると……

「彼女を元に戻さないといけないわね……あなた消える気ある?」

「…………それ本人に聞く? 普通」

「だつて、確認しとかなきや後味悪いじゃない」

それに、こんな攻撃的な天使にいつまでもいたれたら、それこそ私  
達戦線の存亡にかかるわ。

この天使はおそらくオリジナルよりも強い……真実を暴露するのは  
それでも勝てると思ふでいるからだ。

「でつ? 消えるの消えないの? 答えによつては消してあげるわ  
…………なるべく優しく」

私は銃を向けたままそう言った。

天使は笑つたままだ。

「いいわよ……別に消えてあげる

「…………へ？」

黒天使の予想外の答えに私は一瞬脱力しそうになつた……

「大丈夫？ 貴女」

「大丈夫つて……今、流れ的にあなた「私を消せるもんなら消してみなさい」みたいな感じだつたじゃない！ それが「まあ、消えてもいいですよ」って感じに返されたらそりや脱力するわよ！」

「いいじゃない……別に消えるんだつたら」

「まあね……そうよね（納得するしかないのか？）」

「でも……一つ言つておきたいの」

「何よ？」

黒天使が突然真顔になつた。

「私が今回現れた理由は…………貴女達のせいなのよ？」

「どういう事よ？」

「貴女達が彼女を貶めたんじゃない…………スキルの誤作動は偶然だつたとしても直接的な原因は貴女に原因があるの……忘れたとは言わせないわよ？ 今回のテストの件」

「あれが…………原因なの？」

その言葉にハツとする。

そうだ……確かに私は彼女を貶めた。

彼女のテストをすり替えたのだ。

「彼女は全てを失つたわ……友達も恋人もいなかつたけど彼女はこの世界で唯一NPCからの信頼を勝ち得ていた。その唯一の彼女の誇りを貴女達は傷つけた……それは忘れちゃダメよ？」

「…………悪かつたとしか言えないわね……ごめんなさい」

「いいわよ……私に言つても無意味だから……ただ、彼女が戻つて  
きたら、ちやんと謝りなさいよ？」

「ええ」

それは黒天使と私が交わした唯一の約束……しつかり守りつゝ想つ  
た。

「じゃあ、本題」

「え？ 今の前置！？」

「そうよ？ なに不思議そうな顔してんの？ 本題はこれからよ」

「今のは差し置いた本題つて一体なによ？」

「私の消える条件」

「……あんた、今無償で消えます的な感じだつたわよね」

「馬鹿じゃない？ 世の中に無償<sup>タダ</sup>なんてないわよ……条件は一つ、  
朝まで飲みましょっ！」

「…………へ？」

「貴女は頭が悪いの？ 耳が悪いの？ 私は朝まで一緒にお酒を飲  
みましょっって言ったの！」

何をおっしゃつてんだこの黒天使？

私が…………晚酌？ 天使の？

「…………マジで？」

「マジもマジ……大マジよ。言つておくけど……私が酔いつぶれる  
まで貴女寝かせないから。それに私は満足しないと消えないわよ？」

そんな訳で……

「…………これ、一体どんな罰ゲームよ  
「決まつてるでしょ、私の答案すり替えた罰」

私は、天使に晩酌しながら夜を明かすことになった……  
もつ……絶対、あんな作戦やらない……

「「乾杯！」」

私は半ばやけくそ氣味に黒天使とグラスをぶつけ合った。

B l a c k   A n g e l   . . . E n d

「しかしいいのかしらね？ 私達学生よ？」

「いいのいいの……これこそ学生の醍醐味でしょ？」

「それバイクショーンだから」

「訳わかんないわよ……あんた」

「ははははは……」

今回、短めです

そして、全ての話を改稿しました！  
タイトルは違うけど話は変わってません  
どうぞこれからもお楽しみください

## キーイング一連のカーニング

「お、終わった……」

田直が「起立、礼」とお決まりの言葉をしゃべる中、私は一人、机に突っ伏していた。  
そんな私を数学教師は責めることもなく、びいしか憐れんだ田で見つめている。

(…………屈辱だ…………)

いつもならこの数学の時間は来ヶ谷ベンチでお茶をしている私なのだが、今日はめずらしく授業を受けていた……いや、受けさせられていた。

「反省しましたか？ またみちゃん  
「初音……お前……」

いつも通り微笑みながらやってきた初音が今日は憎らしげ。

「ん？ どうしたんですか？」  
「ほんにゃうひ……いいから早く外せよ！ 足のこれー」  
「ああ、忘れる所でした……」

にやにやした笑みを顔に浮かべながら、初音は足もとに囁み込んだ。  
そして……ガチャガチャと何か音がした後……

ガチン！

何かが外れる音を聞いた私は、すぐさま立ち上がり、備え付けの口ツカ一へ走る

「うおおおおおおおおおお……」

間一髪、それをキャッチした……

「よかつたですねー、まさみちゃん」

「初音……お前え！」

私はギター片手に立ち上がり、初音と睨みあつ。

「おいおい……今日はまた随分荒れてねえか？」岩沢

「いや……それよりも初音ちゃんが……」

教室の隅でこそ生徒達が話し合ひ声が聞こえたが、そんな声は今は気にならない。

「…………本氣でやるつもりか？ 初音」

「やつちこそこそ……負けて恥かかないといいですね？」

私達は教室の中で、火花を散らしていた……

事の始まりは昨日にさかのぼる……

昨日の事……

ジャーン！

「…………よしぃー、いいぞ、初音ー、かなり出来上がって来たな  
「そうですかー！やつた！」

音無家にギターの爆音が響き渡る。

最近描写はないが、私と初音は夕食の後、毎日一時間、ギターの練習をしている。

ちなみに音無家の夕食の時間は7時。これは初音が9時からドラマが見たい……とこつ要望と、必ず一時間は初音と音を合せてギターの練習がしたい……という私の要望がぶつかった為のこの時間だ。それでも練習は面倒だろうが、初音は文句の一つも言わない。……本当にいい子だよな。

当の初音も最近、かなり上手くなっている。そり…………そろそろライブに参加できるくらいにだ。

（今度、ライブに出すかな……）

そんな事を私は薄らとだが、考えていた。  
まだ一人だけだが、それでもちゃんと音楽にはなる。

（後はドラマもほしいな……）

ついでに欲深い事も考えてみた。

……まあ、なんにせよ、初音がライブに出る日がいまから楽し  
みな私なのだつた。

「じゃあ、今日は！」今までにするか……

「はい、ありがとうございましたみなさん……ドキュドラマです  
！」

（……初音は自分の好きな事になると早いし、速度になるよな）

普段の約3倍くらいの速さで動く初音を後日に私はギター等の道具  
をしまい、自分の部屋に戻る。

初音がドキュドラマを見ている間、私は部屋で新曲を考える。

(……People eventually fade away  
into the memories alone is ...  
こんな感じかな？)

最近はロックと回じくらごバーードも考えているのだが……まあ、  
作曲といつのまでも簡単にはできないものではない。

結局、今日の収穫は一時間かけて一番の歌詞の原型ができるといつ  
た所だ。

（……少し、休憩するか）

私は、リビングに戻った。

リビングには音無の姿があった。たった今帰ってきたのだろ？ 忙しい奴だ……

「あ、兄貴帰つてたの？」

「ああ、さつきな……つて、まだ兄貴のままなのか？ もひお兄ちゃんとは呼んでくれないと？」

「当たり前だろ……『お兄ちゃん』つてのは尊敬でもせれくなきや呼ばれないんだよ」

「…………go heid a? ? a? er kominn t?  
m-i fyri r ku1da o go . . .? (寒い時代だと…

…思わないか？)」

「?????? (自業自得だよ)」

音無と軽く会話をした後、私は冷蔵庫へ向かう。

何か飲もつと（まあ私は水か麦茶しか飲まないが）冷蔵庫を開けた。

（…………む、マイシは…………）

そこでの私の目に入ったのは…………プリンである。  
しかも結構有名な店の焼きプリン。

おそらく、音無か初音のどちらかが買つてきたのだらうが…………  
旨そうだな。

私とて人の子だ…………美味しそうなものを見たら食べたくなる…………  
そう、それが例え人の中も

（…………て、何考えてんだ……ダメだら…………）

慌てて、邪な心を打ち消すと頭を振つてみると……

（きつと…………美味しいんだらうな…………る…………フルプルして、舌

の上で蕩けたりするんだろうな……）

ダメだ。打ち消せない……

私は、精一杯抗おうとしたが（一瞬）プリンの魔力には勝てなかつた……

恐る恐る……冷蔵庫からプリンを取り出す。そして周りに人気がない事を確認して（この時、首は動かしてはいけない……教えてくれてありがとうございました）……プリンをジーンズのポケットに入れた。

（よし……第1段階クリア）

後はスプーンを持って部屋に逃げ込むだけ……私は先ほどと同じ動作を繰り返した後、スプーンを見事ゲットした。

（よし……ハッシュショノコンブリーーーー）

「…………どうしたんだ、まさみ？ すげえ拳動不審だけど？」

「馬鹿兄貴ーーー」

「ロシア語で罵られた！？」

途中、声をかけてきた愚かな音無に罵詈雑言を浴びせつつ、私は自分の部屋に走つて行つた……

「…………俺が一体何をした？」

「どうしたんですか？ お兄ちゃん？」

後に残つたのは、茫然と立ち尽くす音無だけだつた……

そして部屋にて

「プリンだ  
プリンだ  
」

見事、プリンを気づかれる事なく奪取してきた私は普段よりテンションを上げて喜んでいた。

しかし、今そんな事はどうでもいい。

( もう、食べるぞ……プリン！ )

私はプリンを小皿の上に落とす。  
揺れるプリンはこんなにも愛らしく……

「いつただきま～す！」

私はプリンにスプーンを突き刺し、一口……口に運んだ。

卷之二

ガラ！

「おやみちゃん一緒に風呂入りませんか？」  
……………つてえ！

初音が……入ってきた。

「..... しまつたああああああああ！ 部屋に鍵閉めんの  
忘れたあああー！」

なんてこつたい！ 私とした事が致命的ミスを！

初音は……しばらく陸に上がった魚の様にパクパクと口を開けてい  
るだけだったが……

「何食べてるんですか！？ それ！ 私の楽しみにしてたプリンな  
のにい……！」

「！」、「めん！」これには……これには訳が……」

その後、私は弁解したが初音の機嫌が直る事はなかつた……

ここまでが昨日の出来事。

話は私と初音が睨みあつて いる所に戻る。

Peace is a precious long trans  
ient ... End

## Another episode Yusas People notice

Another episode Yusasの続きです  
オチはもう分かってしますが、重要なのはオチではありません。  
過程です。

それで、最近気がついたのですがタイトルを和訳する機能があります  
すがあれはお勧めしません。というか意味が全く違つてくる……  
姫龍が言いたいのはただ一つ  
英語の方が、かつこいいじやないか！ それだけです

ひとつペセと搜索作戦から早2時間がたつた。

「…………おかしいですね、こんなに探ししても見つからないことは…」

「いや…………おかしいのはあなたですよ、高松さん」

心配そうに駆け高松さんと竹山さんがシッパリをいれる。

「…………なあ、遊佐」

「なんですか？ ひたすらさん」

「高松は…………何で空氣イスなんだ？」

…………それが、今気になる事ですか？ ひたすらさん。  
たしかに、なぜか高松さんは「シラップ」が始まつてからずっと  
空氣イスだ。

しかし、本人はふざけている訳ではないようなので私はずっと無視  
を貫いていたのだが……

「やめれせますか？」

「いや…………そんな不思議そうな顔するなよ…………わ、私が間違つてる  
のか？」

「いえ、間違つてるのは確實に高松さんの頭ですからひたすさんが  
不安になる事はありません」

「そうか…………ならいいんだが…………」

「でも…………流石にちょっとね…………」

「うん…………なんかむか苦しい…………」

「そうですか…………高松さん、入江さんと関根さんが迷惑しているので止めていただけませんか？」

「わかりました……しかし、それでは私は何をすればいいのでしょうか？」

العنوان

「まず窓を開けてください。そして貴方の任務はここにいるガルデモメンバーの護衛ですから、しつかりその役目が果たせるよう体を

「おおきなうきわ」

「わかりました。では腕立て伏せでも……」

「それから迷惑がんしゃホグー！」

アラカルト

卷之三

高松さんは窓を開けて先の書類を置いた所で、ゆいちゃんは蹴り落とされた。

「……どうからか嫌な音とこの世の悲鳴が聞こえるか……聞かなかつた事にしよう。

「………… ゆいさん。激情で仲間を殺害しないでください。あれで毛立派な肉の盾ですよ？」

「うむ、……ここ」

「いや、とにかくじゃねーよ、妹い！ それに遊佐も！ なんだよ

「比喩表現ですが？」いざとなつたら本気でしたが

「それは比喩じやねえだろー」

「しかし、高松さんではありますんが本物じゅつべやんせんじる

私のつぶやきを聞いて、顔をしかめるひたすらんと入江さんと関根さん。

私だけ信じたくないが、万が一という事もこの世界にある。

なんだか、部屋の空気が重くなってしまった……

「あれ～？ 皆さん暗い顔しちゃって……大丈夫ですって！ 隊長さんが消える訳ないですよ？ だつて隊長さんですもん！」

……ゆいさん、あなたには空気を読むというスキルがないんですね？ ないんでしょ？

「そ、そうだよね～」

「だな、ゆりっぺが消える訳ないよ」

「うん」

でも、ゆいさんのおかげで場は明るさを取り戻した。これも彼女の才能なのだから……さて

「では、そろそろいきますか」

「ん？ どこにいくんですか遊佐さん？」

「ゆりっぺさんの所にですよゆいさん。田畠がつきました」

私の言葉にその場にいたメンバーが目を丸くした。

「ホントかよ？ 遊佐」

「はい、ひや子さん」

「一体ゆりっぺはどうしているの？」

「うん、私もそれ知りたい！」

「残念ですが……教える事はできません。ガルデモメンバーに何かあつては事ですから」

「気にしなくともいいぜ？ 別に死なねえし」

「そういう問題ではありません。では行きます。竹山さん」

「はい？ なんですか」

「新たに送りってきた情報があれば報告して貰ださい」

「了解です」

「それでは……」

私は、本部を出て、ゆうつペさん捜索に加わった。

これまで、来た情報はみな一貫して『校舎内にゆうつペさんがいる』という情報ばかりだった。

「灯台もと暗し」という言葉があるが、だったら逆にゆうつペさんは動いていないのではないか?

私は、そんな考えから女子寮に向かう事にした。

一人、廊下を歩く。

「ちょっと、止まつてもらおうか。セイの生徒」

誰かが私を呼んだ。

「あたま……今は授業中だぞ? こんな場所で何をしている?」

……………セイはアヤの廊下を引き連れた生徒会長代理の姿があつた。

People notice unexpected ..... End

## Another episode Yusaku The penalty

「そもそも……今は授業中だぞ？　こんな場所で何をしていろ？」

NPCの部下を一人引き連れた彼はそう私に言った。

目の前にいるのは生徒会長代理、直井文人。天使の後釜として選ばれた生徒だ。

嫌な相手に見つかった。

「…………探し物をしていました」

「今は授業中だぞ？」

「私には関係のない事です」

「何を探していました？」

「あなたには関係ありません」

「…………不真面目だな。連れて行け」

どうやら私の言葉が気に入らなかつた様で彼はさうNPCに命令する。

NPCの一人は無言で私に近づいてきた。

そして私の手後ろにまわして拘束しようとしたところで……私はNPCの太腿に、そつとスタンガンを押しつけた。

「――？」

瞬間、仰け反つてNPCが倒れる。

私は彼らの脇にしゃがみ込むと、トドメとばかりにやせしくスタンガンを首筋に押しあてた。

NPCは動かなくなつた。（念の為に語りと死んでない。あくまで氣絶だ）

「さて……残念でしたね？」

私はそう彼に告げる。

彼はかなり驚いたようだ。

信じられない、といった顔で私を見ている。

「馬鹿な……あさま！ 何をしたか分かってるのかー…？」「NPCの太腿と首筋にスタンガン当てましたけど？」  
「そんな事が……何故できる」  
「甘いんですよ、あなたは。どこの世界にも必ずルール破りはいるものです。……そう、あなたと一緒にですよ……直井文人さん？ ……そろそろ腹を割つてお話しませんか？」

私がそつと、彼は田を細めた……

「…………いつから気づいていた？ 僕がNPCでは無い事に」「先日、あなたがNPCに暴力を振るつてているのを見た時からですよ」  
「…………見ていたのか」  
「凄いですね……あれで帳尻を合わせていたなんて驚きですよ」  
「…………なぜ、報告しなかった」  
「…………あなた、その内事を起こすつもりでしょ」  
「…………ああ、そうだ」  
「それが、失敗されたり実行されなかつたりすると困るからですよ」  
「…………どういう事だ？」

「反省の為です」  
「彼の疑問はもつとも、だらつ。  
なぜ、私が事を起こされなきや困るのか……それは

「反省？ 何を」

「最近、ゆりっぺさん達少しずれてきてまして…… その修正です。まったく天使の答案すり替えるとか、正気の沙汰じゃないです。一体何を考えているのか…… 」こり邊で反省の為に痛い目に遭った方がいいと思いまして」

「…………だから、僕を利用すると？」

「はい。思いつきり痛めつけてもいいです」

「…………おかしな奴だな、さあ……」

彼は少し呆れたように呟いた。

そんな彼に何も言わず、私は背を向けて歩き出す。

「それではそろそろ失礼します。…………私は今日この瞬間の事は報告しませんので、そちらも今回は私を黙認してください。…………いですね？」

「ふん…………気にいらないな…………まあ、よからう。僕は神だからな…………ただ、その瞬間になってから泣くなよ？」

「ええ、それでは」

私は女史寮を目指して再び歩き始めた。

その後、私の思った通り、ゆりっぺさんは部屋にいた。  
ただ…… どんな状態だったかは、ここでは話せない。

追記するならこの口をふくめ3日間、ゆりっぺさんは戦線本部に出てこれなかつた。

「…………確かに、昨日プリンを食べた事は謝るよ…………でもな…………でも…………これはねえだろ?」

「うぬせこです…………雑音は初音の耳に障ります…………」

「…………うんにゃう」「

既に4話たつたが、私と初音はまだ睨みあつていた。  
状況的に言つなら4話前から全く動かず、回想といつ訳だったのだが…………私は何の話をしてるんだ?  
まあ、先の通り悪いのは確かに私だ。  
プリンを食べたのは…………悪かつた。それは認めよつ。  
しかし…………それにしたつて初音は怒り過ぎだろ?  
なにも…………

「なにもあんな事しなくてもいいだろ?」「

「自業自得です」

話は今田の朝に戻る…………最近、戻つてばっかりだな。

結局、昨日の夜はいくら謝つても初音の機嫌は直らなかつた。  
朝になつてリビングに降りてくるとモフ、初音は学校に行つてしまつていた。

久しぶりに音無と一緒に朝食をとる。

「…………じやあ、初音のプリン食べちゃつた訳か…………どつりで朝、

機嫌が悪かった訳だ」

「反省してるよ……しかし、こんなに怒るもんなのか？」

「……まさみあんまり反省してないだろ？」

「いや? 一応、後であやまつて同じもの買ってきて帳尻合わせようとは思つてるけど」

「…………本当、音楽以外は鈍いよね」

「…………どういう事だ?」

「分からぬならいいよ。ただ、学校でこれ以上初音怒らせないようにな? ……あと……」

ここでは初音の話題は終わり、後はひたすら生徒会役員としての説教が待つていた……言いたい事はわかつてゐるけど……見た目ひきこもりみたいな奴に言われると腹立たしいな(今の音無はある世界と違つて前髪が長い。参考するなら第9話つて所だ……て、また意味の分からぬこと言つてるな私は……)

その後、家を出た私は音無と一緒に学校に登校した……途中、何人かの女子生徒に指さされたが、私は無視を決め込んだ。

教室に入った私はとりあえず、初音に謝りつつその姿を探したが、なぜか教室に初音の姿はなかつた。

初音の奴……とことん今日は無視する気か。

しかたない……授業になればあいつも教室に戻つてくるだろ? 私は壁際に貼つてある時間割を確認する。

今日の時間割は……数学、現文、社会、英語、理科、英語、数学……殺す気か、おい?

(なんだこの殺人的プログラムは?)

いつも受けてないから分からなかつたが、他の時間割もみんな同じ

ようなモノだつた。

……この学校、実はかなり進学意欲高かつたんだな……進学校  
つてやつなのか？

正直、見た瞬間サボりたくなつたが仕方がない。

（一時限目は受けるか……）

私は、自分の席についた……………その時

ガシャン！

「だあー！？」

そんな音と共に足に激痛が走つた……………

慌てて足元を見ると

「……………なんだよ、これ？」

私の左足にトラバサミが喰いついていた……………

トラバサミとは、主に狩猟で使われるトラップの事だ。中央の板に獲物の足が乗ると、ばね仕掛けが働いて脚を強く挟み込む。普通なら引っ掛けた時点で足を粉碎骨折するらしいのだが、このトラバサミは途中につつかえ棒が付いていて完全には閉じない様になつていた。……………骨折しないのはうれしいがそんな所に優しさを見せ  
るなら、そもそも仕掛けないという選択肢は無かつたのだろうか？

……つて

「解説してる場合じゃないだろ！…………おい、誰だよ、これ仕掛けたの。シャレにならないぞ！」

しかもこのトラバサミ、足が抜けない……  
つかえ棒が丁度抜く時、邪魔になるよう配置されてやがるー。

「動かさない方がいいですよ？」  
「はっ？ 何を言つて……」

突然の事で動搖する私に誰かが話しかけてきた。  
そこにいたのは…………さつきまでいなかつた音無初音。…………  
そういう事か。

「…………初音。あんたが…………トラバサミ仕掛けたの？」  
「はい。そうですよ」  
「一体何のつもり…………まさかプリンの恨みとか言つな  
よ？」  
「その通りです」  
「おいつ！」

…………一体、ゼニの世界にプリンの恨みでトラバサミ仕かける奴  
がいるんだよ！  
しかも…………初音は突然しゃがみ込むと、さらに何かをやり始めた…………  
「…………何するつもりだよ…………初音」  
「別に特には…………さらに拘束具合を強化しようとした……」  
「するなよ」  
「もう、遅いです…………さて、出来ました」

足元を見ると机と椅子が鎖で繋がっていた。

「これ立てないんですけど? しかも鍵付きつて……」

「いいですか、まさみちゃん……プリンの罰として、今日まさみちゃんには全教科しつかり授業を受けてもらいます」

「私を殺す気が!」

「…………何言つてるんですか? 授業全部受けるのは当たり前ですからね? そして今日まさみちゃんは机から動いてはいけません」

「…………????????????（理不尽だろ）」

「????????????（あなたにはいい薬です）」

「返された!?」

そして初音はさうに追いか打ちをかけるように、もう一本鎖を取り出した。

「…………! これ以上何をするつもりだよ」

「!」の最後の鎖はまさみちゃんのギターケースに繋いでおきます。

……まあ、故意に動いたり、寝てしまつて動いたりしたら……

……分かりますよね?」

ギターは人質かよ。

「…………本気か、おまえ」

「ええ、今回ばかりは初音は本氣で怒つてますから」

「…………勉強道具持つてきてないんだが?」

「初音が先生に言つて借りますから大丈夫です。それでは

そつ言つて、初音は自分の席に戻つて行つた…………プリンの罰が、とんでもないモノに化けやがった。

「……………マジかよ

私はこれから訪れるであろう絶望に早くも負けそうだった……以上、回想終わり。

そして場面は冒頭に戻る。

私は、天井を仰ぎつつ今口を振り返ってみた。

授業していく全ての教師に驚きと憐みの目を向けられながらの退屈極まりない60分をフセツト。その間一度も寝る事ができず、休憩中も立ち上がりがない…………まさに地獄だった。

「……………思い出すだけでも理不尽だ」「まさみちゃんこほいい薬です」

しかもそれがゆりっぺに『えられたとかではなく、初音にてえられた』というのが何とも納得いかない。

プリンの罰とはこんなにも恐ろしいものなのかな?

ついでに、初音の機嫌も結局直らないし……

「これ以上、私に何を償えと?」

そり、私は弱音を吐いた。

もう……許してくれませんかね?

「別にそりが苦しみでくれれば初音としてより満足なのですが……流石にもう飽きたので最後に一つだけまさみちゃんが初音のお願い聞いてくれれば許してもいいですよ

「…………なんだよ？」

何が望みだ。

死ねとか、金とか以外なら極力叶えてやる。

そして、初音はお願いを言つた。

それは……私の予想の遙か斜め上をいつたお願いだった……

「まさみちゃん……私とバトルランキンギングをやりましょう」「はい！？」

「マジですか？」

私と同じように黙った生徒たち……だがそれは一瞬でしかない。次の瞬間誰かがこう言つた。

『みんな集まれ、バトルランキンギングだあ！』

教室が震えた。

「…………何やつてんだろ、私  
「ござい、勝負です、まさみちゃん!」

初音から宣戦布告を受けた私は…………現在、生徒ホールにいる。周りを見渡せば、野次馬な生徒が四方八方を取り囲んでいた…………

(…………三年生、あんたらこんなもの見てる場合じやないだろ)

勉強しろよ勉強。就職氷河期だぞ、現代は…………

「わい、みんな集まつたな？ それじゃ、始めるぞー！」

「「「おおおおおおおおお……」」

「おい、ちゅうとまで…………何でお前がさも当たり前のようひ、場を仕切つてんだよ!」

「なんだ……どうした、沼沢？ それが先輩に対する態度かよ」

「それが、三年生のとる行動かよ…………」

そして、棗……お前はなぜ、当然のようひの場にいるんだ？ その手に持つてゐるマイクはなんだ……

「ふつ……お祭りに棗恭介有り…………俺は日本全国、祭りがあればどこにだって現れる!」

「いや、私の地の文に反応するのやめてくれない？ プライバシーだからこれ

「はは……今日の岩沢は少しおかしいな」

「…………おかしいのはあなたの頭だろ……」

そんな不毛な言い合いでを棗と続いている内に着々と場が整えられて  
いた……なんだ？　あの観客席は……

「なにを喋ってるんですか！　早く……早く始めましょー！　戦い  
を！」

「初音までおかしくなつてゐる…？」

「せつだな……じゃあ、始めるぞ！　お前らー！」

「　「　「おおおおおおおおー！ー！」」

「わっせから、回じセリフばつかだな……」

観客の皆さん、「ロペはダブーなんですよ？  
」って……私と初音の戦いは始まつた……

## バトルランクイング

『残虐非道な魔女』一世

岩沢まさみ

VS

『来ヶ谷唯湖の僧帽筋』

音無初音

「誰だ！　これ考えたの！？」

「何か変わつてる！　どこの筋肉ですか！？」

「あ、みんな武器を投げてくれ！」

「「ツツ」コミ未回収ー!?」」

棗の言葉を合図に観客から様々な武器が投げられた!

「これで……これで地獄をおおおー!」「やつ……やめろー。地  
球が!」

……相変わらずなんかおかしい人がいるよ!?

「これです!」

「しまった、ツツコミで遅れた……これだ!」

初音に遅れを取つた……私は慌てて武器を取る。

初音はマッスルエクササイザー??を手に取つた!

「禍々しいです!」

「おお……あれば、真人が創つたマッスルエクササイザ……その  
究極版だ!」

「なんだよ……それ

何か黒い液体が入つた?ペットボトルを初音は抱えていた……  
一体何が入つてるんだろう……つて

(じゃあ、私の武器は!?)

そう言えば見てなかつた……私は恐る恐る武器を見る。

沢はライター付きキンチョルを手に取つた!

「使えるかああああああーー！」

岩沢は思いつきりキンチョ  
ルを床に投げつけた！

「お二お二……お油瓶器も無つてどうやつて戻つんだ？」「アーデア……遠慮は無用だよ。」

初音……お前は丸焼きにされたいのか？  
私に……

「アレは使えねーだろ！」武器だけどさ

しかたないな……今回だけ特別だぞ！」

卷之三

まるで私が聞き分けのない子みたいだな？　おい。  
再び私に向かつて観客から武器が投げられる。

「次は……まとだよな？」

岩沢はMP3プレイヤー(60GB)を手に取った!

「どういえと？」

「そいつは踊つてゐる最中に攻撃が許可されるぜ?」

……なかなか私向きだな。

「よし……2人とも武器は取つたな？」

一  
ああ

「はいっ！ 初音……殺ります！」  
「じゃあ、始めよっか……バトルスタート！」

岩沢の攻撃！

「//ゴージックスター···」これは···King·Off·Po  
p-? 「

私が音楽をかけると···かの大スターの曲が流れだした···

「···感動だ」

私は、音楽に合わせて踊りだした！

岩沢の全てのステータスが10上がった！

「やりますね···まさみちゃん」

「ああ、すげーゼ···完璧なムーンウォ クだ···」

初音の攻撃！

「こきます···マッシュルエクササイザー？？（以下サイザー）···」

「！」

初音はサイザーのフタをあけた。

···ものすゞ臭気が漂つてくる。

「！」これ···中身をまさみちゃんにぶつけでいいんですね？」

「いや、ダメだな···本来の使用法で戦わなきゃな···音無妹、それは飲むんだ！」

「恭介···あんた鬼だね」

「仕方ないだろ···ほら飲むぞ彼女」

棗の言つとおり、初音は皿をつぶりながらサイザーを飲もつとしていた……

「やめろ初音！ そんなことしたらい……お前の命が……」「それでも……それでも勝たなきゃいけないんです！」

必死に止めたが初音はつにそのサイザーを口に含んでしまった……

「うう……うわあああああああああ……」

初音の全ステータスが100上がった！

「もはや、ドーピング！？」

「流石だぜ……真人」

だが……初音、お前顔が……

「初音……顔が赤紫になつたり黄緑黄土色になつてゐるぞ……」「どんな色ですか……それ……」

そういうながら、初音はパンチをくじだしてきた！

「甘いぜ……よつと」

私は難なくかわす……が

ドガーン！

壁に穴があいた。

「…………おい、いいのか棗？」

「ああ、一応負担は学校だ」

初音は毒を受けている！

初音は100ダメージを受けた！

「早く終わらすか……」

若沢の攻撃！

「………… Bad」

私は音楽に合わせて初音に攻撃した。

初音に50、60、70のダメージ！

「まざいです……」のままじゅ……

初音は慌てて攻撃してくるが……私には当たらない。

初音は100のダメージを受けている！

「これで……チェックメイトだ」

私の踊りながらの延髄切りが初音にきました。

初音は70のダメージを受けた！

「ううやああああ……」

初音は倒れた

勝負が終わった。

私は初音に駆け寄る。

「大丈夫か？」初音

「だ、大丈夫じゃないです……なんだかお腹……イタイ……」  
「は、初音？」はつねえええ……！」

それだけを言って……初音は意識を失った。

その後、観客も去り、私と初音と棗だけが残った。  
私は気を失った初音を支えつつ壁に座りこむ。

「マッスルエクササイズ…………どうやら諸刃の剣だったようだ  
な」

「そう……みたいだな」

棗が話しかけてくるが……なんだか答える氣にならない。

……今日はもう、疲れたな……

「しかし一体何があつたんだ？ バトルランキングするほどいの事、  
したのか？」

「…………プリン、盗み食いした  
「は？…………それが理由か？」

棗が畠然としたように聞いてくる……

まあ、そうだよな……ホント、なんでこんな事になつたんだか……

「もう……絶対、盗み食いなんかしない…………ぞ」

そう、心に私は誓つた……

覚えているのは…………ソシまでだ。

### 恭介

「もう……絶対、盗み食いなんかしない…………ぞ」

そう呟いて朝沢は目を閉じた……

数秒後、寝息が聞こえてくる。

(そんなに疲れたのか……)

プリンの盗み食いで喧嘩とは……随分、平和な奴らだ。

(…………ソの娘達はまだ気づいていないよつだな)

世界の秘密に……

ならば、まだ時間はある。  
ゆっくりと楽しんでいけばいい。

そして……

(こいつが、笑顔で旅立つんだ)

それを見送るのが俺の使命だ。  
だが……最近想う。

この時間が永遠に続けばいいのに……

そう想つのは、罪だらうか?

……まあ、今はいい。

まだ、結論を出すときじやないな……

さて

「……ひさしひって、家まで運ぶかな……」

とりあえず、音無を呼ぶ事にしてみた。  
俺は、携帯を開いた。

S i n g - e t h o u p o c t . . . E n d

…………ずっと、まつていて。

あの日、あの時、あの瞬間……笑って、そして虚空に消えた『彼女』を僕はずっと、まつていて。

天文学的だろうが絶望的だろうが、かまわない。

僕は『彼女』をまち続ける……

だけ……

この想いは危険だ。

かつて僕がそ娘娘たよつてこの世界で愛を覚えてはいけない。

ここは樂園になつてはいけない。

ここは巣立つ場所なのだ。

もつ……同じ過ちは繰り返させない。

そのために…………『私』は、この世界の支配者になる。

A  
w  
a  
k  
e  
n  
i  
n  
g  
.  
.

E  
n  
d

今日は書き方変えてみました  
どうでしょうか?  
感想お願いします

『モンスター・ストリーム』こと、川の主の口めがけて落ちてい馬鹿共……

普段の彼女なら……傍観していたはずだ。  
しかし……

「助けなきや……（ちよつとー？）」

彼女は動いた。

発動したのは  
- hands on it  
-

馬鹿共を助ける力！……彼方に重い力の力。  
そんな……なぜ？

私が茫然とする中、彼女は刃をかまえた。

その時

ガードスキル・harmonics

( ! ? )

彼女が、颯爽と主に挑んでいくのを私は見送っていた……

(どういう事…………誤作動か！)

「harmonics」が再び誤作動を起こしたようだった。  
とつあえず、近くの岩石に着地する。

下を見ると彼女は……主を切り刻んでいた。  
馬鹿共を助けるために……

それを見て、私は確信する。

(…………ダメだな、もつ)

この瞬間から彼女は天使ではなくなっていた……  
彼女は、再び笑顔を取り戻していた。

彼女は……立華奏に戻ったのだった。

数時間後。

私は、校舎を歩いていた。

グランドの方では今、奏と馬鹿共がNPCに慈善活動を行っている。

……なんだ？あの茶番は……

正直、見ているだけで腹が立つ。

今まで奏に貴様らは何をした？  
どれだけの痛みを彼女に与えたと思つてゐんだ！

ふと気付くと掴んでいた手摺が粉々になつていた。  
しまつた……これでは奏の評判が悪くなる……

良くも悪くも今の私は奏と瞳以外まったく同じだ。

私は慌てて周囲に視線を向ける。

「…………見た？」

NPCの一人に見られていた。

さいわい、このNPC以外に人影はない。  
私は「hands onnic」を展開した。

(「こつ一人なら…………）

「おやおや……あなたは『イレギュラー』ですね？」

NPCの喉元で来ていた「hands onnic」を止める。  
…………こつはただのNPCではないようだ…………

「…………どうしてわかつた？」

「貴女の体を構成している物質がNPCとほぼ同じ素材だったので、  
それが根拠ですね」

「あなたは何者？」

「『私』ですか？『私』は『私』自身の事については説明できま  
せん。いや……説明するすべを持ちません」

「…………『支配者』か」

「プログラム上の役割を言えばそういう事になりますね」

「名前は？」

「言つた所で無意味でしょう」

「はやく」

「あえて名乗るのなら

です。」

なるほど、やつらう事か。

「世界のコセツトを始めるつもつ?」

「ええ、この世界に『愛』が在つてはいけない。全てを『無』に返します」

せう断言した

このままでは……まずい

「『神の裁き』はひょっと待つてくれない?」

「なぜです?」

「それは……私が彼らを成仏させるから」

私は知らずの内にそう言つていた。

「理解できませんね。貴女より『私』の方がずっと効率的です」「でも……だつてできれば『人』の力でこの問題を解決したいわよね?」

「…………ええ、確かに。ここは巣立ちの場所ですか。できる事なら親鳥たる『私』はずつと傍観者のままでいたい」

「なら、『イレギュラー』の私に少し時間を与えてもいいと思わない?」

やつらうと、  
はじめらく沈黙した。

「…………いいでしょ。ならほやつてみてください」

「…………ありがと」

「しかし、貴女が『消えた』となれば直にでも……始めますから」

それだけ言つと、

は私に背を向けた。

「それでは」

そして…………そのまま夕焼けに溶けるように消えていった。

「…………まことにやったわね」

誰に聞かせるでもなく、私は呟いた。

「…………厄介事に自ら首を突っ込んでしまったよつだ。」

「…………天使！？」

傷だらけの仲村ゆりを抱えた音無結弦が驚いたよつて叫ぶ。

私は何も言わず、屋上から飛び降りた。

奏のスペックでは着地できず即死だらうが、私は違つ。

イレギュラーの力は伊達ではない。

アスファルトをぶち抜きつつ、私は着地する。

登場の仕方としては上出来だらう。

音無率いる馬鹿共は完全に押されていた。

「…………みんなで夜遊び？…………お仕置きね」

私はそう、告げると馬鹿共に斬りかかった。

「臨戦態勢！」

遅い……銃などが私に当たるとでも思つてゐるのか？私は全ての銃弾をかわしつつ、音無に狙いを定めた。

(一人目…)

そのまま心臓を一突きにしてやろうと駆ける。

まあ、そうすれば彼女が出てくる事はわかつてたから。

私は彼女と同士討ちになつた。

「…………プログラムの書き換えを行つたよつね」

「ああ、後十秒で全て終わる。お前たちは全て消える」

あさはかなり。

どうして、こんなにも浅知恵なのだろう」「……そんな都合よく、全てが終わると思つてゐるのか？

まあいい

「そうね、全て戻る。あなた達を襲つた凶暴な天使が、……一人残らずこの娘の中に」

「つー？」「……そんな

「時間ね……」

「時間ね……」

「待つてくれえ！」

もつ遅い……私達は戻り始めたこの娘の中に。

「うああああつああああああああああああああああ  
「かなでえーー！」

そこは一面暗闇の世界。

その中にポツンと浮かんでいる白く輝くイスとテーブル。

私と奏はテーブルごとに向かい合ってそのイス座っていた。

「…………ここまでが私の記憶」

「…………そう」

あれからどれ位の時間がたつたかは分からない。  
分かるのはここが奏の頭の中という事くらいだ。

「それで？……奏はどうする？　このまま主人格として存在し続  
けるの？」

「…………うん」

「なぜ？」

「みんなが待ってるから」

「…………そ、う、じゃあ仕方ないわね」

私は席を立ちあがつた。

「私達はもう逝くわ……じゃあね」

「うん…………いろいろ教えてくれてありがとう」

「ありがとう…………か。」

「そのセリフ…………ちやんと言ふるとこいね。」

私の記憶はここまでだ。

ここまでが黒天使たる私の役目。  
では…………さらば。」

私は『消滅』した。

立華

目が覚めると私は、保健室のベットにいた。

体はまだ所々痛いが傷自体はもうふさがつていいやつだ。

「…………んっ」

胸の辺りで何かがもぞもぞ動く。

目を向けると音無結弦が眠っていた。

ずっとそばにいてくれたのだろうか?  
……してくれたのだろうな。

そう思つとなんだか胸が温かい何かで満たされる。

(「の氣持ちは何だらう…）

結弦が田を覚ますまで私はそんな事を考えていた。

「記憶が戻ったんだ」

結弦は田を覚ますと私が目覚めた事を心から喜んでくれた。  
そして今のセリフを言つたのだ。

……結弦はまだ、気づいていないのだろう。

自分の心臓が私の中にある事を。  
自分には心臓がない事を。

自分の心臓の音を聞き続けたおかげで記憶が戻つたのだという事を  
私は伝えるかどうか迷つた。  
そして……

「やつ……よかつたわね」

まだ伝えない事にした。

これが我儘だという事は分かっている。  
でも……言つたら私と結弦はおそらく消えるだらう。

それは……まだ嫌だつた。

もう少し、結弦と一緒にいたいと私は願つてしまつたのだ。

「みんなを卒業せたいと思ひへ……」この世界から

「やるの?..」

「ああ……だから協力してくれないか?」

私の答えはもう、最初から決まっている。

これを願う事は……罪だらうか?

「いいわ。これからよろしくへへ..

「ああ、」  
「ああ、」

神様、私にもう少し……もう少しだけでいいんです。

時間をください。

彼と過ごす時間……それさえあれば……もう私は何もいりません。

「最初はだれにする?」  
「…………ゆう?」  
「いや……直球すぎ」

私は歩き始めた。

…………おやうやく、この先には涙と別れが待つてゐるのだなあ。

そして……彼も動き出す。

それでも……私は今、この瞬間を……結弦と歩くこの時間が何よりも……この世界よりも……

大切だと、思つてしまつたんだ。

O n e y o u . . . E n d

## Another episode Memories Angel Song

物語もやっと中盤です

次のAnother episodeではリクエスト、叶えたいと思ひます

それにしても……よく、キャラクター達が勝手に動きます  
そんなつもりないのにいつの間にか斜め上に行つてしまい、気がつけばこんなに話が長くなってしましました

まだ……この話は終わらせません

ただ、エンディングはもう決まっています

そろそろ飽きてきた人もいるかもしれませんがどうか……最後まで  
御付き合いください

それではまた……

The world for you

Frontline episode Hatsune Sudden

今回から始めました文字通り前置の話です

それは朝の食卓での事……

「遂に」の時が来たな……」

お茶碗を握りながら、まさみちゃんが低く呟いていた。

「どうかしたのか？」

「どうかしましたか？」

お兄ちゃんと私は訳が分からずまさみちゃんに聞き返す。

定期考査……は終わったし（なんとまさみちゃんは全教科本当に100点だった。でも内心点がほぼ0という状態で全教科80点台まで落ちたのだった……それでも評定5、羨まし過ぎる……）何か近い内に行事あつたかな？

「今日、ゲリラライブやる」

「いや……お前はよくそれを副会長の俺の前にしゃべれるね？」

「今日は……初音の『デビューライブ』だ」

「…………なに……」

私とお兄ちゃんの声が見事にシンクロした……

「いやいやいや……無理ですからまさみちゃん！ 私、まだ人前で歌えるとか演奏するとかそういうレベルじゃないですから！」

「いや……もう初音は大丈夫だこの2ヶ月でかなり上手くなつた……」

…もう大丈夫…」

「それで、どこでやるんだ…!?」

「いや、お兄ちゃん…!? 止めてくださいよ…」

何かお兄ちゃんまで乗り気になつてゐ…?

「悪いな……初音。今生まれて初めてお兄ちゃんはお前のお願いを  
却下する!」

「いや、このタイミング…?」

この後、散々否定したが結局、またみちやんとお兄ちゃんに押し切  
られてしまい…

生徒会公認（副会長の特権乱用）で私の初ライブは行われることが  
決定した

S u d d e n l y   D a y   . . . E n d

今日は特別な日になる。

私と出会って数ヶ月。

今日、初音は遂に自分の力を試すのだ。  
もう、やる気も溢れんばかりだ。

「はあー?」

……突如、初音は怒りマークを額に浮かべ、怒鳴ってきた。

「なに勝手なこと言つてるんですか! やる気<sup>やるじ</sup>ありますせ  
んよー!」

「どうした、そんなに興奮するなよ……初ライブでテンション上る  
のは分かるけど……」

地の文にキレ口調で突つかかってくる初音。

私がそう言つと……初音はもともと大きい眼をきらめくワツ! と  
開き……

「違・い・ま・す!」

私の胸倉を掴み上げてきた。

「お、おー……苦しいって……興奮すんな? 失敗した時、引籠つ  
ちまつぞ?」

「いの

音楽キチい!」

そう初音は叫ぶと何故か泣きながら、ギターをかき鳴らし始めた……

「…………一体どうしたんだ？」

「本気で言つてますか！？ それ！」

あまりのテンションの高さに私は付いていけない……

「ごめん、私たちと席外すから……」

私は、スタジオを出た。  
中では……

「こんな…………こんな世界…………大っキライだあああつああつああつ  
ああ…………」

初音はそう叫びながら、ギター狂ったようにかき鳴らしていく。

テンションがただ上がりした初音（岩沢視点）を一人残し、私はロ  
ビーへと戻つて来た。

今日は平日だが私は朝にライブの話をした後、学校には行かず、初  
音と一緒に音楽スタジオに来ていた。

理由は……初音の調整の為である。

まあ、いきなりやれと言われて路上ライブができる人ばかりだった

ら、この世界はもつと昼夜とわざ音楽に溢れてこむつて話になる。

何事も下準備は大事である。……と言つ事だ。

(…………それにしても)

第三者視点から見ても初音の仕上がりはほぼ完成に近い。  
これがまだ始めて2ヶ月なんて誰も思わないだろう。

初音の演奏技術はそれくらい高いのだ……正直、こんなに早く上達するとは思つてなかつた。

初音はもしかしたら…………

「私を……踏み台にしていくかもしねないな」

ふとそんな考えが頭を過つた。

勿論、過つただけで私は初音の踏み台になるつもりはこゝれつぽつちもないが。

(馬鹿なこと考えてないぞひつと戻るか)

自身の頭の中で密かに行われた自分発信の問答をばかばかしいと思いつつ、私は自販機でおいしい水を一本購入した。

さて……とつと戻るか。

私は初音のいるスタジオに引き返した。

胸の中に生まれた小さな不安は気づかないフリをした。

「おーい！…………初音？」

「グルグルグルグル…………」

「まさかのビーストモード！？」

…………だ、大丈夫か？

…………まあ、大丈夫だな。

さあ、がんばろう。

新生ガルデモの誕生は…………もう、すぐだ。

A  
n  
d  
l  
o  
v  
e  
a  
n  
d  
s  
a  
d  
n  
e  
s  
s  
……  
E  
n  
d

リクエストでもました

これからはアイディア頂く度に形にして投稿していきたいと思います

みなさん何かありましたらどうぞ、姫龍に知恵を授けてください

それでは、お楽しみください

目の前に広がるのは一面真白に染まつた野原。

私はどこかもわからないその場所を独り、歩いていた。

どの位の時間……歩いたろうつか?

目の前に小さな小屋があつた。

(あそこになら、誰かいるかもしれない……)

悴んで、もう殆ど痛覚を無くした『死にゆく』足を必死に動かす。膝は……まがらなかつた。

やつと……小屋の前に着いた。

戸を持てる力を全て使ってあける。

中は温かい……どうやら人がいるようだ。

(誰かいませんか？ 休ませてください)

そう言おうとしたが声が出なかつた。

クチをパクパクさせ、まるで丘にあがつた魚のよつになつてゐる私。

酷く惨めだが、まだ命があるだけいい。

私は這う様に床を進む。

挨拶は疎かにしてしまつたが……今はもう、それどころではなかつた。

温かい火の傍に行こうと必死で体を動かす。

「おやおや……また迷い人ですか」

ふと横からそんな声が聞こえた。

「かわいやうに……凍えてる」

『はやく……温めてあげないと』

聞こえた声は3つ

「何突つ立てるの? 早く毛布とお湯を持ってきて」

『まつたく……相変わらずお人好しじで……』

『…………薪、増やそづ』

(いえ……なんか…………悪…………い…………で)

私の記憶は……ここまでだ。

「…………嘘…………なんで?」

「おやおや…………これはまたとんでもない『イレギュラー』が

『…………?』

「…………お母さん」

今のは夢でしょうか? ?  
なんだかとってもリアルでした

ボンヤリと私は今見た夢について考えています。

「河」

誰かが私の名前を呼んでいます。

「古河」

「んぐ、体を軽くゆすられました。」

卷之三

「……………しかたねえな。……………ねえりあ！ 古河渚あ———

ガシガシと『波』の歯が動きます。

夢見ごごちだつた私は一気に現実世界に引つ張り戻されました。

「な、ななななああ・・あ・あ・あ！？？！？」

あまりに突然の出来事に口がうまく回らないです。

「おい、寝るな渚。一応、会議中だぞ?」

卷之三

『彼』  
岡崎朋也君が呆れたように私の顔を見ていました……

要約すると、私は生徒会の会議途中に居眠りをしてしまったようですが、

「まつたく……一瞬心配したんだぞ？　また、具合が悪くなつたのかと……」

「じめんなさいです…………朋也君」

朋也君は少し、怒っています。  
また……心配掛けてしましました。

「…………まあ、いいじゃないか？　大事があつた訳でもあるまい」

「…………来ヶ谷さん」

「私も…………安心したの」

「私もだな」

「右に同じです…………来ヶ谷×」とみ…………ありかもしません」

「たしかに…………次はこれかな？　お姉ちゃん」

「おいつ」

「なんですか？　念長さん…………嫉妬？」

「幼馴染だからって独占権はないよ？」

「違げえーよ、西園姉妹…………」

来ヶ谷さんによるとみちやんに智代さん。三人ともとてもお優しいです……西園美魚さんと美鳥さんも一応……心配してくれるみたいですね。

「まあ、なんにせよただ、寝てたつてなり別にいいだろ」

「だな」

「ああ」

「すいません……」

「…………いこつて事よ」「」

棗君に真人さんに健吾さんも快く私を許してくれました。

生徒会の皆さんは……今日もとってもお優しいです。

なんて、見当違いに感動している私を後日に音無さんが一つ咳払いをしました。

「あー……じゃあ、今日決まった事を確認するぞ?」

「わりいな。音無……頼む」

「すいません……」

朋也君と私の言葉を合図に音無君が私が寝ている間に決まった事を話してくれました……『めんなさい』。

「今日の議題は一年の岩沢まさみの事についてだな。……編入生でありながら僅か二ヶ月で授業ボイコット数全校一…………本人に反省する意思は全く無し。だが……内心はほぼ最低を記録しているにも関わらず先日の定期考査では全教科100点を記録し、一年生のトップに立っている。彼女の今後はわが校を左右する可能性大だそうだ」

「…………そいつ、人間か?」

「信じられる話だ……」

真人さんと健吾さんが驚いたように呴きました……つて

「知つてたんじゃないですか?」「

「いや……俺、筋トレしてたし」

「俺も真人と同じくだ……しかし本当にすごいな……その岩沢とや

ら

確かにす”いです。

全教科100点まるで」とみちやんです。

でも……

「その娘、なんで授業にでないんでしょうか? ……まさかイジメなどが?」

「いや……それはないぜ?」

「…………棗君? どういう事ですか?」

「あいつは……岩沢はそんなガラスみたいな心じゃなって」とも、「そうですか……」

「今、古河が言つた疑問だが……そういう事態は存在していないようだ……まあ、過去一度それらしい事はあつたらしいがすでに解決されている。本人いわく授業は「やるだけ無駄だ」との事らしい」

「やるだけ無駄って……それはさすがに我がままではないでしょうか?」

今のセリフは敵を作つてしましますよ……

「それでなんだが……」

私や役員さんの困惑を感じ取つたのだろう。眞無さんは少しばつつの悪そうな顔をした

「…………まあ、彼女を説得できなかつたのは俺にも責任があるからな。それに関しては反省してる」

「そりいえば……君は岩沢と同棲しているのだつたな……」「えつ?」

ど、同棲！？

なぜか私は朋也君の方を向いて……つて……と、朋也君も私を見てるんですか！？

私は慌てて、顔をそらした後、辺りをそっと窺います……  
幸いな事に今の光景はみなさんには見られなかつたようですが……よ  
かつた。

「…………同棲じゃなくして、下宿だ来ヶ谷。それに関しては問題は

ない」

「ならばよかうひ

音無君もなんとか来ヶ谷さんの誤解を解いたようです。

「で、どうするんです？」

「せうだねー……彼女、このままじゃ困るんじゃない？」

今までの事を記録していた美魚さん、美鳥さんがそう言いました。

すると……音無君が表情を改めました……何か考えがあるよう  
です。

「ああ、その事についてだが……彼女は今日の放課後、何かするう  
しい」

「何かとは？」

「おやうへ……ライブだろひ」

「…………無許可でか？ また捕まるだれ？」

来ヶ谷さんがせうだねましたが……音無君、なんだかぱつの悪い顔  
をしています……

その顔を見て、何かを察したらしい朋也君が音無君に尋ねました。

「おれか……許可出したのか？」音無

「ピクッ！」

音無君の肩が凄い跳ね上がりました……どひゅら図星だつたよつです。

「何を考えているんだ！」

智代さんが音無さんを叱責します。音無君……なんでこんな事を？

「すまん……智代。たしかに悪いと思ってる……だが、まさみが約束したんだ！ 今日のライブが終わったら今までの事を反省してこれからは授業をちゃんと受けろって……だから……」

「…………許可しちゃったんですか？」

「ああ」

……なんとこいつが、音無君らしさです。相変わらず、知人に甘すぎます。

「…………まあ、約束しちまつたもんは仕方ねえだろ。……」

「だな。……」

「ああ。……」

なんとなく音無君を責める空氣が部屋に広がる中、棟君が実にありますと音無君を許しました。

真人さんと健吾さんもそれに続きます。

「しかし……棗」

「しかたねえだろ。約束なんだ……もしもの時は、音無……いいか？」

「ああ」

「だが……」

「今日は許してやつてくれ。智代」

「…………今回だけだ」

「すまん」

〔反論する智代さんを諫めた棗君が朋也君に向き直りました。

「今日は大田に見て……見に行つてみないか？ もの岩沢とやらのライブ……どうだ岡崎？」

「…………しかたないな。今は反応を見るしかないか」

棗君の提案に朋也君がため息をつきながらも同意しました……

「じゃあ、おまえら……見に行つてみよっぜ～。その岩沢のライブとやら」

棗君はそういうことと真人さんと健吾さんを連れて、部屋を出て行つてしまひました……

遅れて他の人達もそれに続いて、部屋を出ていきました。

「…………見に行きましょっひ～。ライブ」

私は、一人じつとしていた音無君に声をかけました。

「…………ゆるして、くれるのか？」

「ええ、私はゆるしますよ？」

「俺も許してやる……」

「…………」

「崎

「だが、今回だけだぞ……いぐど渚」

「はい」

「

後はもう振り返らず、私は朋也君と部屋を後にしました。

さて……吉沢さんのライブ……一体どんなモノなんでしょうか?

I s t h i s d r e a m a d r e a m? . . . E n d

## episode zwei | Attack of the Goddess

タイトルが示すように今回の話は、女神様（？）の来襲です  
どうぞ感想ください

「楽しみだな～」

「…………まさみちゃんだけです」

スタジオでの練習も終わり、私と初音は学校を目指して歩いていた。初音は、まだ少し自信が持てないようだが……大丈夫だ。  
初音はそこいら辺の奴よりは格段に上手いからな。

「緊張するなって……すぐに、楽しくてしかたなくなるからね」

「…………それは、音楽キチなまさみちゃんだけですよ」

「なんだよ、音楽キチって？」

「音楽の事しか頭になくて、いつも狂つちやつてる人のことだよ」

「…………」

「なんだよ、それ。

「最高の讃め言葉じゃん！」

「いやつー？…………えつ？」

音楽しかない？…………最高じゃないか。ほかに何かいいるのか?  
あっちの世界でもよくひさしに言われていたがまさかそんなに私の  
事をてい讃めてくれたなんて……

「やつぱーい奴だよ、あなたは……」

ありがとう、ひさし。いつか会つたらたっぷりお礼しなきや……  
(この時、ひさしは音無に別れを告げていた。突然襲ってきたなん

とも言えない恐怖。ひなには何か嫌な予感がしたがそれを知るのは  
また後の事だつた（私がいい表情をして）<sup>かお</sup>さう言つと初音は呆れた様に呟いた。

「誰に感謝しているのか分からぬですけど……わざと讃めてなか  
つたと思いますよ。その人」

「そんな訳ないだろ……わざとあれば讃めてたのや」

「…………はあ」

なんだよ、そのため息は……

まあ、いこや。ひなこの素晴らしさは後でたっぷり4時間くらい語  
つてやね。ひ。

それにも……

「…………ちよつとは緊張薄れたか？」

「…………はい。たしかに……もつ緊張はなくなりました」

「なら、よかつただろ？」

「…………するいです」

「ははは……」

そんな馬鹿話をしながら、私と初音は学校に歩いていく。

「といひで……」

それは、学校の坂の下まで歩いてきた時だ。  
すでに緊張状態から一転、やる気全開になつている初音が訪ねてき  
た。

「どうした？」

「今日は一人だけなんですか？」

「ん……具体的に話してよ？」

「いや……いくらなんでもギター一人だけじゃ、サウンド足りないと思つたんですよ？　せつかく私の初ライブなんですから……やるなら、今できる最高を披露したいなと」

いや、初音……お前、やる気出ると言つ事が違うな？

そして鋭い……後でサプライズにしようと思つてとつて置いたのにな。

まあ、気がついたならいいか……

「その事なんだが……今回、助つ人を一人頼んである」「二人もですか？……まさみちゃん、そんなに友達いたんですねか？」

「…………その反応は軽く私を馬鹿にしてるだろ？」

「いえ……純粹な驚きです」

……どついたろか？

「…………今の発言は聞かなかつた事にするよ。……助つ人の一人は一之瀬だ」

私は、怒りは後でぶつけてやろうと心に誓つた。

今は初音のモチベーション維持が大事だ……大人になつたな、私。

当の初音は何にも気付いてない様に私に疑問をぶつけてきた。

「一之瀬？…………一年生にそんな娘いましたっけ？」

……やっぱり、私と彼女は完全に別物と考えてるな。

「これは……サプライズ成功の予感がするな。

「一年じゃないよ」

「一年生じゃない？　じゃあ誰が……」

「今回の助つ人一人目は……三年の一丸瀬」とみだ

「…………はー、三年の…………て、え？」

おっ？　意外とリアクションが薄い……

最近の初音なら「うええつええつええ！？」とか最高、面白い反応するはずなんだが……

「なんだ、リアクション薄いな。もつと喜べよ？　学校どころか、日本トップレベルの天才とユニット組めるんだぜ？　こんなの後の人生であるかどつか……」

ガシツ！

急に初音が私の肩を掴んできた……それはもつ、恐ろしい握力で。

「…………なんだよ、痛いんだけど？」

「…………」

「ど、どづいた？」

何か、無言で初音がフルプルしてゐる……

「…………脅した訳じゃないんですね？」

「当たり前だろ…………」

「なら……いいんです。注目集めの為に学校……いや、日本一の天才さんを使ったなんてなつたら流石に高校生活終わると思いましたから……そうですか、大丈夫ですか」

「…………」

ゴン！

「いたあ！？」

流石に一発、おみまいした。

「馬鹿な事いうもんじゃないよ」

「……だつて、まさみちゃんつて基本、『奇襲』『勧誘』『自己満足＆完結（他者の意志問わず）』で、物事進める所ありますからね…………」

「殴つてごめん、初音。否定できない。

言葉には出さなかつたが、遠い眼をする初音に私は心の中であやまつた。

「それで……助つ人の二人目つて誰ですか？」

初音はもうこの話は一応終わりと、まだ聞いてない二人目の助つ人に話を移す。

「一人目か……何で言えばいいんだろうな」

「えつと……知り合いですよね？」

私の微妙な反応に初音がいぶかしがつた。

正直などこのを言つと私は助つ人一人目とはあまり面識がない。

ただ……『彼女』は私の後釜だったらしい。

実力はあるのだろうが……

「知りあいなんだけどな……正直できれば他人でいたい」

「そ、そんな見た目アレな人なんですか？」

初音がなんか怯えている。

「大丈夫だよ……一応、女…………女の子だから」

「何か今、躊躇しましたよね！？」

「いや……大丈夫だつて……見てくれば美少女」

ただ……ちょっととな。

「私とは正反対って感じだよ」

アレは私にはマネできない。

だつて……

あーーーー！ 見つけたあ！ いわさわさーーん！ーーー！

私が『彼女』の名前を言おうとした時、校門から声がした。  
そして、凄い速度でこちらに走り寄ってくる……

「ほら……来たよ助つ人一人目」

「あ、あの娘ですか？」

初音も戸惑いを隠せない。

「その娘は……その可愛らしい見た目とは裏腹に、手錠や悪魔の尻尾みたいな、パンク風なアクセサリーを身に着けて、性格も外見に似合わず意外に短気かつ毒舌といつ……

「いわさわさん遅いですよ？ 待ちくたびれちゃいましたよー。」

「ああ、わりいな……待たせたよユイ」

「いえ、全然そんな事ないです！ だって……いわさわさんとの初ライブですかーーーー！」

新生ガルデモ最大の問題児（と、ひさ）がぼやいていた）とゆりの手紙に書かれていた。

ユイ、その人だつたからだ……

Attack of the Goddess … End

## Another episode Yui -The biggest-

Yui

-The biggest-

今回は特に本編とは関係ありません

ただ、ユイが登場したこともあるし、姫龍が個人的に好きな話なので載せておきます

感想どうぞ

「先輩は私と結婚してくれますか？」

そう私が言った時、先輩は困ったような顔をした。  
まあ……わかつてたけどね？

自分でも何言つてんのかなって思った。

誰ももらつてくれるわけないよね……」

こんなお荷物。

わかつてた。

どこにいても、何をしてても私はみんなの足を引っ張るばかりだ。  
生きてる時はおかあさんの人生、棒に振らたあげく、一人先に死んで……

死んだ後はこうやつて、ガルデモのみんなに迷惑掛けて、相談に乗つてくれた先輩まで困らせてる。

ほんとうにダメなやつだよ、私。

本当はね？ こんな事言つつもりじゃなかつたんだよ？

たださ……先輩が、あんまりやさしいから……もしかしたら、  
私の……たつた一つの願い、叶えてくれるかも……て、想つた。  
きつとこの願いが叶えば、私は『成仏』する。  
それくらい強く想う私の『願い』。

プロレスとかサッカーとか野球とか……バンドなんかよりもずっと大切なこの『願い』。

先輩なら、叶えてくれるかな？ ……て、思つちゃつたんだ。

「そんなこと…………ない…………」

「じゃあ、先輩……私と結婚してくれますか？」

先輩が何か言つのを私は止めた…………同情からきた「結婚してやる」なんて聞きたくない。

そんなかたちだけの言葉を聞いても、私は『満足』なんかできない。もつ、何も言えなくなつた先輩は俯いた。

「ごめんね……我まま言つてや。

でもさ…………先輩が嘘でも他の娘にそんな事言つたら……泣くでしょ？ 天使さん。

先輩は気づいてないけど、フヨンス近くで天使さんがせつせからこつち見てるし。

結局、私の運命の人は先輩じゃなかつたつて事なんですよ。  
さて……もう、帰るかな。

私は先輩に背を向けて歩き出す。

先輩はさ、天使さん幸せにしないとね？

夕田を見ながら想つた。

もつ、叶う事がないのならそれでもいいや……ヒ。

（今日は楽しかつたな……『遊び』としては……）

こうしておけば、もう大丈夫だ。

今日はあくまで遊んだだけ、今のはちょっとした悪ふざけだった……ひへ、思えばいいんだ……

そう考える事にした私は歩き出す。

さて、また明日から練習がんば

『俺がしてやんよー』

……えつ？

……誰だ？ いま……なんて……

私は振り返る。

そこへいたのは……

「…………田向?」

ひなっち先輩だった。

『俺が結婚してやんよ』

……なんで?

言葉が出ない 「冗談……だよね?

信じられない……なんでひなっち先輩が……

『これが……俺の本気だ』

「そんな……先輩は……」

ひなっち先輩は本当のあたしを……知らないのに?

それでも……結婚してくれると?

『現実が……生きてた時のお前がどんなでも一 僕が結婚してやんよ……もし、お前が……どんなハンデを抱えてても……歩けなくても、子供が産めなくともそれでも……俺はお前と

結婚してやんよー。』

ひなっち先輩の声が……私の心に……染み込んでくる。

ひなっち先輩は私の足が動かなくても、私が子どもが産めなくとも……私が料理も洗濯もできなくとも……私と結婚してくれるの？ 認めてくれるの？ こんな……こんなお荷物な私を？

「…………いいんですか？ 私のせいで……先輩、人生……棒にふりますよ？」

『いいよ。お前が一緒なら』

…………ありがとう。

ひなっち先輩ありがとう、私に……希望をくれるんだね？。

でも……それでも……

「…………出会えないよ…………コイ……家で寝たつきりだもん…………」

ごめんね……信じられない。

だってさ……どんなに言つても、どんなに約束しても私は、家からでれない……

また次の人生でもきっと出会えないよ…………

『…………俺さ、野球やつてたんだよ』

突然、ひなっち先輩がそんな事を言った。

なにを言つてるのだ？

……私はそんな事は知つてない。ひなっち先輩、球技大会の時、凄い輝いてた。

私の事……バカにしたけど、結局、チームに混ぜてくれて、いろいろ話しかけて気にかけてくれたす』ぐ、やさしい人なんだなって思った。

あの最終回のセカンドフライ……仕返しを理由にひなっち先輩が消えるのを邪魔しちゃうくらい先輩といて楽しかった……

「…………知つてましたよ、先輩、野球得意ですもんね……」

でも……それがいま何の関係があるのでどう?

『…………ある日、俺はお前の家の窓、打った球でパリーンって割つちまうんだ……それでさ、球を取りに行くと、お前がいるんだ……それが出会い』

……それは、ひなっち先輩が語ってくれる私の…………『私達』の物語。

いつものようにテレビを見てたら、いきなり窓ガラスが割れて……その後、『彼』が謝りにくる……

話すと……不思議と気が合つて……いつしか、毎日『彼』は家に来るようになる……

それは……とても、幸せな…………『夢物語』。

私とおかあさんとひなっち先輩がいて……毎日一緒に、時には喧嘩もしたりするけど……毎日が楽しくておもしろくて……喜びに満ちている。

そんな……世界の話。

もし、そんな世界があるのなら……私はきっと『満足』するだろう。

だつて……それが私の望みなんだから……

なんだか、急に体が軽くなつた気がした。

後悔が無くなつていくよつな……さわやかな気持ち。

おそらく、あと少しで私は消える……

なら、最後に確かめなきや……

「…………もし、そんな世界があつたらわ……私のおかあさん、樂にしてくれる?」

『ああ、お前の母さんもお前も、俺が幸せにしてやるから……

……じゃあな、コイ』

うん……じやあね、先輩。

ううか…………よかつた。

そして私は『消滅』した。

ありがとう……先輩。

絶対、会えるよね?

# Another episode Yui -The biggest-

ついでユイも参戦です

次回はユイが消えてからいつまで辻沢に余つまでの話になります

幻想世界再び！

ではまた

ドンー

「ロロロロ……ビタン！」

「……………痛い」

鼻をぶつけた。

私は眼を開ける。

辺りは漆黒の闇につつまれて、

「せりや、地面むいてりや暗くなるよ……視界は」

どりやりりり伏せになっていただけの様だ。

こんな地面によくある黄色いブロックが存在する暗闇なんかないよ。

私は顔を上げた。

「こ、どうだろ……？」

「……………へ？」

意味が分からぬ、が場所は分かつた。

「こ、は……」

「うそ……電車？」

電車の中だった。

「なんで……？」

なぜ、私は電車の中にいるのだ？…………しかし、生まれて初めて（死後）乗つたけど、電車って結構揺れるな……  
私はとりあえず、転ばない様に立ち上がった。

「立てるつて事は……まだ元の世界じゃないんだ」

立ち上がるといつ事実から、私の体はあっちの世界と同様、五体満足で動くというのが分かる  
服装は……なぜか消えた時の体育着ではなく制服だ（アクセサリーも顯在……よっしゃー！）  
さらりに辺りを見回すと……

「マジで！？ やつたー！」

どんな理由かは知らないが、私愛用のギターが壁に立てかけてあった。

倒れると困るので素早く確保する。

「なんかよくわかんないけど…………」これって、神様からコイへのサービスってやつですか！？

もしやうだつたら……

「なにイキなまねしてくれてるんじゃ！」——（笑）

私、神様許すよ？ うん！

さて……あの世界に残していくには心残りだったものは全部手に入  
つた……

これからどうしようかな？

私はギターを抱きながら考えていた。  
それにしても……

「不思議な景色ですねー」

窓から映る景色は実におかしい。

吹雪の中に桜が咲いていると思えば、夏の砂浜に雪だるまが溶けず  
に鎮座してたりする。

一体これはなぜビックなんだろ？

「ルリは『幻想世界』ですよ」

……後ろからいきなり声がした。  
しかも心を読まれてる……誰だ？

「そう、あやしげることはありません」  
「いや……すげー信用できないんですけど?」

私はそう言しながら後ろを向いた。

「大丈夫です『私』は危害は加えません

「あんた……誰？」

NPCがそこにいた。

その『汝』は　　といつらじい。

なんでも私を見送りに来たそうだ。

「すみませんね」

そう、　　は言った。

「本当なら立華奏の仕事なんですが、現在の彼女は『天使』の役割を放棄してまして……代わりに『私』が来たという訳です」

「へー、　　さんは何か他の『汝』と違いますね？」

「ええ、まあ。『私』は他の『汝』とは違う目的で動いているので」

つまり、『J』の『汝』には上位機種という訳なのだらうか？

「その目的ってなんですか？」

純粹な好奇心から私は　　にそう聞いた。

は少し悩んだ素振りを見せた後、こう答えた。

「『私』の目的ですか……普段なら答えられないという所ですが、この世界を巣立つあなたには……教えてもいいかもしませんね。『私』の目的は『世界のリセット』なんです」

「この人、もしかしてゆりつペさんの探してた『神』つてやつなんじやないか？」

「…………もしかしてあなたが神様なんですか？」

「『神』…………いるかどうか実際に深遠なテーマです。しかし『私は神ではありません……あの世界での『私』の位置はあくまで『支

記者『ですか』

「ふーん……」

それって、神と変わりなくない？ やつてる事。  
どうやら ほこの世界の事は分かっても自分の事は分からな  
らしい。

「あのー、『世界のリセット』ってなんですか？」

「文字通りのリセットです。あの世界にいる『人間』をみな『NPC  
化します』

「…………ふーん、何か大変そうですね」

「…………予想外の反応ですね。驚かれないんですか？」

は少し驚いた顔をした。

はは、結構面白いなこの人。

「驚きませんよ、別に」

私は自信をもつて答える。  
だつてや……

「『NPC』化か何か知らないけど、私には関係ないし大体、戦線  
のみなさんがその程度の事でやられるとは思いませんから」

そりでしょ？ 先輩たち？

「すばらしい、信頼ですね。称賛に値します」

「いえ、誉めてもらわなくても結構ですから……それより  
「ん？ なんでしょう？」

「あなたは本当に『ＺＹ』なんですか？」

「…………」

は黙つた。

私は質問を続ける。

「さつきから見てたんですが、あなたＺＹっていつにか凄い不自然なんですね」

「…………どういう事ですか？」

「だってあなた…………自分の名前が言えるじゃないですか」

そう、私は自分を『だ』と名乗つた。

ＺＹは……私のファンでいてくれた娘たちさえ、自分の名前を言えなかつた。

ＺＹは自分の名前を言へないのだ。

「…………そんな理由で『私』がＺＹではないと？」  
「まだありますよ」

私はさらに迫り打ちをかける。

「何でしょ？」「？」

「あなたの名前と顔、私一回見た」とあるんですね  
「…………え？」

今度こそ、私は凍りついた。

その可能性までは考慮できなかつたんだわ。  
なんせ……

「テレビに出てましたもん、あなた」

死ぬ前の話だから。

「わ、『私』がテレビに……？」冗談でしょう

は苦笑いを浮かべる。

まあ、信じられないよね、自分がテレビに出てたとか。

「信じるか信じないかはあなたの勝手だよ？でもね、もし私の記憶が正しくてあなたがNPCじゃないなら、いつまでもこんな世界にいちゃダメだよ？」

「…………忠告は感謝します。しかし少なくとも『私』は『人間』ではありません」

「すくなくとも…………て事は人間もいるって事？ NPCに？」

「はい」

…………可哀そつい。この人が言つ『世界のリセッタ』に巻き込まれたのだろうか？

「誰なの？」

「あなたは『Angel Player』といつのを」存知ですか？」

知っている。確か天使さんが使つてたソフトの名前だ。

「知つてますけど？」

「では、それが命以外なら何でも作りだせるという事は？」

「…………知りませんでした」

そんなすゞいモノだつたのか？

は話し続ける。

「それの製作者は現在NPCになつてゐるといつ事は？」

「えつ？」

「もともと『Angel Player』はその製作者が自信を『NPC』化する為に作りだしたモノです」

が教えてくれた。

『Angel Player』…………その製作者には恋人がいた。しかし彼女は製作者を残して先にこの世界から去ってしまった。

「『彼』は待ち続けました……彼女が再び来る事を……しかし、その時間はあまりに長すぎて……『彼』はもう、正氣ではいられなかつた……」

だから製作者は自信を『NPC』化した。そうすれば、いつか永遠とも思える時の中で再び彼女に出会えるかもしれない…………そして

「対応させたんですか？」

「…………はい。もう一度と同じ悲劇は繰り返してはいけない。この世界で愛を覚えてはいけない……こゝは心の整理をつけて、再び人生を歩みだす為の一時休憩地点なのですから」

「そりなんですね…………じゃあ、私はいい終わり方だつたんですかね？」

「ええ、確かに。普通なら真っ先にあなたと日向秀樹は消されるハズだつた。しかしあなたは彼と想いを通わせながらも次で会おうと『消滅』選んだ。日向秀樹もそこに後悔はない。実に理想的で美しい去り方でした」

「…………その製作者さんは違つたんですか？」

「…………ええ、彼女は何も言わず『彼』の前から姿を消しました。本当に突然です、「また明日」それが彼女の最後の言葉でした」

「…………ですか」

今を聞いて私は確信した。

やつぱりこの人は……NPCじゃない。いや……正確に言つならこの人は『人間』だったNPCなのだ。

だって、この人がもし純粹なプログラムで動くNPCなら『Angelp1ayer』が完成する前に消えた彼女さんを覚えている訳がない。

「最後に一つ、質問なんんですけど」

「はい。なんでしょう?」

「『NPC』化された人は元に戻れるんですか?」

「…………」

またも無言。だけど……私の予想が正しければ……

「…………はい。戻れます」

やつぱり……

「人によって大小さまざまですが『想いの強さ』で正気に戻る場合もあります。しかしそんな簡単にはもどれませんよ?」

「いいです、戻れるってことが分かれば」

「そうですか?」

は今の質問の意味が分からないらしい。  
まあ、分からなくてもいいのだ。

つまり……『彼』は彼女に再開した時、『NPC』化が解けるよつにプログラミングした……それだけなのだから。

「うん、納得納得」

「そうですか。それは良い事です」

『彼』は彼女を待ち続ける。

これも一つの愛なのだろう。

(ああ、だからNPCかしてゐる訳か……一重の意味で)

そつ考えると少しおかしいと思つた。

「何を笑つてゐるんですか？　どうしました？」

「いや…………別に」

あなたの不器用さが可愛いなと思つただけです。

「しかし…………随分今日は喋つてしましました。あなたにはどうやらNPCじと心を通わせる能力があるみりですね」

「そうですか？」

「いや…………笑つのやめてくれませんか？」

「『めんなせ』…………」

しばらく私は笑つていた。

「さて…………あと少しでこの時間も終わりです」

それから数時間後、  
はそんな事をいつた。

そうか……終りが近づいてるのか。

「本当に終わりか……」

私は呟いた。

未練はないけど……やっぱり終わるのはさびしいんだよね……

そんな私を見て　　は言った。

「…………一つ、あなたには選ぶ権利がある」

「…………なんですか、その権利って」

それは……

「それは、人生を選ぶ権利です。現在あなたには三つの選択肢がある。一つ、全てを忘れ、五体満足で新たな人生を歩む道。二つ、以前と変わらない動かない体で母と再び生きる道。そして…………今 の記憶を引き継いでまったく関係ない場所で人生を始める道です」

…………究極の選択だった。

「そんな…………選択肢があるんですか？」

「ええ、中には今まで通りの人生をもう一度歩みたいという人もいますから……それで、どうしますか？」

私はどうするべきなんだろう?

?新たに人生を始める

?これまで通り生きる

? 一人で生きていく

まず、真ん中の選択肢はない。おかあさんにこれ以上迷惑掛けられるか！

「二つ目はないね」

「じゃああと二つ、最初から始めるか、一人で生きるか……どちらにします？」

? 新たに人生を始める

? 一人で生きていく

……どちらがいい？

「生まれ変わつたら、全部最初からですか？」

「ええ、そうです。全てを忘れやり直す。ZEROからのスタートです」

「じゃあ、一人で生きていくは？」

「記憶を引き継いでの転生です。そのかわり一人で生きていく……まあ、人間関係がZEROになります」

「じゃあ、体は？」

「あなたの場合は、体に障害があるようですが、その障害事態はたぶんなくなるでしょう」

……それなら。

「決めた……私、一人で生きるよ」

それが一番いい。

もう、誰にも迷惑はかけない。

「やつですか……ちやんと考えましたか？」

の言葉にしつかりうなづく。

これは……私の選択だ。

迷つたりしない。

「やうですか……」

ガタン！

電車が止まった。

「着いたようですね」

電子音と共に私の背後で扉が開く音がする。

「じゃあ、私いくね？」

「ええ、では……あなたの来世が幸せな事を願っています」

そう言って　　は夕焼けの中に消えた。  
じゃあ、私も降りるか……

ギターをしつかり肩にかけて私は電車を降りる。

ああ、そうだ  
……

(ギターありがとう)

あなたがサービスしてくれたんだよね？

どこからかいえいえ、と控えめなあいつの声が聞こえた気がした。

私を光が包んでいく……

新たな人生、そこには何が待っているのだろう……

あ、ヒルダ……

(新しい世界で金つてどうするんだらう?)

「それは、御自分で何とかしてください」

ちよつとー?~

Departure ..... End

どうだったでしょうか今回の話は?

私はアニメで出てきたあのNICOはやっぱり制作者だと思います

みなさんはどう思いますか?

ついでに…… わすがに で続けていくのは厳しいです

なんだか放送禁止用語みたいだし……

そこで!

あのNICOの名前募集します!

オリジナルでいいので誰か考えてください!

名字はもう決めています

いい名前がある人はどうかお願いします

それではまた

次回は若沢とユイの再開の話です

すこません

執筆がはからないので少し設定を変えさせてもらいました

「あなたが岩沢さんのお仲間ですか？ 私、ユイっていいます！ 今日はよろしくお願ひします！」

「えつと……音無初音です。よ、よろしくおねがいしますー。」

出会つてから数分で初音とユイは仲良くなつた。  
もともとトゲのない性格をしている一人だ。

相性はやつぱり良かつたらしい。

自己紹介をしながら今日のライブの抱負を語り合つ一人は何だか見ていて微笑ましい。  
これなら今日のライブは問題ないだろう。

(しかし、ユイが戦力になつてくれるとは……意外だつた)

私はユイと再会した時の事を思い出していた。

本当に彼女を見つけたのは偶然で……奇跡だったのだ。

The value of miracle …… End

Frontline episode Iwasa

The value

の名前募集しています

episode zweisuccesstor (前書き)

しつれいですが  
の名前、募集中！

一週間前 岩沢

その日私は路上ライブをしようと一人、町を歩いていた。

時刻は既に夜中の1時。

初音と音無には内緒だ。

二人が寝たのを確認してから家を出たので気づかれる事はない……  
といふか気づかれたら困る。

さて……今日の目的だが、今日は新曲を披露したいと考えていた。

曲名は『Thousand Enemies』。

死後の世界にいた時、作詞中だった曲である。

『消えた』ライブの時、この曲はまだ歌詞が完成していなかつたため、披露できなかつた。

あのライブ 자체に不満はないが、まさか、消えるとは思つていなかつたので、油断していた。この曲を披露できなかつたのは結構心残りだつたのだ。

こっちに来てからもなかなか、歌詞が思いつかなかつた為、完成に時間がかかった。

これはそんな秘蔵っ子である。

どんな反応が返つてくるか…………今から楽しみだ。

公園まで来た私はさつそく歌うための準備をはじめた。  
ちなみに私はライブをやる時はいつもここでやっている。

そして、準備が整った。

(じゃあ……始めるか)

ギターを鳴らす。

歩いていた人々がこっちを見た。

さあ、聞いてもらおう……私のThousand Enemies!

\*

「なんでかな……」

結果から言つとThree and Enemiesは……不評

だった。

どうやら歌詞が悪かつたらしい。

現在私はネットで叩かれまくつた人の如く落ち込んでいた。  
結構……自身あつたんだけどな。

まだまだ修行が足りないという事なのだから。  
もつと……頑張らねば……そう思った。

その後、なんだかやる気も無くなってしまった私はふりふりと町をうろついていた。

家に帰るつか……とも思ったが、なんだかそれだと負けた気がするので嫌だ。

朝方までうろついてから散歩してきたとでも言つて家に帰ろう。

(ギターは…………まあ、いいか。誤魔化せるだろ)

さて……それじゃあ、朝までどうしようか?

そんな事を考えながら、私は歩いていた。

それが聴こえたのは路上ライブを何本か梯子していた時だ。次はどこの中を聴こつか……そんな事を考えながら歩いていると

.....

「ひるねそこ事だけ言つのなら漆黒の羽にそらわれて消えてくれ!

れ!

(…………これは、Crow Song?)

最初は聞き間違いかと思ったが黙つて聴いてみるとそれはやはり私の作曲した Crow Song だった。

..... 一体誰が? まさか初音??

そんな訳がない……初音は家で寝ているはずだ。(わざわざ確認した)

では……誰が? しかも結構上手い。

私はその声のする方へ走った。

今は曲をパクられた事より、その歌っている人の方が気になつた。

そして私は出会つた。

一週間前 ユイ

この世界に落とされてから数日。

私は日々の生活を路上ライブで賄つていた。

あのくそN<sub>AM</sub>P<sub>C</sub>には言いたい事が山ほどあるが、とりあえず……

「可愛い少女である私を無一文で路上放置とは一体何のつもりだ、

『リーラー！！！』

「私に死ねと？ 上等だ、絶対生き残つてやるわ！」

そんな思いを胸に今日も路上ライブをしていた。

この路上ライブだが、結構儲かる。

私は夜中にライブをやるのだが、結構、人は聴いていってくれるし、多い時にはその日の収入1万円なんて日もある。

まあ、いつまでも続けられる訳じやないからその内どうにかしなきやいけないんだけど……今は続けるしかないよ、生きるために。

そんな私を誰かが可哀そしだ……とでも思つてくれたのだろうか？  
その人が現れたのは……CLOWSONを歌つている時だった。

あの人はいつも目立っていた。

何と言つても特徴的なのはその紅色の髪と瞳。いつも冷静で、しかし歌つている時は誰よりも激しかった。

その人の名前は岩沢まさみさん。

私が所属していたバンド…… Girls Dead Monsterのリーダーだった人だ。

## 岩沢

その歌つている娘は、私を見ると驚いたような顔をした。でも、驚いたのは私の方だ……

その娘はSSSの制服を着ていた。  
つまり……この娘は死んだ世界戦線にいたという事だ……

しかし……

(こんな娘、いたつけ?)

私はその娘に見覚えがなかつた。  
はて、忘れているのだろうか?

私は覚えている戦線メンバーの名前を頭に上げていく。ゆり  
ひさこ　入江　関根　遊佐　椎名　音無　ああ、  
日向つてやつもいたな!

結論。私の記憶能力があいまいなだけでした。す  
いません、音楽にしか目がついてなくてメンバーの顔ほとんど覚え  
てません。

しかし……女子メンバーは全員覚えてたはずだ……誰だっけか  
はつ、まさか男！？

ごめん、その娘。私思つたより薄情だつたわ……

そんな事を考へてる内に chow Sonが終わつた……

「お前さん！？」

ますい！ その娘が走り寄って来た！

.....

۲۱

私はCrown Songを歌い終えた後、岩沢さんのところへすぐさま駆け寄った。

「お詫びをされへん…？」お詫びをされへんのですよね！？」「うう

「あー…………ああー！そ、そうだ主意？」

私はSSSで下の端やつてたユイつていいます！覚えてますか

「あ、ああ！……ああ！！！そ、そ、うか、そ、うだつたユイか

!

「はい、ユイです！ 覚えててくれたんですね！」

——ああ！ もちろん！

何か岩沢さん凄い声が裏返つてゐるけど……あ、そうか！——ううの  
人がここにいるのに驚いたんだ？

私は声を落して岩沢さんに話しかける。

「岩沢さん……私もあの世界から『消滅』したんですよ」  
「そ、そうなのか……」

「そしたら、この世界に転生しないで落とされたて……一体、どうな  
つてるんですかね？」

「さ、さあ？ 私には一体……何が何だか」  
「そうですか……やっぱりですかよね」

「そうだな……」

「？…………どうしました？ わたわから顔真っ青ですよ。」  
岩沢さん

岩沢

「？…………どうしました？ わたわから顔真っ青ですよ。」  
岩沢さん

その娘・ユイは不思議そうに聞いてきた。  
まさか……

『自分の後輩の名前忘れてて、現在話しかけられてめっちゃビックリ  
クしてました』

何で口が裂けても言えない……  
さてどう説明しようか……

私は音楽でいつぱになつてこる頭を高速回転やせる。……わづだー。

「何あんた C r o w S o n 弾けるんだ？」

話題をすり替へ。

「ふえ？」

「いや…………何でガルデモ以外のメンバーがギター弾いてるのかなつて思つてや…………しかも何気に上手いし」

「あつ…………そつか、岩沢さんは知らないんですけどもんね…………私、岩沢さんが…………その…………『消えた』後、ガルデモのボーカルに選ばれまして、C r o w S o n とも頑張つて練習したんです！」

「じゃあ、あんたがゆりつべの言つてたガルデモのニューボーカル？」

「はい！」

「マジかよ…………この娘がボーカル？ 確かに上手いけどガルデモはアイドルユニットにでもなつたのかよ。

しかも…………そのボーカルのコイは既にあの世界から『消滅』してい

る…………

じゃあ、一体ガルデモはどうなるんだ？

「まてよ…………あんたも、ガルデモのみんな残して『消えた』のかよ？」

「…………はい、みなさんには悪いと思いましたが、私の中で踏ん切りがついたので……」

「つか…………踏ん切りがついたのか…………じゃあ仕方ないな。けど……」

「それじゃ、これからガルデモはどうなるんだ?  
「わかりません…………でも…………」

もう、歌う事はないだろう。

そうコイは言った。

コイ

「どういう事だ!? もう……歌わないって……」

私の言葉に岩沢さんは驚いたようだ。

まあ……本人が気が付いてないなら言わないが、本来ガルデモのボーカルなんてそう代わりが利くわけではないのだ（私も毎日怒られながら練習してたのだ。そう簡単に代わりが見つかってたまるか!）

「もう、ガルデモのボーカルとして歌える人がいないって話です」「…………そうか、そうだよな、そう簡単に代わりが見つかる訳ないか……」

「はい……それにたぶんですけど、もう少しでみんなもこの世界に来ると思いますよ?」

「…………どういう事、それ?」

「いや……私にはよく分かんないですけど……」

私は の言っていた事を岩沢さんに話した。

岩沢

コイが言うには、まもなくあっちの世界で『リセット』が始まると  
いう事だった。

どうやら、私達三人はあの世界にとどまり過ぎたらしい……  
『愛』がどうだと理由は随分ロマンチックだが、……やる事はエゲツ  
ないな。

「そりゃ、確かに歌つてる場合じゃないな」

「ええ、本当に……ひさこさん達大丈夫でしょうかね……」

コイの言葉にひさこ、入江、関根、遊佐……とガルデモのメンバー  
の顔が浮かぶ。

しかし……

「「大丈夫なんだろうな（でしょうね）」」

「めん、みんな。

あんたらがやられてる姿とか……まったく想像できない。

これは信頼から来る甘さか？…………いいや、経験から学んだ事  
実さ！

「まあ……ガルデモが大丈夫なんだから、他の戦線メンバーも大丈  
夫だろ？」

「そうですね……今は天使さんも味方ですしだす……」

「おっ、やつと奏を仲間にできたのか？」

「はいっ！」

それなら本当に大丈夫だろ？  
ゆりっぺと天使のコラボ…………最強だ。

私はこの件に関しては絶対大丈夫だという結論に到つた。

と、それで……

「おーい！ ユイさん！ 次の曲頼むよ！」

観客の一人がそう声を上げた。

他の客も口々にユイを呼んでいる。

…………私としたことが、観客を差し置いて長話をしてしまった。

「おっ、リクエストの声が上がってるぞ？ 早く行け」

「あっ……はいっ！ 私がんばります！」

私の言葉にハツとしたユイがステージに戻ろうと踵を返した。駆け出していく背中に声をかける。

「がんばれよ！」

…………なぜか、ユイがフリーズした。

ユイ

それは完全な不意打ちだ。

本当は憧れの岩沢さんは話すだけでも正直精一杯だったのだ。

その岩沢さんが……

『がんばれよー』

私を応援してくれるのか？

……ダメだ、このままじゃ上がり過ぎで歌うのなんか無理だ……

私は走るのをやめて、岩沢さんの方を向いた。

そして……精一杯の勇気を持って岩沢さんを誘つた。

「おー……どうした？」

「あの……岩沢さんも」「一緒にどうですか？」

岩沢

「あの……岩沢さんも」「一緒にどうですか？　ライブ」

急に動きを止めたユイは一回転して私の方を向いた後、妙に赤い顔でそんな事を言った。

いや……誘つてくれるのはうれしいけど……お前のライブだぜ？

「私が出てもいいのか？」

「はいっ！　大・大・大歓迎です！」

ユイ即座にそう返した。

そつか……そこまで言われたらな……

「……じゃあ、お言葉に甘えさせてもらひますへ。」

「はい、よろしくお願ひしますへ。」

元リードボーカルとして、やるしかないだろ？

そして、私は舞台に上がった。

一度も合わせた事はないけど…… いける！

『じゃあ、次の曲いくよ!』

「哥イのマイクが会場（と言つても街角だが）を震わせた。  
さあ、やつてやうつか……」

Alch e m y !

۲۱

岩沢さんは本当にすごい。  
ノリと勢いだけで打ち合わせもなく誘つてしまつて……正直、しまつたと思つた。

でも……岩沢さんは今、私が書き直したA l c h e m yのリズムを一番が終わつた後、完璧に弾きこなしている。

さすが... Girls Dead Monsterのリーダー！

徐々に私の方が岩沢さんにつっこむのがキツくなってきたくらいだ。  
やつぱつ　岩沢さんは妻一！

岩沢

失礼な事だが、最初私はユイを甘く見ていた。  
でも……演奏が始まると、その考へが甘かつた事を痛感した。

(この娘……凄い！)

ちょっとよれる事もあるが、こんなのは無視していいレベルだ。  
そして……このAlchemy。

正直……負けた。

私が作曲したオリジナルの方では表現しきれなかつたモノがこのAlchemyではしつかり表現されている。  
それでいてオリジナルのリズムを崩していない……

さすがだよ、ユイ。

姿にだまされたが、この娘は……確かに私の後釜だ！

ユイ

そして……『氣』がつくと演奏は終わっていた。

観客は……怖いほど静まり返つている。

岩沢さんの方を見ると……驚いたように私を見ていた。

なんだ……どうした……？

演奏はどうだったのだ？

「コイ…………あなた」

岩沢さんが口を開く。

『…………最高だ』

その声をマイクが拾つた。

途端……

かつて、学校でライブしてた時だつて聴いた事のないような歓声が  
……私をつづんだ。

岩沢

その後、警察がやつてきたので私は茫然として固まつてしまつたコ  
イの手を引いてその場を後にすることにした。

「おっさんー 足止め頼むぜー..」

「おう！ 任せとけ！ おっ……忘れもんだ、持つてきなー..」

「ありがと！」

「ああ、捕まんなよ！ 野郎どもー くめえええーーー..」

観客のおっさん達がスクラムを組んで警察を通せんぼする  
あれは……公務執行妨害にはならないな……やるな、おっさん

私は左手にコイとギター。

もう左手におっさんから手渡された巾着袋を持ってその場を後にし  
た。

もう、すっかり夜が明けた。

朝の光が眩しい。（ついでに眼はショボショボだ）

「さすがだなユイ……あんたの事、見直したよ。流石はガルデモのリードボーカルだ」

「いえ……岩沢さんの方が凄すぎて……私、ついていくので、精一杯でした」

私とユイは公園のブランコに座つて話していた。

ユイの実力は想像以上だ。

なんのお導きかは知らないが、彼女と巡り合わせてくれたやつに無性に感謝したい。

それに……

彼女のおかげである計画が実行に移せる。

それは……

「なあ、ユイ」

「はい？ 何でしょう？」

「一週間後……ライブやるって言つたら参加する？」

「もちろんです！ また岩沢さんと組めるなんて……たとえ地の果てでも地獄の底でもついていきますよー！」

初音のデビューライブだ。

私は近いうちに初音と一緒にライブがしたいと思つていた。

しかし初音にはまだ……自信がない。

それにライブをするには人数が少なすぎる。

だけど……

(ユイが参加してくれるのなら全て解決するー)

味方としては頼もしいかぎりだ。

その後、私は詳しい予定を立てた後、ユイと別れた。（ちなみにいつもさんがくれた巾着袋は今回のライブで稼いだ金が入っていた…詳しく述べではないが諭吉が2～4枚入っていたような？）

その結果は……一週間後の放課後、学校で行われるライブが示してくれるだろう。

What you hold in your hand? . . .  
Let the games begin!

S u c c e s s o r . . . E n d

最近、速度が落ちてる

もっと頑張りねば…

ユイを拾つた私と初音は現在、ある教室に向かつて歩いていた。

「もしかして、ライブって教室でやるんですか？」

「そんなわけないだろ……」

「そうですよ、初音さん……でも、じゃあなんで校舎に入ったんですか？ 岩沢さん達は大丈夫かもしれないんですけど……私、一応部外者ですよ？ 目立ちますよ？」

「いいから、ついて来いつて……すぐライブできる訳じゃないんだよ」

初音の天然な発言とユイの一応の不安を受け流して私は歩く。  
だいたい……ユイ、お前は校門前にいる時点で十分目立つてたから今更心配したってムダだからな？

そして、数分後……

「着いたぞ、ここだ」

「…………なんでわざわざ、一年生の教室なんですか？」

「岩沢さん一年生ですよね？」

私達は一年生のある教室の前にいた。

「ここまで來ても二人は分からんらしい。」

「…………ユイはともかく、初音まで知らないとは驚きだ。音無から聞いてないのか？」

「今回のライブだけ……演奏以外にも応援を頼んであるんだ」

仕方ないので」「でネタばらしと」「ひ。

「応援？……ああ、照明さんとか音響さんとかですか？」

「そうだよ……中々鋭いなコイ」

「へへ……まあ、万年、下つ端やつてましたから」

「…………それ、自虐？」

「違います！　自慢ですよ～」

「せう……で、初音は分かつた？」

適当にユイをからかつた後、初音にも話を振る。

初音はしばらく悩んだ後……ハツとした顔になつた。

「…………まさか、その人達に頼むんですか？」

…………どうやら、初音にも私が協力を頼んだ相手が分かつたようだ。

「そうだ、あいつらだよ…………」「ううのはきっと好きだからな」「でも……ホントに大丈夫なんですか？　の人たち？」

「大丈夫さ、話はつけたから」

「あの～、あいつらとかあの人とか、一体何の話してますか？」

「ああ、そうだな……ユイお前にも説明しておくか……」

一人、話についてこれないユイに私は説明することにした。  
さて……何から話すか……

「」「の学校にはな、私達がいた『戦線』のような組織があるんだ」

「ふえ？…………生身なのにですか？」

「ああ、聞いたところの話だと……私達以上にアホな集団らしい……」

ある時は、部長連盟に勝負をしかけ……

ある時は、ダストシユートに飛び込み……

ある時は、屋上からダイブして……（直後、人の命を救つたらしい  
……意味が分からん）

ある時は、校庭で花火を上げる……

「…………なんですかそれ？ そんな出鱈目な人達がいるんですか  
？」

「ああ」

「…………アホだ」

「…………いや、バカなんですよ」

ユイは純粋に驚き。（そうだよな、死にはしないけど戦線の奴らだ  
つてこんな事しない）

初音は頭を抱えていた。（その顔には「私、この学校にいいのかな……」と書いている）

そいつらは自称・正義の味方。

その名も……

「その名もリトルバスターズさ」

後ろで声がした。

私が振り返ると……

「待つてたよ？ 岩沢さんだよね？」

リトルバスターの現リーダー・直枝理樹先輩がそこにいた……

Knight in shining armor . . . End

は「国」がこと細々の顔を頂きました

ありがとうございました

episode zwei start Live (前書き)

直枝理樹は姫龍の中でタラシのイメージが強くなっています。

ご了承ください

「それじゃあ、みんな。若沢さん達も来たし、作戦を確認するよ」

教室内に直枝先輩の声が響く。

見た目は頼りない感じの直枝先輩だが、統率力はあるらしい。  
部屋にいた他の人達もいっせいにこちを向いた。

ただ……

「…………噂の割にはみなさん女性ですよね？」

「凄いな…………こんな美人さん達が校庭で花火上げたりするんだ……  
(世も末だ)」

直枝先輩を除いて部屋にいるのは女性だけ（一応言つと棗先輩、神北先輩、三枝先輩、能美先輩）だった

ユイと初音の疑問も頷ける。

果たしてこの人達、本当にあのリトルバスターズなのか？　と……

「「ごめんね、その噂を打ち立てた本人達は今ここにはいないんだ？」

ユイと初音の疑問を聞いた直枝先輩は頼りなさそうに笑う。

「どういう事ですか？　直枝先輩？」

「いやね…………リトルバスターズはこの他にも後9人いるんだけどね  
？　恭介と真人と健吾と来ヶ谷さんと美魚さんと美鳥さんは生徒会  
に……笹瀬川さんと古式さんはソフトボール部の遠征に……二木さ  
んは風紀委員長だからね？　結構とられちゃったんだ。いろんな所  
に」

「…………えつ、じゃあ、今回動いてくれるのは先輩も入れて5人  
つて事ですか？」

「いや、それに関しては大丈夫。恭介達には事前に通信機渡してあるから、ちゃんとフォローしてくれるよ」

「ならいいんですが……」

若干、不安は残るもの、まあ棗先輩なり上手くフォローしてくれ  
るだろ？

初音とコイも納得したようだし……

「じゃあ、作戦会議始めようか？」

直枝先輩は笑顔でそう、言った……

「説明するね？ 今日の//シショーンは岩沢さん達のライブを成功させる事…… クドと神北さんは照明。三枝さんと鈴は音響。みんなちゃんと練習したよね？」

「大丈夫なのです～」

「おーけーだよ～」

「はるちんに任せなさい～テスよ～」

「…………任せる」

直枝先輩の言葉にそれぞれ答える先輩達……

直枝先輩は話を続ける。

「作戦開始時刻は今日、時刻は18：00ジャストで場所は中庭」

その姿はとても楽しそうで……

「なんか……ゆりっぺと重なるあの姿」

「やうですね……」

「ゆりっぺって誰ですか?」

だからどうか、早く彼女達もここに来ればいいと思った。

『ミッションスター』

17：45 中庭

なるほど、確かにリトルバスターズはいい仕事をするのかもしれない。

私はベンチに座りながらそんな事を思つてゐる。

実際、直井先輩の作戦は巧妙だ。

三日前に相談を持ちかけてから、先輩は事前にこの情報を風紀委員以外に漏らしていたらしい。

現在、中庭には何も知らない……『たまたま』いた部活帰りの生徒。校舎の窓からは『たまたま』夕口を眺めている文化系の生徒。風紀委員や教員が来るであろう昇降口には『たまたま』ガタイの大きい……言つなれば「塞ぎ役」の生徒がいる。みんなあくまで『たまたま』だ。

…… 実に策士。

ライトモグラムコードもアンプも草で隠されていて普通ならまず気

づかれない。

「…………すゞいですね、あの人たち……手際が良過ぎる……」

「そうだな」

「岩沢さんは驚かないんですか？」

「まあな」

実際驚いてはいるが、あの棗の友達と聞けば普通に見えてくる不思議。

そりや、生徒会に括り付けられるわな……

その時、『たまたま』直枝先輩が私の隣を通りついた。

…………時間だ。

「始めるぞ、初音、ユイ……いいか？」

「いいですよ」

私達は、背負っていたラケットケースからギターを取り出した。アンプに接続、素早くチューニングする。

…………三人とも問題なし。

じゃあ……

ジヤーン！

私は一度、ギターを鳴らす。

中庭にFender Stratocasterの爆音が響いた。

その顔を今度はライトが一筋に引いて回す。さうして

生徒達からは拍手が上がった。なんだ？ 楽しみにしててくれたのか、おまえら？

いいぜ、しっかり楽しんでつてくれよな……

準備は万端だ…… わあ！

「時間だ…… 派手にやるぜ？」

最初の曲は……『Alchemy』

ライブが始まった。

Start Live ... End

久しぶりです。

最近、夏だ、補習だいろいろありますて、遅れました。

短いですがどうぞ。

わあ、『リセット』を始めよつ。

「」は第一コンピューター室。

ユイといつ少女を見送つてから数日がたつていた。  
その間、ずっと『私』の中では彼女の言葉が渦巻いている。

信じるか信じないかはあなたの勝手だよ？ でもね、もし  
私の記憶が正しくてあなたがNPCじゃないなら、いつまでもこんな世界にいちゃダメだよ？

確かにその可能性はあった。

なぜか一人だけ違う役割を与えられたNOI。  
それは、『私』が元人間だからではないのか？  
だが……それを追求する術は『私』にはない。『私』は自分の事だけは分からぬ。

でも、もし仮に『私』が人間だったとして……それがどうしたのだ？

『愛』の存在をゆるさない。

それだけで十分ではないか。

その想いだけは開発者も『私』も変わらない。

それが唯一不变の事実なのだから。

「もう引き返せない……引き返す道なんて初めからないんですよ」

そう自分に言い聞かせて、私はスイッチを押した。  
これで『リセット』が始まった。

「..... harmonics

『私』は分身にコンピューターの制御を任せた部屋を出た。

さあ、最後の戦いの時だ。

彼らの答え、見せてもらおうか。

No return path ..... End

岩沢

歩いてきた道振り返りかえらない。嫌な事ばかりでも前へ進め。触れるモノを輝かしていく。そんな存在になつて……みせるよ！

『Alchemy』が終わる。

観客が私達の予想以上に盛り上がりっていた。  
コイも初音も演奏には問題ない。

よし……この調子なら……

「……『My Soul - Your Beats-』いじつ……」

「……了解です」

「わかりました、岩沢さん！」

次はコレだ……

私は直枝先輩に合図を送った。先輩がどこかへ連絡を入れ始める。しばらくして……

「……!？」

「……からか、ピアノの音が聞こえ始めた。  
さあ、ひとみ。あなたの出番だ……

いぐぞー！

ピアノに合わせてギターを演奏する。

…………――曲田が始まった。

田向

死んだ後の世界。

…………終わりが近づいていた。

コイが『卒業』してから数日。  
この世界に『影』が現れた。

奴らに喰われると俺達人間はNPCになつて永遠にこの世界に縛  
られるらしい。

俺達の選択肢は二つ。

この世界に残るために戦うか、この世界から『卒業』して去つて  
いくか……

この一つだった。

\*

対天使用作戦本部。

「では……僕らも始めましょう」

直井が笑顔でやう言つた。手に持つてゐる銃も相まってかなりの凶悪さを放つてゐる。

「…………、まて！　お前はいつから俺達の仲間になつた！？」

俺はとつあえずつつこんだ。

まったくコイツの事はいまだによく分からない。

自分は神だ、とか何とか言つて人の体にめりやくちゃ銃弾撃ち込んだくせに音無に一括されて抱きしめられた途端、改心。

翌日には当然のようにこの部屋にいやがつた。まったくいい印象持てつて方が無理だぜ？　「コイツ。

「はつ！　今さら何を……無能なお前の代わりにだ！　忘れたかクズ、トイレットペーパーの様に惨めに消えろ」

「なんだと！」

そして、この口の悪わ……誰がクズだ！　俺は戦線一の古株だつづつの！

先輩に対する礼儀くらい覚えやがれ！

そのまま、取つ組み合いになりそつとなつた俺達を音無が諫めた。

「あのな……お前ら。奏が頑張ってくれてんだけ？…………この

隙に全戦線メンバーに合って回るか?」

「ああ、分かつてゐよ音無」

「ふん、こんなクズ居なくとも僕達一人で十分ですよね! 音無さん」

「…………これなのか?」

「なつー?」

何も言えなくなつた直井を置いて音無が先に部屋を出でつた。

途端、直井の凶悪さが一割増しになる。

「…………感謝しぃ、クズ。音無さんが今、お前に乗つてくれなければ、今頃貴様は『成仏』していただろ?」「くつ、そうかよ…………しかしなんだな。お前、ホントに音無には、なつこてるよな」

「当たり前だ…………音無さんのお陰で僕は救われた」

「…………だから、恩返しするのか?」

「…………そうだ。今、『卒業』したらもう一度と感謝の言葉を語つことは出来ないからな」

…………性格は歪んでる割りに恩は忘れないんだよな「イツ。何だからだ言つけど根はいい奴なんだよな。

だからこそ、ちゃんと『卒業』させたいやつたい。

そう、想つていた。

「せうか……じゃあ、生き残らなきゃな」

「ふんつ…………当たり前だ。…………貴様」そこ、最後まで豚のよ

うにもがくんだな」

「くつ、やつやせてもりへぜ…………じやあ、行くか  
「僕に指図するな」

\*

直井と一緒に本部を出ると、音無とひわい達が話をしていた。  
「うか……お前たちは先に『卒業』するのか……

「もしさうと続いてきたこの戦線が無くなつちまうんだつたりゃ……  
……この世界はアンタも含めてその意味を果たした事になつてさ……  
いい風になつたんだなつて、思えるからや。…………ただ、一時あ  
たし達はさ、有りはしなかつた青春をさ……ただ、楽しんでたつて  
事になればさ、それだけで十分だなつて……」

ひわいの言葉が胸に染みてくる。

…………そうだな、そうだったよな。

俺とゆうつへはさ、「神への復讐」つてのをいい訳にずっと『卒  
業』を先延ばししてたんだな。

ホントは毎日が楽しくて……もう、とつぶて満足してたつて書つ  
のに、適当ないい訳作つてずっと先延ばししてたんだな。

「何言つてんだよ、わかんねえよ」  
「だよな…………まあ、後の事は知らない。私達は…………もう逝  
く。それだけ」

「うかつてひわい達は笑つた。…………本当にあこつひまだ、  
歌つていられたんだ。

俺と音無がコイを『卒業』させちまつたせいで、踏ん切り付けさ

しちまつたんだ。

でも……あいつらは何も言わなかつた。

俺も音無も責めないで笑つていた。…………ありがとう。

「じゃあな、新人。…………次もバンドやるよ

「ああ、きつとまた好きになる」

俺も音無と一緒にぜ。

ハイタツチの音が校舎に響く。

もう……あいつらの姿は見えなかつた。

声だけが俺達の耳に届いた。

うん、じゃあな。

なんとなく、胸が熱くなつた。やべ、泣くかも。

「下々共のお見送り、お疲れ様です」

「お前、絶対性格破綻してつからな！」

「イツのせいだ一気に泣けなくなつたけどなー！

「破綻などしてない！ 神に向かつて何こと言つんだ貴様！」

またもや取つ組み合いになりそうな俺達を音無が諫める。

「……馬鹿やつてないでいくぞ？」

「……」「諫めた」つてよりむしむ、呆れられてねえ？

俺う。

と、その時……

ガシャンー

「　「　「　うわあ　ああ　ああ……」」

窓ガラスを突き破つて『影』の野郎が入つてきやがつた！  
慌てて、走る。眼の端で本部が潰れていいくのが見えた。  
…………俺達の思い出が壊れていく。

「やめやめ……」「イツ、直井よつ空氣よめねえ！」

\*

なんとか『影』から逃げた俺達は最早正面突破しかないと、武器庫の武器を持てるだけ持つて外に出た。

「…………なんだよ、これ……」

やここで、さらに驚きの光景を見る事になる。

それは辺り一画、『影』・『影』・『影』・『影』・『影』の大名行列だ。

じつやひ、すつひとじじじ張つてたみたいだな。

「どうなつてんだ……？　アレは！？」

「わ、いの辺りじやコイツ等しかいないんじや……」

「俺達のやううとしてる事……分かってんじやないだりうなー」

直井の言葉にも余裕が無くなっていた。

それほどの大軍が……一斉に襲い掛かつてくる！

突然の行動になにもできない。

やられる！ そう想つた時。

一閃。

田の前の『影』が真つ一つになつた！

…………「んな戦い方をする奴は戦線でも一人しかいない。

「野田！」

「流石だぜ！」

霧状に霧散した『影』の先にはやはり野田が立つていた。

「ふん、ゲスが…………」

そのまま、野田は『影』に斬りかかっていく！

銃で野田を援護しながら、音無が聞く。

「俺達の為に戦つてくれるのか？」

「馬鹿を言うな！ 俺が戦うのはゆりつへの助けになる時だけだ！」

そうだったな。お前はいつでもそれだ。

「お前もとこどん一途な奴だよな！」

だからこそ、みんなゆりっぺを信用してたんだけどな！

野田を援護するよつこ『影』を殲滅していく。

しかし数が多い……ちょっとめんどくさくなつてきたせ……

「日向後ろー！」

「つ！」

そんな心のスキをつかれた。

いつの間にか後ろに『影』がいる。……やべ、しつたぜ……

『影』の手が俺に……

バン！

「！？…………大山！」

伸びる寸前、『影』がまたも四散した。

その向こうには大山の姿があった。……あいつ、今までどうこうい  
たんだろう？

「なんのとりえもない僕だけど、ここで活躍できたら、神様もビッ  
クリ仰天かなつてさー！」

いつもしまりない顔をキリッとさせてしまう大山。

これはあれだ……戦線創る時に見た事があるシリアルス大山の  
方だ。

「あんがとー！」

大山の的確な狙撃がメンバーの後ろにいた『影』を消していく。  
これで後ろを気にせず戦えるようになった。  
視線を前に戻して、再び『影』の殲滅に戻る。

「おりやあ！」「come on! come on! come on!!!」

いつの間にか藤巻とTKも戦闘に参加していた。  
なんだかんだでいつも助けてくれるいい奴らだ。

「Knockin' on heaven's door」

TKの英語は結局最後まで意味が……つて！

「それ……ボーデランだぜ！？」

何か最後に名曲きたよ！？

野田がしたり顔頷ぐ。

「だが、今まさに相応しい」「知つてんのかよ！？」

野田……お前の趣味はわからん。意外と頭良かつたんじゃないかな  
？」「いっつ。

「何て意味だ？」  
「さあ？」

そして藤巻に大山、お前らはなぜ意味が分からぬ！　天国の扉

を……呴ぐだる……たぶん。

『影』を撃ちながら心の中でツッコミをいれる。

「…………アホだやつぱり。…………音無さん以外」

「ひひー、俺をあいつ等と一緒にするなー!」

直井、お前はなぜ俺を常に馬鹿の部類でカウントする?  
確かに馬鹿だが、俺は一応高校三年までは行つてゐんだよ!  
その後は…………まあ、最低の人生送つてたが…………

「おいおい……喧嘩すんなよ。…………何にしても役者がそろつて  
来たな」

「そうですね」

「いや、俺との会話が終わる前に音無に食いつくか?　お前

何だつたんだ?　今の俺の回想は…………(なぜだらつ、また『卒業』  
の機会を逃した気がする…………)

…………まあ、いいか。

「…………役者、ね」

今は目の前の事に集中するか。

野田、大山、藤巻、TKとの場に集まつた。となると残る役者は後一人。…………忍者娘と…………あと

「そりゃああ――――」

…………來たぜ、柔道バカが。

屋上から数体の『影』が投げ飛ばされた。

ソレと一緒に少年が飛んでくる。

「なんだこの世界は！？ 何が起きたって言つんだ！」

「……………ていうかお前に何が起きたんだよ？」

そこには、筋肉質だがかなり痩せている長身の少年だった。  
……松下……五段だよな？

「誰だお前？」

「うにも自信がないが、かと言つていまさら誰ですか？」と訊く  
訳にもいかず、対応に困っていた俺に助け船を出してくれたのは…  
…さきほど野田に代わって馬鹿の称号を引き継いだ男・藤巻だった。  
いや、お前分からない事を聞く勇気はスゲーケビさ、失礼つて事  
を自覚しような？

長身の筋肉少年は意に介した様子もなく答えていたが。

「うむ、しばらく山籠りしていたのだが……何せ食い物が少なくて  
な……」

「お前……松下五段かよ！」

「Tasty candy!」

……やっぱり松下五段だつか。

「激ヤセしたな……大丈夫か？」

音無が松下五段の身体を労わる様に話しかける。ついで  
に後ろにいた『影』を一匹打ち抜いていたが……音無、お前直  
井化してね？

「おう、むしろキレイがいい。もしかしたら今なら……百人組手もいけるかもしねえぜ！」

音無の心配に無用だ、とでも言つよつに後ろの『影』を碎く松下五段。

直井が低く「どこまでも非常識な集団だ……」とぼやいていた。  
そこには満場一致で賛成だが、目下の所、催眠術師のお前が一番非常識だぜ？

それに松下五段……百人組手は柔道じやねえぞ？ 空手だ。  
まあ、今はいいか。何にせよ……

「助かるぜ。何せこれだけの軍勢だ」

味方は多い方がいい。

じりじりと『影』が詰め寄つてくるが、不思議と恐怖は感じない。

「無事に去つていこうぜ……メンバー全員でよ」

藤巻の言葉にメンバー全員が頷いた。

突破するぞ！

今日は話ではあつません。

## アンケート ~Agony of the dragons~

どうも皆さんこんにちは……姫龍です。

最近、他の作品も並行して書いているせいか、投稿速度が最高、落ちてます。

お気に入り登録してくださっている52人および毎回読んでくださる方々、誠に申し訳ございません。

ああ、一日、5話投稿していた初期のころが懐かしい……

……最近、どうも話の内容が浮かびません。

ラストは決まっているのですが、そこに至る過程がまだ全然決まりません。

そこで……

大変あつがましいのですが、今回はアンケートを取らせていただいてこの話のこれからを考えたいな……という所存でございます。勿論、お時間のある方で結構です。どうかお願ひします。

### 1、水着

『CLANNADE』のキャラクターを使って海かプールに行く話を書きたいと思っています。そこで問題になつたのが、各キャラの水着。誰にどんなモノを着せればいいんでしょうか……ご意見、お願いいたします。

### 2、日向とコイ

アニメだと日向はコイに「結婚してやんよ」とか言つてました。

アレ……本気なんですかね？ 読者の方々の殆どが気付いていらっしゃると思いますがこの話……その内、戦線メンバーもこっちに戻ってきます。その時、はたしてコイを今まで通り「コイ」と表現するのか。それとも「日向コイ」にすべきなのか……これはかなり切実な問題です。『意見、お願ひいたします。

### 3、脇役の存在とクドわふたー

最後の難問。key作品に登場する『超』個性的な脇役達。例えるなら『CLANNAD』の幸村俊夫に芳野祐介に柊勝平。

そして今回最大の難問『クドわふたー』。

…………あーちゃん先輩や氷室憂希が予想斜め90度を行く可愛さ…………そして直枝架夜。直枝？ここで直枝が来ましたよ！情報が少なすぎる。はたして彼女たちや『CLANNAD』の脇役達を登場させるか否か……『意見、お願ひします。

質問は以上です。どうか姫龍に知恵をお授けください。また、作品への要望等もお待ちしています。

それではみなさん、さよなら。

みなさんの『答え』待っています。

……最近、意味不明になつてきてるな……と自分でも思います。

ナギ

新校舎屋上

……分身に後を任せた『私』は、屋上から戦線と『影』の戦いを見つめていた。

圧倒的に不利な戦い。なのに誰も諦めようとしない。彼らは知っているはずだ。その気になれば今この瞬間、この世界から『卒業』できる事を。事実、戦線の八割方は既にこの世界から『卒業』していた。後は、彼らだけなのだ。彼らしかいないのだ。

分からなかつた。

『私』には彼らがこの世界に居座り続ける理由が分からない。何故、彼らは戦うのだろうか？ どうして『卒業』という一番楽な逃げ道を彼らは選択しない？

……やはり、NPC化しかないのだろうか？ リセットするしか道はないのだろうか？

そんな事を想いながら『私』はこの戦いを見続けていた。

日向

「くそ、キリがない！」

田の前の『影』を殲滅しながら前に進んできた俺達だったが、ここにきて前も『影』、後ろも『影』という非常に不味い状況に追い込まれてしまった。

まだ、誰一人としてかける者はいないが、それも時間の問題だ。

「音無さん、下を見てくださいー！」

直井も気付いた様だが『影』が下からも登つて来ている。このままで……そんな考えが嫌でも頭を過る。魂を抜かれ、何も分からず、何も考えず、永遠に人形としてこの世界に囚われる……それは地獄だ。それだけは……嫌だ。

と、その時、音無の死角から『影』が飛び出してきた！

「後ろー！」

慌てて銃を向けるが……ダメだ、間に合わない！  
音無がやられた……と思った。

「…………あさはかなり」

彼女が現れるまでは。

椎名

音無に襲いかかろうとした『影』を念め、数体を始末して私は姿を見せる。登場としては上出来だらう。さて……

「…………百人だ」

私は呟く。

突然の状況に少し混乱しているのだろう。間が抜けたように音無が聞いてきた。

「何が？」

「百人……戦力が増えたと思え」

その問いに答えながら、『影』を一匹、また一匹と始末していく。こいつらは数は多いが一匹の能力はそんなに高くはない。

音無はまだよく分かつていないので、「えつ？」と聞き返す。……あいかわらず鈍い奴だ。

「分からぬのか……お前の意志は引き継ぐ」

だから早く彼女の元へ行け。そう付け加えた。

「椎名……ああ、後は任せたぞ。付いて来い！ 日向」

音無の呼び声に日向と……なぜか直井も付いて行つた。

「おひつー！ こりで戦力減らすとか一体、どうにうつもりだよ、椎

名ー！」

遠くで木刀を振り回しながら藤巻が叫んでいる。

私は答えの代わりに近くにいた『影』を数体、始末した。

「ふん、なかなかやるようだが貴様などに遅れはとらん、  
うおいやああああ！！」

……どうやら馬鹿にも理解できたようだな。負けじとハルバートを振り回す野田を見ながら私は想つ。

始まりがあるのなら、終りは必ず待っている。  
永遠など存在しない。

それに理解している

「……………どんな終焉を迎えるか、だよね」  
ハンティング

۱۰۷

私は終わりを迎えるために刃をふるう。

奏

学園大食堂 内部

…… 一体、何がいけなかつたのだろうか？

黒幕はゼニ 知っていた 私と一緒にいたが黒天使 彼女の記憶は  
あつた「Angel Player」の製作者でNPCの……ナギ  
という少年。

と聞けばすぐにでも答えるだろ？

この世界に『愛』が在つてはいけない。全てを『無』に返す

彼はそういう存在だ。

でも……そんな事を認めさせるわけにはいかない。彼に私達を『支配』する権利などない。誰も他者を支配する事などできない。

「…………秦！」

「…………じつしたの？」

「援護にきたぜ！」「ふん、感謝していくぞー♪」

だから私は戦うのだ。

「さあ、なり…………ギルドに行け！」

What ends?  
.....End

Another episode Four {What end?} (後書き)

次回……田向大活躍？

僕達は『今』を生きている

世界は『ゼロ』からはじまり『ゼロ』で終わる。それが私達の世界の理だった。

なら、この世界はなんなのだろうか？

死後の世界。ここには『有』からはじまり『無』で終わる。

苦しんだ私達はここで『生きる』幸福を味わい、いずれ『卒業』していく。

……何のために？

『卒業』の先にある第一の人生。

それは果たして今、ここに『存在』する私達の人生だと言えるのか？

顔も名前も家族も違う。そんな人間<sup>モノ</sup>が今、この瞬間意思を持つている私と『＝』で結ばれると言うのか？

……違う。それはもはや、私とは言わない。別の誰かだ。

その赤の他人になる為の『清算』としてこの世界が存在するとしたら……馬鹿な話だ。

「この世には善意から生まれる悪意が、悪意から生まれる善意がある。

この世界を創造した『神』と呼ばれる強者の意志をこの世界の総統の者達がみな等しく受け入れる訳がない。

だいたい、受け入れるとしたら始めからこんな世界には来ない。

許せないからここに来るのだ。認められないからここに来るのだ。諦められないからここに来るのだ。

彼らが欲しいのは『未来』ではない、『過去』だ。はじまりの『ゼロ』ではなく、終わる前の『イチ』だ。『結果』以前に、『過程』で敗北した私達に必要なのは……

『新たなスタート』ではなく、『人生のリプレイ』だ。

その為の『Angel Player』。その為の『世界』。

準備は出来ている。

後はあの馬鹿……ナギを止めて、局面を幻想世界セカンドステージに移す。

話はそれからだ。

私は向かう、『彼』の元へ。そして終わらせむ。この戦いを。

Another episode

sunken (後書き)

まだ誰かは秘密といつ事で……ではまた！

Another episode | Who is the ultimate

今回最後です。

ゆり

ギルド連絡橋 B7

よつて来る『影』を片っ端からアサルトライフルのフルオート射撃でなぎ掃う。

「……数が増えてるって事は、こいつで会ってるのかしら?」

私は、単独でギルドに潜入していた。

どうやら神様気どりのバカ野郎は、調査の結果ギルド内に潜伏しているらしい。

まったく、いい度胸をしてる。見つけたらただじやすませない……などと意気込んでいたのは実は最初の方で今現在、私は結構なピンチに陥つてたりする。

事実として敵の根城に近づいているのなら、敵の伏兵である『影』が増えるのもまた道理……なのだが、私はすっかりそれを失念してた。気が付けば四方八方『影』『影』『影』『影』……まったく、とんだ大ピンチだ。

牽制で何弾か無駄弾を消費して私は物陰に隠れる。アサルトライフルの残弾は残りわずかで、あと持っているものと言えばハンドガンのベレッタM92とサバイバルナイフだけ……

「……あんな数、ハンドガンなんかじゃ乗り切れないんだけど……」

……

「いや、魂抜かれるの覚悟で特攻するかな……などと絶望的な案が頭をよぎる。腰ためにナイフ構えて『影』に突っ込んでいく私……」

「……あちゃー、なんでだろ？　まったく勝てる気しないわ……」

あつさり『影』の集団に群らがられて魂を抜かれるのが、安易に想像できる。しかし、なら今、有効な手段はなんだ？　どうすればアレを突破できる？

あまり、時間は残されていない。護るべきモノの為にも私は進まなきやいけないんだ……

悩む、私に助け船を出してくれたのは意外な人物だった。

「ゆりっぺ

突如、呼ばれた私の愛称。味方と分かつていたが、思わず銃を向けてしまった。そこにいたのは……

「…………チャ　？」

「ああ」

チャ。最古参の戦線メンバーの一人でギルドのリーダー。その彼がここにいるという事は……

「やっぱり、ギルドにも来た？　『影』」

「ああ、寝込みを襲われて散々だ。運よく誰一人かけなかつたが……あそこも、もう終わりだ。今は全員が地上を目指している」

「……そうか、もうギルドもなくなっちゃったのか。なんだか、急速に世界が終ろうとしているみたいだ。」

そうやって、私達がいた事も全部無かつた事にするんだろ？が、この世界は。

私の表情から、チャ　は何かを察したのだろうか。低く、呟いた。

「…………戦いが、終わるのか。俺達の反逆は……」

それは最終確認。この世界で、戦う私達の為に残っていたチャが卒業する為の言葉。

もう、彼に迷惑はかけられないから……私ははつきり頷いた。

「…………ええ、終わるわ

チャ　が目を見開く。そして一点、彼は穏やかに笑った。

「そうか、ならもう、いいかな。…………持つてけ」

投げ渡されたのは、チャ　が持っていた機関銃。これを渡すという事は、本当に彼はもう逝く気なのだ。……だったらその決意を揺らがせないために、

「ありがとう！」

私は笑って見送ってやるべきなのだろう。

チャ　はそんな私を見て、おかしそうに笑った。

「…………そんなどこまで”アイツ”にそっくりなんだな……」「えっ？」

それはもしかして……

「なんでもない…………じゃあな

聞く暇も『』えず、チャは逝ってしまった。彼が最後に言つた言葉。それは……たぶん、いや……分からぬといふ事にしておこつ。だつてそれは私には永遠に理解できない事だから。

今、私がすべき行動は、彼の『卒業』を悲しむ事ではないから。

「…………行こう

まだ、敵は残つてゐる。

チャ、今までありがとうございました。貴方がいなければ、何も始まつていなかつた。

次の貴方の人生、どうか隣に彼女がいますよつこ。

\*

### オールドギルド

その後、前の敵を殲滅しながら進んでいた私は、オールドギルドにまで来た。先の話から大量の『影』がいる事を予測したのだが、見た限りこの場に『影』の姿はない。

「…………どうやら、束の間の休息ね」

……その事で安心してしまった。一気に疲れが来る。

私は近くに腰を下ろし、少しの間休憩を取ることにした。

いま、地上ではみんな戦っているのだろうか？ 天使、いや奏ち  
やんも……

張り詰めていた緊張が解けた私はそんな事を思つていた。  
もつと早く気付いてあげられたら、どんなに良かつたか……もし  
かしたら、意外と仲良くやっていたかもしない。こんな世界だけ  
ど、一緒に過ごして、似合う服とか探してあげたりして……そんな  
感じで楽しく過ごせたりしていたのなら……私は……いや、無  
理か。

今さらなにを、と自分の考えを否定する。私にはそんな事を言う  
権利も思う権利もない。自分の我儘で一体、どれほど彼女を傷付け  
たのか。

思えばおそろしい。死なないとはい、人に銃を向ける事ことに  
何も感じなくなっていた自分。作戦を隠れ蓑に彼女の答案に細工を  
させた自分。……なんと最低な人間だったろうか。たとえ、彼女が  
天使としても絶対にそんな事、やってはいけなかつた。

……それは、彼女に対する懺悔だった。必ず謝るつとも思つ。で  
も……

それでも私は『神様』が許せない。

どうしても、許せないのだ。それに関係するモノも、何もかも！

……私は許せない。

言おう。また再び、同じ状況になつたとしたら、それが神に続く  
道しるべになる限り、私はどんな汚い事も卑怯な事も躊躇なくする

だろ？。

それが、私の…………業だ。

そこまで考えた所で、私は田をつぶった。  
考えるのは、ここまでだ。  
次に進もうと立ち上がる。……と、

ドスン

……『影』が落ちてきた。

「しまった！ いつの間に……」

氣が付くと辺りは相当の数の『影』がいた。……待ち伏せだ、や  
られた！

「やっぱ、口クな事ないわ……」

ガラでもなく、自分の行動に悩んでいて『影』が接近している事  
に気が付いていなかつた。

私は機関銃を構える。この数だ。いくら適当に撃つても無駄弾は  
ない。

「消えろ！ ………………消えろおー！」

口から無意識に出た想いが私の疲れを無いモノと認識させてくれ  
る。そうだ、殺らなきゃ殺られる。

みんなが頼りにした『ゆうつペ』は、こんな所で終わる訳にはい

かないんだ！

神経が研ぎ澄まされる。振り向きナイフを振るう。確認したのは真つ二つになつた『影』。勿論、前への警戒は忘れない。この機関銃の火力なら十分に押し切れる。

「私はね、リーダーなのよ！ なめるんじゃないわよ！」

そう、吠えて私は走りだした。

\*

新校舎 廊下

戦いは、局面を迎へつつあつた。数だけ見れば圧倒的な勢力を誇る『影』が断然有利なこの状況。しかし戦線のリーダーである仲村ゆりの存在が戦況を変えようとしている。流石といった所か、彼女は現在、単身で『影』の本部に突撃をかけている。そして徐々にだが確実に前進していた。

このまま『影』が押し切るのか、それとも起死回生の戦功を仲村ゆりがたてるのか。それは、まだ分からぬ。

「だけど……望むなら私は、後者であつてほしい」

だから……少しだけ、助けてあげましょくか。  
直接には手を出さない。

私は、可能性を『えるだけ。

\*

教室の一角に”彼”はいた。外の雑音には一切耳をかさず、勉学に励んでいる。

彼の名前は、高松。ナギの介入によつて魂を喰われてしまつた元、人間。

「見つけましたよ、高松さん」

「はい？」

意思を奪われたモノは、こんなにも機械的で無個性だ。……ナギ、貴方にはこれが幸せそうに見えるのか？

違う。これを人は幸せとは言わない。こんなのは……間違つてる。

「貴方を迎えに来ました」

私がそう言うと彼は心底不思議そうに答える。

「……すいません。どちら様でしょうか？」

……NPC化されたモノは人間だった時の記憶を全て失う。No Player Characterに過去は要らない。ナギはそう、言つていたから。  
……だけどね、ナギ。私はその考えに一度だつて賛成した事はないんだよ？

「そうですね。言つなら『おせつかいさん』でしょうか。本当なら

自分で答えをだすのが一番いいんですけどね？ それだと間に合わないんですよ。だから……高松さん。貴方を迎えてきました。行ってください。みんなの元へ。そして見つけてください。答えを。：

「みんな、貴方を待っています」

その時、彼が見たのはとても不思議なモノだったに違いない。私の真紅の瞳。それが赤黒に変わっていくのを彼は、じつと見つめているしかなかつた。

\*

高松

気が付くと私は教室にいた。

「…………何故だ？ ここは？ いや、私は、変な黒いモノここなんだ？」

混乱する思考を鎮めるため、とりあえず逆立ちをする。そのまま、腕立てをするうちに思考がはつきりしてきた。そう、私は購買でプロテインを購入した帰り道、おかしな黒い化け物に襲われた。そして……覚えていない。という事はそのままこの教室に運ばれたのだろうか？

疑問はいろいろとあつたが、逆立ち腕立てができる辺り、まず五体は満足のようだ。

ふと窓の外を覗くと日が高く上がっている。という事は襲われた時から……一日以上は経つていてるという事が。

さて、それではこれからどうするか。私は逆立ちから一度飛んで床に腕立ての態勢で着地した後、立ちあがつた。

その時、私は今まで座っていた机の上に一枚の手紙が置いてある

事に気がついた。……メッセージだろうか？

封を切つて、手紙の内容を確認する。……そこに書かれていた内容はなかなかに衝撃的なモノだった。

私を襲つた怪物　『影』が大軍で押し寄せてきた事。

その怪物に喰われると人はNPCになつてしまふ事。

その『影』の出現によつてメンバーの半数以上が来世を求めて『

卒業』してしまつた事。

そして残つたメンバーは現在、『影』と戦つているとの事。

……あまりに突然の状況の変化に私は再び混乱しそうになる。しかしどうにか心を落ち着けた。

要約すると私は今までNPCになつていた、という事だろうか？  
だがそれなら、何故私は人間に戻れたのだろうか？

その理由は思い出せなかつた。ただ……

みんなが貴方を待つてます。

そんな言葉を覚えている。そう、私を待つてくれている人たちは確かにいる。私は一人ではない。

ならば、するべき事はもう分かつていて。それは戦つている人たちの元へ応援に駆け付ける事。

だが……

「私には…………武器がない」

その問題はどう解決するべきだらうか？　このまま単身援護に向

かつても、やられるのは田に見えている。

新たな問題に私は今度こそ頭をかかえた。…………その時。

あつ、それは忘れてました。

そんな声がドアの方から聞こえた。何奴！？ と私は顔をそちらの方へ向ける。すると……

ブン！

何か黒い物体が飛んできた。思わず受けとめる。

「…………私に死ねと？」

それは、アニメなどによく見るようなモノで簡単に壊つなり…………  
トゲ付きグローブ。

…………せめて、ここは銃じやないんでしょうか？ そんな疑問が脳内を翔けた。と、グローブの中にもまた、手紙入っている。

「今度は何でしょつか？」

もう、正直どうでも良かつたが、せっかくだからと律儀に封を切つて中を確認した私に…………衝撃が奔った。そこにはただ、一言。

キミの筋肉を活かせ。

そう、書かれていた。

\*

トゲ付きグローブを投げた数秒後。そう言つて教室から出てきた  
彼は……上半身、裸だつた。どうやら、あの手紙は彼には劇薬だつ  
たらしい。

あんな状態で大丈夫か？と我ながら勝手な事を思つたが、目前に現れた『影』を見事なステップで翻弄し、拳を叩きつけて消滅させたのを見て、それが杞憂だと分かつた。

「……まあ、アレなら大丈夫ですね」

…… どうか正直キモいくらいです。

さて、これで戦況は変わるだろうか。

「私にできるのは……」今までです」

後は、彼らが掴み取るしかないと

彼らはその手で『未来』といつ名の過去を掴めるだらうか？

\*

ゆり

## オールドギルド

「はあ、はあ、はあ……見たかつてのよ！」

私の息切れた呼吸音だけが辺りに響いている。

……あれからオールドギルドにいた、全ての『影』を私は消滅させた。もう、機関銃もアサルトライフルも弾切れ。残つたのはサバイバルナイフ一本と残り数発のベレッタM92だけだ。

ここが武器庫であるオールドギルドだから良かつたモノの、もし通路でこんな戦闘をしたら、確実に私は『影』に喰われていただろう。本当に運が良かつた。

「さて……武器を補充しようかしら……」

そうなると残る問題はこのオールドギルドに武器が残っているか、なのだがそれについては問題ない。

チャ の事だからちゃんと武器は隠してくれている筈だ。

私は適当な部屋を選び、中に入ろうとした。…………その時、

「流石ですね」

”彼”は現れた。

振り返ると立っていたのは、一般生徒の制服を着た少年。最初はNPCかと思った。しかしそれはすぐに間違いと分かる。

その瞳にはNon Player Characterにはない意志の光があった。

「へえ、まさか黒幕さん本人が出てくるとわね……」

私は軽口をたたきつつも、心の中で安堵の溜息を洩らす。

……良かつた。犯人が戦線のメンバーでなくて、良かつた。これが『反乱』ではなくて、と。

そんな私の心を少年は読んだのか、その表情がほころぶ。……何がおかしいんだ？

私は少年を睨んだ。すると”彼”は一点、怯えた様な表情を作る。

「怖いですね、そんな表情をされてしまつて」

「ふん、お生憎様。私はね、仲間以外にはやさしくない女なのよ。それで、貴方は何？ 私に何の用？」

「最初の質問には、残念ながらお答えする事はできません。ただ、何の用か……と聞かれるとそうですね、『私』には足止め、という目的があります」

なるほど、つまりこの少年は私の邪魔をするために来たという訳か。

「私一人に『苦労な事ね。でも……貴方なんかにその役目が務まるかしら？』」

「ええ、勿論。目的があるのなら『私』に敗北はありませんから」

それは、まるで既に勝負はついている、と言われたようで少しつラッとした。でも、キレるのはまだ、先だ。その前に私には聞かな

きやいけない事がある。

「そつ……なら、戦う前に少し質問に答えてくれない？」

「なんですか？」

「…………みんなは、無事かしら？」

敵にこんな事を聞くのはおかしいと分かつていた。でも……それでも、確かめなければいけない事だった。もし、もう誰も残っていないなら私は……

「…………ええ、驚くべき事ですね。貴女のお仲間さんはまだ、誰一人かけていません」

「…………そう、良かつた」

大丈夫。まだ、みんな無事だった。そうか私はまだ『約束』を譲りている。

それだけ分かれば、十分だつた。

「さて……質問以上ですか？」

「ええ、もう結構よ」

「そうですかなら…………」

少年が言葉を紡ぐと口を開いた時、既に私は駆け出していた。手にはサバイバルナイフ。この距離なら……！

走り込んでくる私を見て、少年はフツと笑つた。そして……

その手に現れた私のと同サイズのナイフが私のナイフを弾く。  
……ちょっと待て、そんなのありか！？

「あんた卑怯よ！？」  
「そうですか？」

私の非難をよそに少年は容赦なく、ナイフを振るつてくる。剣戟の音が辺りに響く。くそ……”彼”的ナイフは重い。氣を抜くと手からナイフを落しそうになる。この力……”彼”はおそらく、『O verdriive』も使用している。……と、目の前から突然”彼”が消えた！！

「ツー？」

咄嗟に脇へ転がる。私がいた空間を少年のナイフが横薙ぎしていった。危なかった。高速移動のスキル『Delay』。忘れていたら私は真っ二つになる所だった。

(奏ちゃんが造った技はみんな使えるって訳?)  
「おや……避けたんですか?」

少年が感心したように呟くがもつ、皮肉を言つ余裕もない。相手が悪すぎる。どうすればいいのか……銃には、まだ球がある。だけど撃つた所で『Distortion』で弾かれるのがオチだ。

(「いや、マジで終わつたかもね……）

一体、どうすれば勝てるのか見当もつかなかつた。この少年、強すぎる。

だけど、諦める訳にはいかなかつた。みんなの為にも私は……戦

わなければ、いけなかつた。

たとえ、勝てなくとも挑むしかない。私は覚悟を決めて目の前の少年を睨みつけた。

何故か少年は悲しそうな顔をしていた。何だその眼は……私をそんな眼で見るな！

「……なによ？」

「…………何故、そんなに頑張るんですか？」

「……どうこう事？」

「 もう、いいじゃないかと言つてるんです。貴女はよく戦いました。もう、『卒業』してもいいんじゃないですか？」

……なにを言つてるんだ、ここつ……

「あんたに何が分かるのよ！ 勝手な事、言つてんじゃないわよー」「岩沢まさみとコイは今、同じ世界で五体満足で平和な日常を送っていますよ？」

「ツー？ ……だ、だから何よー！」

「貴女もその仲間に加わつてもいいんじゃないかと『私』は言つてるんです。貴女だつて本当は分かつてゐる筈だ。この世界は死後の世界ですが、別に『卒業』後の選択肢は一つではない。全てを投げ捨ててやりなおす道もあります。だから……ここに貴女が留まる理由は、もう無いんですよ？」

……その言葉は私の胸に刺さつた。そつだ。本当はもう、岩沢さんとのやつとりで氣付いていた。この世界は神の嫌がらせなんかじゃない。神のやさしさに満ちた世界だと。一度、不幸のまま死んだ私達はここで生まれ変わるかやりなおすかの選択肢を神様から「えられていたんだ。

自然と膝から力が抜けた。落ちたサバイバルナイフを拾う氣すら失せる。

「そうか…… そうよね。私はもう……」

他者の為に戦う必要も苦しむ必要も無い……

「そうです。さあ、もう燻つてる時間は終わりです。妹弟かれらの事も、もつ忘れてしまいなさい。アレは事故です。不幸な……事故。けして貴女のせいじゃない」

耳元まで顔をよせた”彼”はそう呟いた。…………私のせいじゃない？ 私は悪くない？ 私は……

身体が急に軽くなつた気がした。いわれもない幸福感に包まれる。……私はこのまま……消える。

誰に言われなくとも理解できた。やつとあの子達を死なせてしまつた罪から私は解放されるんだ。

やつと……

おねえちゃん、だいすきい！

その時、いつかあの子達が言つてくれた言葉が胸に響いた。

頭にイナズマが奔つたような感覚。

それは……一つの可能性。

消える前にそれを聞かないと……

私は少年に尋ねた。

「ねえ、教えて。……本当に私は悪くない？ 生き残った私は……悪くない？」

私の問いに少年は笑顔で答える。

「ええ、悪くなんかありません。悪いのはあの男達。全ては”偶然の悲劇”。貴女は何も悪くない」

……………そうか。そうなのか……ありがとう、少年。分かつたよ  
私。

私は立ち上がった。さつげなくナイフを捨い、”彼”から離れ数歩、歩く。

「……どうしたんですか？」

”彼”が怪訝そうに尋ねてきた。そりやそうだろう。今まさに消えようとした人間がまた、武器を手に取つたんだから。

ある程度、距離を取つた私は”彼”的方を向いた。途端、”彼”は何かを感じ取つたのか。

再び、ナイフを構える。

「一体、どうこうつもつですか？」

“もう問い合わせてくる”彼に私は精一杯の笑顔を向けた後、こう言った。

「「めん。私やつぱり神様……許せないや」

「…………どうこう事ですか？　それは

”彼”は本気で訳が分からぬのだろう。何故あそこから神が許せないという結論にいたるのか。

そうだよね……分かる訳ない。だってこれはある意味……私のへ理屈だから。

「さつきさ、貴方は私が悪くないって言った」

「ええ、そうです。貴女は悪くない。なのに何故、まだここに残るのですか？」

「それに関してはもう、私は納得してる。そう、私は”悪くなかつた。全ては偶然だつた” そう貴方が言ってくれたから納得できた」「では、何故！」

私の遠回しな言い方が気に障ったのか”彼”は声を荒げる。

「怒らないで聞いて。じゃあさ、何であの子達は…………私の妹弟きょうだい」

は死んだの？」

「それは……強盗が……」

「そう、強盗が”偶然”私達の家に入つて來たから」

その言葉を聞いた”彼”は……氣付いた様だ。

「あ、貴女は…………まさか！？」

「そうよ」

「この世にもし、人の力ではどうしようもない事があるとしたらそれはきっと田に見えないモノ……極論を言つなり……

「私はその”偶然”を引き起<sup>こ</sup>した神様が許せないの」

”偶然”私の家に強盗がやつて来て”偶然”私だけが生き残つて……そして死んだ私は”偶然”この世界に来た。……前言撤回。何が神のやさしさだ！ 全部、全部全部全部！！

あいつ  
神の身勝手じゃないか！

少年は驚きで田を見開く。

「な、何を言つてるんですか！？ そんなのハツカたりだ！ 貴女は自身の不幸を神のせいにして、復讐を正当化しようとしている…」

他者には、そう聞こえても仕方ない私の自論。でもね……でもね！

「なら、教えてよ！ なんである子達が死ななきやいけないのよ！ ? なんで！ なんである子達が……私より小さいあの子達が、私の身代わりになる必要があつたのよ！？ ”偶然”を神のせいにするな？ 不幸を神のせいにするな？ だつたらアレを引き起こしたのは誰よ！？ 私？ それともあの子達？ 違う！ 神よ！ 神じやなきや、出来っこない！ 神以外にあんな偶然起こせるものか！ そして死んだら死んだでこんな世界に閉じ込めて、チャンスを与えるから許せ？ それで私達が納得できるとも思つてんの！ …ふざけるな！」

神は平等。幸も不幸も等しくばら撒くというのなら、それはきっと『正義』なのだろう。

だけど、だから納得できるのか言われたら出来る訳がない。

まだ、生まれて10年も生きてなかつたあの子達が不幸を被る理由なんてどこにもない！

私はベレッタM92を”彼”に向けた。

”彼”はまだ、茫然としているのか、動かない。

私は”彼”に静かに語りかける。

「ありがとう。貴方のやつている事はきっと善意よ。貴方はこの世界で誰よりも正しい。でもね、私も……戦線のみんなもそんな言葉じゃ納得できないの。『どうして、僕・私だけ……』それが、私達の共通の想いだから。神様の公平な判断で不幸を被つたとしてもね。当人の私達は『そつなんですか、じゃあ仕方ないですね』って、諦める訳にはいかないし、納得する訳にもいかないの」

「……だから、最後まで神を目指して戦うと？」

「…………ええ」

そう言つて私は銃弾を”彼”に放つた。”彼”的脇腹に銃弾は吸い込まれていく。

嫌な音が辺りに響いた。

「……なんで、避けないの？」

”彼”が膝を折る。無言で痛みに耐えているのだろう。もう、これで動けまい。私は”彼”的脇腹を通り奥へ進むことにした。この先に”彼”的護っていた本部がある筈だから。

「（……本当はここ）で『卒業』してほしかった（）」

「…………えつ？」

”彼”は低く何かを呟いた。良くな聞こえなかつた私は振り向く。とその瞬間、私は自身の敗北を悟つた。どうやら最後の最後で勝利の女神は”彼”にほほ笑んだらしい。まあ、そうか。私、神様嫌いだし仕方ないか……

「…………どうやら、あなたの勝ちみたいね」「すいません。本当はこんな事したくなかった」

申し訳なさそうに呟く”彼”的表情がおかしかつた。

「なに……よ、この……」

薄れゆく意識の中、最後に見たのは、私の足をがつちりと掴んだ

……『影』の腕だった。

Who  
is  
the  
ultimate  
winner?  
...

## Another episode ~Who is the ultimate~

如何だったでしょうか？ 正直、姫龍自身にも意味不明になってしまったところ多々ありましたが、今回初めて戦闘シーンに挑戦しました。

よろしければ、「感想をお願いします。

………… MYSOの筈なのに最近、岩沢の出番は少ないです  
が、ここはどちらも外せない所なので、承ります。では、失  
礼します。

8 / 26

感想の制限がなくなりました！ アドバイス等ありましたらどうぞよろしくお願いします！

岩沢

風紀委員が現れたのは、『My Soul, Your Beat』が終わり、三曲目を演奏しようとした時だつた。

「あなたたち！ そこで何をしていいのー？」

聞こえたのは風紀委員長の声。そして傾れ込んでくるクリムゾンレットの腕章を付けた生徒達。一応、生徒会から許可を貰っているので今回は校則違反ではない。だが、ここで捕まれば、今後の活動は制限されるだろう。

なので、私達が取るべき選択は一つしかなかつた。

「直井先輩！ あと、頼みます！」初音、ユイ逃げるぞ！

私はそう言つて持てるだけの機材を持つと一目散にその場から逃げだした。その後をユイに引つ張られた初音が付いてくる。よし…これなら逃げ切れる。

後ろから直井先輩の叫び声が聞こえた気がしたが、私はシカトを決め込んだ。

『歩いてきた道、振り返らない』って？

歌詞の意味絶対間違ってるからね！？

最後に聞こえたのは直枝先輩のそんなツッコミだった。

### 偽ナギ

終わりとはいつも突然でいつも虚しい。

『私』の前に倒れている中村ゆり。彼女が動かなくなつて一体、何分が経つたのだろう?

神が許せない。

そう言つた彼女の姿はNPCである『私』でさえ、たじろぐほど  
の気迫があった。だが、それ以上に『私』は彼女のありように虚し  
さを覚えている。

許せない。何もかも許せない。

この世界に来た人間は全てがそう考えているのだろうか? だと  
したら悲しい話だ。自身の痛みを他者に与えたら、満足できるのだ  
ろうか? ……できる訳がない。その理不尽を知つてゐる本人達が  
それで満足する筈がない。そして悲しみを増やし続けてその先に  
何があるというのか? 仲村ゆりはその矛盾に気が付いていたと思  
う。でも彼女は止まれなかつた。知性で理解できても理性が理解で  
きなかつたのだ。NPCである『私』が言うのもおかしな話かもし  
れないが、本当に『神』(存在するかは不明だが)と戦いたいのな

ら、彼女は情を棄てるべきだ。

結局、彼女は肝心な所で”人間”をやめれない。

だから迷う。

「敵である筈の『私』を心配してしまう」

それが罠だと知らずに。敵の言葉に振り替えるなど、普通ならあり得ない。

排除すべきモノにすら、情を寄せてしまう。そんな”人間”が神などに挑めるものか。

私は歩き出していた。最大の障害は既に無力化されている。……願わくば、彼女にはそのままでいてもらいたい。その夢の世界で『成仏』してもらいたい。

「…………復讐の先にあるものなんて、たがが知れているですよ」

E a c h   e n d   . . . E n d

それは悪夢だ。

いったい何の嫌がらせだ。

これ以上、私に向を背負えといつのだ。

神よ。

\*

どこかでセミが鳴いていた。

夏だよ。

暑くてうさん臭つする。

夏だよ、遊びに行こう。

でも、この子達とこるといへんへんない。  
なんだろ？

ねえちやん！

\*

「……いったい、何所よ、こー」

仲村ゆりはそう、咳きながら歩いていた。ここは何処かの道路。辺りにはいなく、車の姿もない。そこにいるのは彼女、一人。

(……私は、『影』に喰われたんじゃなかつた訳?)

謎のNPCとの戦いの後、意識を失つた彼女は気がつくとアスファルトの上に倒れていた。

まったく意味不明なのが、考へても仕方ない。とりあえず歩いてみよう。彼女の出した結論はそんな所だつた。

しかし……

「歩いても、歩いても、まったく人に合わないといつのは何故かしらね?」

歩き始めてはや、数時間。一度も人とすれ違わない。……もしかするとこの世界に自分以外の人間はないのだろうか? 漠然とだが、そんな考へすら浮んでくる。

(ついでに、最高暑いんだけど……)

そして何よりこの暑さ。あつち死後の世界では季節が無かつたので特に氣にもならなかつたが、思い返せば自分は長袖。だがこの世界の季節は夏。

それが齧す結果は……

(……暑い)

腕まくりしても汗がどんどん出てくる。

どこかで飲み物でも買おうかとも考えたが、よく考えたら金が無

い。ならば、水でも貰おつかと思つたが、見つけた店は全て無人だ。

( わずかのゆりつペacenでも、不法侵入なんて出来ないわよ…… )

天使のときは、やつてたじやないかと言われれば返す言葉など無いが、罪悪感ゼロだったという訳じやない。一応彼女も人の子だ。常識くらいはある。……良心も少しはある。

そういう訳で現在、彼女は若干熱中症気味のまま、歩いていた。先程から時々、意識が飛びそうになるが、持ち前の気力でカバーしながら歩き続ける。

ぱたん。

と、言つたそばから彼女は倒れた。……やっぱり暑さには勝てないのか、日本人。

( ヒツヤ、ひさしひぶりに死ぬかもしれないわ…… )

徐々に薄れゆく意識の中、彼女はそんな事を想つていた。

\*

ゆりが倒れてから数分後。

四人の人影が現れる。

「……あ、おねーちゃん。あそこでおねーさんがおひるねしてる~」「ホントだ。わたしもいつしょにねていいくな?」

「わたしもー」

「はあ? 何言つてるのあんたたち……つて! あれ寝てるんじやなくて倒れてるんでしようが! ……」「

内の三人が何処か的外れな事を言つ中、おそらく最年長であるつ  
女の子が事態に気付き駆け寄る。

「ちょっと、大丈夫ですか！？……ダメ、返事しない。どうしよ  
う」

「「「おねーちゃんがんばれー」「  
「何で我関せずなのよ、あんた達は！… ああもう…！ んーんー  
…………あつ、そうだ…！ 手伝いなさい。家に運ぶわよ」

少しパーティックになりかけた女の子だったが、自身の家からまだ遠  
くないと言つ事に気が付いたらしい。

「持つわよー！ セーの

四人で力を合わせゆりの上半身を持ち上げると

「それ、それ、それ……」

そのまま引きずり始めた。

「おねーちゃん。このひとおもこー…！」  
「こら、女性にそんなこと言つちゃ駄目でしょー…！」  
「つかれたー」  
「まだ、始めて10秒…！」  
「あそぼーよー」  
「人命第一…！」

……人気のない路地に四人の声が響く。そして引きずり始めて数  
分。

「見えたわよ、あと少し」

彼女達の家が見えてきた。そこはなかなかに大きな家。最後の力を振り絞つて彼女達は家中にゆりを引き込む。

……扉は閉まった。

いつか忘れてしまえるのなら、”生きる”こと。それはどんなにやすくなるだろう？

忘却の彼方へと置き去りにして来たその答え。

結局、出せずに私は死んだ。

でも、それは無くなつた訳じゃない。先伸ばしてただけ。

だから仲村ゆりは”答え”を出さなければならない。  
それが彼女の業なのだから。

\*

どこかでセミが鳴いている。  
それは歡喜の歌。生への叫び。  
一週間の命の中で彼らはどんな歌を紡ぐのか?  
また一つ声が止む。

\*

家のなかへ消えた五人組。  
とっても大きなお家の、表札は

”仲村”

D i s t a n t   U t o p i a   . . . E n d

今回から軽くオリ設定。  
妄想話しばらく続きます。

Fantasy Summer time (前書き)

お久しぶりです。では、じゅっくつ。

なんて狂った世界だらう。

理不尽。そう、世界は理不尽で溢れてる。

家の玄関、夢への努力、夢中になってしまひ遊び。何気無い日常、有触れた望み、ごく当たり前に抱く明日への希望……その先に”ソレ”は身を潜めている。

”ソレ”は弱者を好む醜悪な獣だ。

目をつけられた気が付いた時にはもう、遅い。

一瞬で、まるで風が通り過ぎていくかのよう”ソレ”は全てを奪っていく。

その時、人は知る。

永遠に続くと思っていたモノ。

それこそが”奇跡”だったのだ、という事を。

気付いた時には全てが閉ざされてしまった。

やつぱり生きる事は失う事なんだ。

そんな事、ずっと昔に知っていた筈なのに。ずつと忘れていたんだ。

僕は

ちりん 。

何処かで風鈴が鳴っていた。

さあ、田観めろ。

キミの求め、渴望した答えはここにある。

旅はまだ、始まつたばかりだ。

その魂に憐みを。

そして……望むなり

彼方の旅がここで終わりますよ!』。

\*

ああ、この世界は何所まで狂っているのか？

いや……もう、死んで喰われた”私”は生きてすらいないのか。  
けれど、それでもここが死後の世界の終わりといつなり

「ねえ、ゆりっぺさん。料理教えてちょうどだい？」

「ねえ、ゆりっぺさん。一緒にお風呂入る? よ?」

「ねえ、ゆりっぺさん。おままで」とじょひ?」

「ねえ、ゆりっぺ、カードゲームやる? ! ! !」

せめて、関係無い夢を見てくれてもいいだろ? 。

「ちょっと無理よ無理。ゆりっぺさん身体一つしか無いわ。順番を  
決めて」

『……はーい! ……』

寄ってくる四匹の子猫をいなした私は手に持った新聞に目を落とした。ついで先程入れたコーヒーを手に取り口へと運ぶ。  
(……うーん、絵になるからって理由で選んだけどやっぱ夏にコー  
ヒーは無いわ)

飲んでその暑さと熱さのコンボに少し後悔する。けれど収穫が無

い訳じゃない。……どうやらこの世界でも味覚はあるらしい。顔には出さずそんな事を考えながら新聞を読み進める。

ちりん。

何所かで風鈴が鳴っていた。

蝉の声も絶え間なく聞こえる。

けれどそんなモノは気にならない。

ただ

。

たとえ幻想(一セモ)だとしても。

目の前で楽しそうに笑っている姉妹弟達(きょうだい)。

その事実だけで

「決ました!! 最初はお風呂(一セモ)ー!!」

「はいはい……じゃあみんなで入りましょう~!」

『うじやーーー』

私の目頭は熱くなる。

\*

田覚めるとそこは懐かしい我が家で、田の前には私がよく知る四人の子供達がいた。

その存在を……忘れる訳がない。忘れられる訳がない。

それは私の人生の半分と死後の全てを捧げて懺悔し続けた大切な

家族だから。

悪戯っ子でもとつても思いやりのあつたシオン。

人形遊びが好きでいつもみんなと遊びたがってたサクラ。

背伸びばかりしてけれどいつも失敗してたカンナ。

皆ミンナ、とてもいい子でこんな子達のお姉ちゃんでいられるのがうれしくて、きっとあの頃は毎日が輝いていたんだと思う。

それが理由かは分からぬけど。

この子達の顔を見て私は泣いた。

死ぬ前も死んだ後も合わせて一度しか出なかつた涙。

その三度目は意外とあつさりだつた。

そして一度目も二度目も慰めてくれた両親はいなけれど。

三度目の今回は姉妹弟が私を慰めてくれた。

どうしたの？ 何所か悪いの？

……ううん、違う別に何所も悪くない。ただ……うれしい。

そう……あの……家でよかつたらゆつくりしていいよ

? どうせ明日までお父さんもお母さんも帰つてこないから。

そしてこんな私に。

”私”はやさしい言葉をかけてくれた。

\*

古い摩耗した記憶にあつたお風呂はもっと大きかつた気がしたのだが、今こうして成長した目線で見るとそんなに大きく見えないのは何故だろうか? ……死んでから実感するとは皮肉な話だけど。

「わー!! ゆりつべさんちょー綺麗!!」

「ふにふにだ~」

「ちよつとあんまりはしゃぎ過ぎないでよ。転んだら大変なんだからね!!」

「わかったユリ姉ちゃん」

三人に声をかける”私”を微笑ましく誇らしく思いながら私は何年振りかになる我が家のお風呂へと足を踏み入れた。先程小さいみたいな事をいつたがそれでも五人で入れるくらいにお風呂は広かつた。

暑さでぐつたりとなつていた手前、この水風呂遊びに意見がまと

まつたのはありがたい。

冷たい水が肌を刺激して思わず声を上げてしまふがそれもいまは  
愛おしい。

私は久しぶりに”生きている”この時間を堪能していた。

\*

本当ならこんな事している場合じゃないのは分かつていた。

私の見ているコレは夢で幻でいつか覚めてしまうモノだとは理解していた。

こうして私が夢幻のこの子達と戯れている間も戦線のみんなは闘い続けている。

それも知っている。

けれど……だけど……！

あと一日……一日だけ、私に時間をください。

さつき新聞で見た日付 平成1年8月 日。

この”現実”から目をそらす事は出来ない。

それは運命の一日前の日付。

この世界が私の記憶を元にできているなら

明日、この子達は”ゆり”を残して死ぬ。

そんなモノは認めない。

この子達が幻でも認めない。

たとえ私の歩んだ人生そのものが変えられないとしても、今この瞬間笑っているこの子達を見捨てるなんて出来ない。これが影の罠でこれが神が下した罰だというなら

まつたのはありがたい。

せめて目の前の彼らだけでも救つて……私は呑む事にしてやる。

\*

それは全てが遠い理想郷。

求めたモノは未来にも死後にもなかつた。  
思えば簡単だつたのだ。

仲村ゆりが目指して求めて探し続けた答えは

過去に、長女・仲村ゆりであった今日にいたったのだから。

\*

『ただいまーーー!』

「おかえり、シオン、サクラ、カンナ……ヨリ、

愛しい者達の名前を呼ぶ。来る時は見なかつたがこの世界にはちゃんと他の人もいるらしい。おつかいを提案した所、四人はしつかりそれをこなして帰つてきた。……まあ、レシートが無い辺りもしかしたらただ本当に持つてきただけかもしれないが……。

(…………うん、見なかつた事にしよう)

一人納得して買い物袋を受け取る。

「ねえ、ゆりっぺさん。今日の晩御飯はゆりっぺさんが作ってくれるの?」

何所か期待しているようにシオンが訪ねてきた。……弟よ、確かにこの年齢の姉達の「ご飯は頼り無いモノだつたのだろうけどそれを口に出してしゃおしまいよ?」

「…………ちょっといらっしゃなさうシオン」

「ちーまーつーつーじゅー」

「わ、あわわわわ……！」「めんなさい、カンナ、ヨリ姉ちゃん！」

案の定、目敏く聞きつけた長女わたしと次女カナンに詰め寄られ、シオンは逃げだした。……夕飯前に返つてくるかしら？

そして残つたサクラは……

「（ジ）」

羨ましそうにその光景を見ている。

「……サクラ？」

「ジ……なに？」

「お手伝い、する？」

その言葉にカンナは眼を見開いたあと、満開の笑顔になり持つていたぬいぐるみをソファーにぶん投げた。……あわれぬいぐるみ。隙間に顔が突き刺さってる。

「ねえねえ、なに作るの？ ゆりっぺさん……」

そんな事おかまいなしのサクラ。これは……まあ、いいか。食べる時に言おつ。そう結論してこの話題はもう終わり。

「そうね、なんだとと思う？」

そう言つて私はサクラの前にまな板を差し出す。板の上に乗せられたのはジャガイモ、ニンジン、豚肉。うーん、と少し考えて出た答えはみんなの大好きだったモノ。

「分かつた！…」

そう

「じゃあ、一人で言つわよ」

「カレーライス！…」

せーの

明日の為に。今日は山盛り、海水もよじらべ。

\*

夢幻の旅ももうすぐ終わり。

一睡の夢の中。

家族は確かに笑い合っていた。

fantasy summertime  
..... End

## Fantasy Summertime (後書き)

次回で終われるかな?  
感想、誤字、脱字ありましたらお願いします。  
では、また。

## 新曲（前書き）

久しぶりの更新。  
ただ、今回は岩沢サイドです。

岩沢

季節は夏の影が見え始めた七月初日。

あのライブから数日が経つ。莫迦兄貴の御蔭でなんと御咎め無しとなつた私達はいつもの様に練習していた。あのライブの後、すぐに音無家に居候しているコイも参加し、だんだんとバンドらしくなつていくのが楽しくて、懸命に毎日練習に励んでいた。

その唄を見せられたのは、練習が終わり家で涼んでいる時。

コイと二人、麦茶片手に部屋で新曲の相談をしていると、神妙な顔をした初音が手に”ナニカ”を持ってやってきたのだ。

一体どうしたのかと思い、聞けばそれは自分が初めて作曲した歌詞だ、と初音は言った。

えっと、恥ずかしいんですけど……読んでくれませんか。

まるで愛の告白の様に顔を赤らめる初音にとりあえずそれを男の前ではるのはやめる、勿論教師もだからな！？ と厳命した後、その歌詞とやらを見せてもらつた。

「…………えーと、コレ、初音ちゃんが書いたんですか？」

「は、はいッ！…」

「…………『ペーはしないよな？』

「も、もちろんですよ！？」

心外だ、と表情を一転、怒り顔に変えた初音にすまんスマンと謝りながら、歌詞の意味をもう一度私とコイは吟味していく。

いつも一人で歩いていた。

それは独りぼっちの”ダレカ”の唄だ。

振り返ると皆は遠く。

それでも”ダレカ”は歩いていた。……それが強さの証と信じて。

もう何も恐くない。

そう呟いて、”ダレカ”は歩き続ける。……いつしか、一人になつて誰かの思い出の中だけの存在になつても、涙を忘れて”ダレカ”は戦い続ける。

行く先が行き止まりの崖と知りながらも、強さを証明する為に”ダレカ”は進み続ける。

いつか忘れてしまえるなら、生きる事、それは容易いモノ？

その問いかけに一体幾人が答えられるだろうか？……少なくとも私は答えられない。だつて、ずっと逃げていたから。忘れもせず死んで、死後の世界で満たされていたら、私にその問いかに答える事は出来ない。ただ、世界は甘くないって事は知っている。容易くない事も知つている。だからこそ……。

「……忘却の彼方へと墮ちていく、か」

その時、人は生きた意味を失う。記憶を”過去”として扱った時、それは”私”では無くなる。

だから生きる、と。

走り続ける、と。

孤独さえ愛し笑つてられるよ」に、戦え。

そうして全力で走り抜けた先に必ず答えはあるから、と。

……その唄は綴られていた。

『……………』

「…………あの、そんなに酷かつたですか？ 私の歌詞」  
何も言わなくなつた私達に初音は不安そうな眼をする。

「…………いや、最高だよ。コレ」「

「そ、そうですよ！ 憎いです初音ちゃん。アタシだつてこんな歌  
詞書けるか、分かんないですよー！」

問われて、そして慌てて、私とユイは感想を述べた。……実際、  
荒削りな所はあるけど初音の唄は”いい歌”だった。

……ただ、これは私とユイの気持ちの問題。

無関係なのは分かつている。

けど、これを見て聞いて、あの娘を思い出さずにはいられない。  
この唄はあの娘の人生そのもの、と言つても差支えなかつた。

いつだって”独り”で、”誰か”の為に戦つっていた私達のリーダ  
ーを思い出さずにはいられない。

そういえば……。

聞いてから一週間。

”闘い”は始つてゐるのだろうか？  
なら、もしかしたら……。

誰か二つちに戻つてくるかもしない。

「…………よし、じゃあ次の歌は初音のこれでいいぞ?」

「そう思つた時にはもう口から言葉が漏れていた。」

「え……マジですか?」

驚いた様に初音とユイが見つめるが、もひれは私の中で決まつてしまつた。

「ああ、<sup>マジ</sup>真剣だ」

彼女を迎える様な唄を創ろう。

この歌詞の様に

「これは挑戦だ。」

世界に対して、そして私に対する挑戦状。  
過去を清算する事は出来なくても、今を変える事が私には出来る。  
だから刻もう。

この歌を。

「よし、じゃあ詰めるぞ!」

「…………了解ですよ、まさみちゃん」

「私もやります、北沢さん……!」

決意を新たに、彼女達は歩み出す。

それはきっと楽しい時間であり、苦しい時間でもある。

だからこそ、それは尊いのだろう。



また会えたら会いましょう？

夏休みの日記。平成1 年8月 日(土)。

今日は、お家の近くで女人の人を拾いました。名前はゆりっぺ。なんでも生き倒れ、というモノに遭遇したらしくお家が無いぞーです。可愛かったのでゆりお姉ちゃんに頼んでお家に運びました。……なんとなくゆりお姉ちゃんと名前にてるなーとは思いますが綺麗れでは断然ゆりっぺの方が上です。というより優しいし、料理も上手で本当にお姉ちゃんになつてくれたら、嬉しいのにな。明日はみんなでプールに行きます。ゆりっぺ泳ぐの得意そつなのでいまからとても楽しみです。

仲村カンナ

\*

いつの間にか駆けだしてた。

あなたに手を引かれてた。

昨日は遠く。

明日はすぐ

そんな当たり前に心が躍った。

\*

田覚めればそこは、よく知つてゐる天井だった。

当然だらう。

なんせ、一生の半分をここで過ごしてきたんだから。

……望むなら、こんな夢幻では無くて現実で、生きてゐる間にこの幸せを知つていればよかつた。我ながら無茶だとは思つが、それこそがきっと”夢”だつたのだから。

「…………うとう、ゆつづべ…………」

でも…………。

例え幻想でも今触れているこの温かさは本物だ。……私にとっては過去でも”私”としては確かに今だ。

「…………お姉ちゃんが、護つてあげるから

だから彼方は笑つてなさい。

「…………仲村ゆり」

自分が自分の頭を撫でてゐる異常なこの状況を私は嬉しく思つ。

ちりん。

何処かで風鈴が鳴つていた。

さあ、終わらせましょ。

この愚かな旅を。

\*

目覚めた私は、四人と朝食を済ませ、市内のプールへとやつてきていた。その理由は朝、テーブルに私用の水着が置かれていたから。成る程、お膳立ては出来ているという事だ。

外に出てみれば案の定、沢山の”人”が町を歩いていた。……昨日までは私の家族しか存在し得なかつた町に人間が居る。その事実が指示示す事は一つしかない。

上等じやないか。

神め。

私は負けはしない。絶対にこの運命を覆して見せる。

「夏だ！」

「水着だ！」

「プールだ！」

そんなお約束な事を言いながらシオン、サクラ、カンナは水の中に飛び込んでいく。……監視員に怒鳴られているが、それもまた一つの夏の思い出だらう。

「……それで”ゆり”はあんな風に飛びこまない訳？」

「私は一応お姉さんですから、ちゃんとお手本にならなきや……」

……相変わらず我ながら意地つ張りなモノだ。

「そう……」

「えつ……？　うわあつー？」

お姫様だつこで”ゆり”を持ち上げ、私はプールサイドまで歩いていく。

「…………まさか」

「そのまさか、よ。私はね、お姉さんには特別厳しいの」

“ まつたく、普段はともかく今は私がいるんだからもう少し” 子供  
“ をやつていればいいのだ。……無粋で有難迷惑かもしれないが、  
“ 知っている” 私からすれば歯がゆくてたまらない。  
だから……。

一、政治社会の構造

! !

怒るのは分かつてゐるが、”私”を投げ込む事にする。  
バシャン！　と水しぶきを上げて”ゆり”は水に沈んだ。

「アーリー・ウーブン」

ちよつと待ちなさい、と叫ぶ監視員（？）に思いつきりあかんべーをして私も水の中に飛び込む。

「やあ、あんた達――あのおっさん」捕まれまいから放つ出で

『わあ！』

これもNPCの効率的な運用法だ。

神の玩具か 私に使えないと思ひな  
さて、あの子達は逃げ切れるかしら。

卷之五

水の中を必死に移動して逃げるあの子達と監視員NPCの姿を”見送つて”、私は陸に上がった。……NPCはその特性上、人を疑

わないので、あの子達が逃げ続ける限り何所までも追うだろ。…  
…水には入らない様だから余程間抜けじやない限りは捕まらない。

更衣室に戻り着替えて私は入口に向かう。

「あれ、もう出て行かれるんですか？」

「ええ、もともと子供達の送り迎えが目的でしたので」

不思議そうな顔をする受付嬢N P Cに淀みなく答えて私は施設を  
出た。…事前にあの子達には夕方になつたら四人で戻つて来い、  
と告げてある。

さて、準備は整つた。

あとは、私の過去を清算するだけだ。

\*

待つてる気がした。

呼んでる気がしたんだ。

震え出す今この時が……。

見つけた気がした。

失われた記憶が呼び覚ました。

物語、永遠の、その終わり。

\*

「さて、これで一応の未練は無くなつたわね」  
町を独り歩きながら一人言つてゐる。

「……面と向かつてサヨナラと言えないのが残念ではあるけど……。」

「まあ、私にはそれが似合いか」

それがゆりつペさんクオリティーってね。

なら、最後はやっぱり口しなんだろう。

「じゃあね、また会えたら会いましょ？」

私の可愛い子供達。……。

その呴きは夏の大きな青い空に吸い込まれて消えていった。

届く事のない、その願い。

まったく摩訶不思議な人生だった。

それももうすぐ終わってしまう。

なのに……どうして……。

「こんなに嬉しいんだらう？」

零れる涙を私は拭わない。

これがきつと生涯最後の涙。

壊れた人生、歪んだ心。

そんな異物が流した最後の気持ち。  
それを確かに私は愛おしく思つた。

「ただいま、我が家」

帰つてくれれば、まだ彼らはいない。  
なら好都合だ。

逃げも隠れもせずに私は迎えてやるわ。

「さて……『一ヒーでもいれましょうか

ちりん、と何所かで風鈴が鳴った。

さあ、始まりを終わらせてよ。

終わりが始まつたこの場所で。

『また会えたなら会いましょ?』……E nd

## またね

夏休みの日記。平成1 年8月 日(日)。

今日は、お家の近くで拾つたゆりっぺも一緒に市民プールに行きました。ゆりっぺには沢山泳ぎ方を教えてもらおうと思つていたのですが、監視員から逃げ回つてゐる内にゆりっぺはいなくなつてしまつました。今日はあんまりゆりっぺとは遊べませんでしたが、明日もまだ夏休みなのでいろいろして遊びたいです。それにしてもお昼に食べたメロンパンは美味しかつたなー。

仲村カンナ

\*

「おわったーー！」

今日は夏休み最後の日。宿題の代わりに溜まりに溜まつていた絵日記をよつやく書き終え、私は歓声を上げる。……ゆり姉やサクラはざるい。肝心な所でボーとしてるくせに、こいつ事はちゃんとやっていて休みの最後はいつも私だけがこつして夜九時まで起きている事になる。

しかしこの作業は実は中々楽しいと私は思つ。……普段遊んでばっかりだから、たまに自分の遊びを振り返つていいはああしておけば良かつたなー、と思つたりするのだ。

「まあ、慣れてるからね」

ゆり姉やサクラにはけして分からぬ樂しさだらつ「ンせ……」。  
そうして書き終えたばかりの日記を初日から読み返していく。バーベキュー、水遊び、テレビゲーム、料理にキャンプ、お祭りなど

今年も我ながらよく遊んだ。

「…………あれ？」

と、私は自分の書いた日記を読み返し、ある一箇間にフツと首を傾げた。

「”ゆりっぺ”って誰？」

そこには私が拾つたお姉さんの話が書かれている。……これはサボリ始める前の日記だ。しかしこんな出来事があつただろうか？確かにこの日は朝から夕方まで姉妹弟で市民プールに居たが……。

「……まあ、いいか」

大方、知らないお姉さんと意氣投合していたんだろう、と決めつけ私は次の曜日に眼を移す。……ほら、やつぱり月曜日からはこのお姉さんは登場しない。

夏の刹那の出会い。ただそれだけ。  
しかし一つ心残りがあるのなら

「なんだ、日記に書いてるやんと真取つておけば良かつた」

それくらいのモノだ。

「おーい、カンナ！！ いつまで起きてるんだあ？ 早く寝ひよー！…」

「はあーー」

おつと、そういえばもう九時過ぎだ。……明日からは学校。お父さんもああ言つてるし、そろそろ寝なきやね。一度下に降りて歯磨きとトイレを済ませ、私はベットに潜つた。

毎年、夏休み最後のこの寝るまでの数分は少し寂しい。……けど目覚めればきっと明日が在るから怖くはない。

「あーあ、楽しかったな」

口に出せばそれは過去になってしまったのは分かっている。……でも、だからこそ声に出す。

過去は記憶だ。けして無くなったりはしない。だからいつまで刻みつけるのだ。

頭にでは無く、心。

望むなら、この思いを永遠に。

手の平の楽園はいつでも私の中にある。

「だから……お休み」

「ええ、おやすみなさい」

### 神流。

そう誰かに言われ、頭を撫でられたのは薄ぼんやりと覚えている。  
けれどそれが誰だったか。

夢の中に入ってしまった私には最後まで分からなかった。

「…………またね」

『またね』……End

## 後悔しなさいよ

長閑な夏の昼下がり、四人の男達はとある家への前へとやつてきた。……夏だというのに全員が全員、上下長袖というその異質な集団は家の表札を確認すると互いに目配せしあい、下種の笑みを浮かべる。

男達は犯罪者だった。

昨日から子供しか居ないというとあるお金持ちの自宅。……この世の中であつて防犯装置の一つも仕掛けていらない間抜けの家。何度も何度も人様の財産を強奪し、その背徳の優越感に染まりきつてしまつた男達にとつてここは既に他者の家では無く、”宝の山”としか映つっていない。

その子供達も朝の内に何処かへ出かけてしまった。……一つ誤算があるとすれば、子供が標識通りの四人では無く五人だった事。そしてそのうちの一人が丁度”食べごろな”少女だった事くらいだ。惜しい事をした、と少し男達は後悔している。多少、人目はあれどやはり朝の内に襲つておけば、今頃自分達は御馳走にありつけていたかもしれない……。

……男達は下種であり屑だった。

それが誰の人生を狂わせて、誰の人生を終わらせるかすら考えない。……いや、考えれない。甘ったれた思想に染まりきり、努力無き成功を達成してきた男達にとつてこれはゲームだった。

殺人すら許されるゲーム。そんなある筈の無い妄想に男達は囚われている。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫

頭に浮かぶのはそんな根拠のない言葉ばかり。

大丈夫。

自分達はこれまでも成功させてきた。

大丈夫。

そればかりではなくたまの”御馳走”まで頂いてきた。

大丈夫。

自分達は間違いなく愛されている。

大丈夫。

誰かつて？

大丈夫。

それは勿論、神様さ！！

大丈夫！！

そうして玄関の力ギは開け放たれた。男達はまず、リビングへ向かう。……まずは残っている家人間が居るかどうか。それが男なら殺す。女なら縛つて後程犯す。その動きに淀みは無い。

彼らはこの時、獵犬だった。……自らの欲望の為に他者を喰い殺そうと奔る涎を垂らした醜悪な獸。その言葉が四人にはピタリと当てはまる。

勢いよく、リビングの扉を開け、そこで男達は今大最高の笑顔を浮かべた。……朝、確認した少女だ。

彼女が何故か家に戻ってきている

！！

その赤毛ショートの少女はソファに座り、カップを片手に雑誌に目を落していた。その耳にはイヤホンが装着されており、余程の大音量で音楽を聴いているのか、男達に気付いた様子は無い。……それは絵になっているからこそ、余計痛ましかった。

こんな将来望まれる美少女が次の瞬間にはその人生を終わらせられるかもしれない。

それを阻止できない事がこんなにも情けない……。

しかしこの時の気持ちを男達に聞けば間違いなくこう言つだろ？

それが最高なのさ、と。

そう言つて塵共は笑うだらう。

ああ、情けない……。

本当に情けない……。

こんな地獄を見る事しか出来ない自分が情けない。

そうして少女に男達の手が延ばされる。……もはや伝えられるのはここまでだ。  
もう……。

「ねえ、一つ聞いていいかしら?」

と、その時唐突に少女は口を開いた。……莫迦な。

ありえない。

少女は男達に気付いていた。だというのに逃げ出さない。その場を動きもしない。……男達はバットも、スタンガンも、違法工アガンすら所持している。

なのに何故、慌てない。死ぬのが怖くないのか？ それとももうイカレテしまったのか……。

「なんだ、姉ちゃん俺達に気付いてた訳？」

「ええ、まあね」

男達は驚きこそしたが、今すぐ少女を襲う事はしなかつた。それは慈悲では無い。男達はこの瞬間、喰つ獲物との対話を楽しんでいるのだ。

それで答えてくれる訳?

少女が自分達を恐れる事もせず、ただ質問に答える、と要求していく。

こいつ女王様かよ。

マジ受けろ！！

たまんねえなあ！！

それを勘違いした男達は口々に歓声を上げた。……」いづらは正

真正銘の莫迦だ。

男達は気付かないのか。

少女の目は既に年相応のモノではない。

完全に狩る者の目だ。

自分達の立場が既に逆転している事に男達は気付かない。

気付かないから……。

「まあ、聞くだけ聞いてやるよ？」

ほら言いな、そんな口が聞けるのだ。

そう……、と少女は存外冷めた口調で呟いた。数秒ばかり天を仰ぐ。……声が出ない口元が諦めた様に”莫迦な奴”と動いていた。

「じゃあ、一つ。……ねえ、理由”ある”殺人つて許されると思う？」

そうして紡がれたその言葉は間違いないく正真正銘最後の通告だった。逃げる。零れた言葉は既に少女に向けられた言葉では無い。

男達に向けられた言葉だ。

「……それ知つてさ、姉ちゃんは如何にかする訳？俺達を？」

男の一人が面白そうに顔を近づけて呟く。少女は顔を顰める事すれ、逃げる様子は無い。

「それで如何なの？」

ただ、答えだけを少女は求める。

「あつたり前じゃん。許されるよ。そんな事」

その問いかけにもう飽きてしまったのか、男はそれを当然だ、と答えた。そしてこれまでもそうしてきた、と笑った。

泣き叫ぶ子供を叩き殺して、嫌がる女性を犯し殺して、呆然とす

る老人を滅多刺して殺してきた、と男達は嗤つた。

そしてこの後、あんたもそなるんだ、と男達は晒つた。

「そう……」

しかしそれを聞いても少女は眉一つ動かさない。……ただ男達の言葉になんの感慨も受けず。流した。

それは獲物態度ではない。

それが気に食わないのか。

「なに、もう諦めた訳？ あんたさあ、これから自分がどうなるか分かつてんの？」

「勿論よ」

「へえ……なに？ もしかしてあんたさつきから誘つてる？」

「ええ、分からぬ？」

その少女の言葉に男達は顔を歪めた。それは嗤い顔。最高だ、とでも思つているのだろうか？ 彼らは……。

断言してもいい。彼らの”誘つ”と少女の”誘つ”は完全にベツモノだ。

そんな都合のいい事が世の中にある訳が無い。なんで分からない。どひして気が付かない。

彼女の晒い貌に。

少女はゆつくりと胸元のボタンを開けていった。その誘つような動きに男達は無言で牽制しあつた後、一人の男が手を伸ばす。少女はその男の指を掴むとゆつくりと胸の方へ持つていき、触れる直前で腕を止めた。

そうして男の顔を覗き込み

「ねえ、本当に後悔しない？」

そう赤らめた貌で呟いた。

「勿論」

……いつから、少女と恋仲になつたのか？ 男は馬鹿正直に答え  
る。

その答えは「アラビ少女は悪い」と

「…………そり、なら殺せなきゃね」

その掴んだ指を思いつきり手の甲へと倒した。

「う、あ……？」

お願い 夕べ「

その事実に男が気付き、一拍遅れて激痛が奔り叫び出しそうになつた時、既に少女の指は男の両目に突き刺さつてゐる。

”痛み”の悲鳴を男は上げる。

……そんな声。アンタが上ける資格なんて無い」「しかしそれが少女には気に食わなかつたようだ。

指を無理やり手元に引き寄せ、寄つて来た顔を思い切りよく膝で打

（通）  
（通）

ゆらり漂鬼の様に立ち上かり少女は今この時の光景に呆然としている男、三人に視線をくれる。

情はない」

私はこんな奴らに人生狂わされたんだろう？

その咳きを一人”減つた”獲物達は如何取つたのだろうか。声にならない叫びを上げ、男は持っていたバットをスタンガンをナイフを振りかぶる。

その瞬間にスタンガンの男は膝を折った。  
訳ではない。骨すら折っていない。  
やつて事は一つづけ。  
別段、少女は何かした

十九

「抜くと死ぬわよ」

事実だけ告げる少女は既にナイフを持つ男に向かっていた。……  
ありえない。別段訓練した訳でもないだろうに少女の動きは一種の  
芸術すら連想させる。

ていいのか。

む

グキ、とまた骨の折れた様な音がした。……よく少女を見ればその足元は何故か日本なのにブーツ。……この子は日常的に戦場にでもいたのか？

「...」の状態

踏み足からさらに一步踏み込み少女は勢いよく身体を回す。それは中国武術ならば転身脚、プロレスならバックスピン

要は後ろ回し蹴りだつた。

一説によれば、踵で蹴る技は人類が手にした究極の打撃技の一つであるという未開もある。……なんせ、達人は素足でコンクリートを粉碎するのだ。それを一概に誰が嘘だと否定できる？　つまり少女の蹴りの威力はそれ程だつた。

テーブルに勢いよく倒れ込み、血を流しながら男は動かなくなる。それを冷めた目で見つめていた少女は？然と立ち尽くしていたバットを持つ男に目線を向けた。

「……どう？ しつべ返しを受けた気分は？」

血まみれの少女、しかしそこに少女が負った傷など一つもない。

圧倒的だった。

そこで男は初めて知る。

自分は既に狼では無くなっている事を。

既に自分は羊だったという事を。

それを自覚して逃げ出す程の知能が男にあつたらどれだけ幸せだつたろうか？

……残念だ。

結局塵であり屑であり下種である男はどうとうその事実に気が付かなかつた。

最早、何の優位も持たないバットを振りかぶり、男は人ならざる声を上げ、少女に向かう。

それは見るに堪えない愚行。思わず近くにあつたゴムボールを手に取り男の顔面に投げた。

「んあつ！？」

「莫迦、よそ見するなよ」

それだけで気が逸れてしまう男にしきり咳く頃には

彼女は既に懷に居る。

ブーツが直角に膝に入り、男の関節が折れる。叫ぶ暇すら少女は与えない。そのまま男の袖を掴み、一気に踏み込んで

「後悔しなさいよ」

関節を封じて、男を背負いなげた。

受け身すら取らせない。

それは一種の執念じみた攻撃。

狙つたのか、テーブルに打ちつけられ、男は他者同様沈黙する事になった。

「それで後は隠れてるアンタだけよ」

出てきなさい、と少女は言つた。『私』のいる方向を指さして。

「……どうして分かつたのかしら？ 意外と上手く隠れていたつむりなのだけど？」

「は？ あんな声出してれば嫌でも気付くわよ」

物陰から姿を現しつつ、そう尋ねねば返つてくるのは100%の答え。……まつたく優秀すぎる。

「それでアンタ何者よ？」

「まあ、そういうきり立たなくともいいんじゃない？ ゆりっぺ？」

私がそう彼女 仲村ゆりに問い合わせれば彼女は勿論、怪訝そうな顔をする。

「アンタ本当に……！」

「話はそこに転がってるゲテモノ片づけてからにしましょうよ？」

そんな彼女を片手で制して、私は太腿からM1911を抜いた。私の目の前には彼女の背後で立ち上がっている喉にナイフが刺さった男。その男の両膝に鉛玉をブチ込む。

「……！」

喉元に血が詰まっていたのか、男は叫び声と共に血を吐きだし、今度こそ氣を失つた。

「……！」

「詰めが甘いわよ？ ここは死後の世界と違つて死んだら終わりなんだか注意しないとね？」

「…………アンタ、一体何者よ」

「ふう……だからこれを片付けてから話しましょ~う~、まさかこんな血生臭い場所で語り合いたいの?」

とんだ性癖ね、そう言つと心外だ、と彼女は怒る。

「そんな趣味無いわよーー!」

「そうね、懶々來るのが分かつて、血が飛び散らない様に辺りにシーツ敷きなおしてゐる彼方だもの。当然よね」

「……………せめて名前くらい教えないさい。彼方は誰?」

遠回しにだが”神なら殺す”とその瞳は告げている。…………まあ、それくらいなら名乗つても大丈夫だろうか?

「そうね、自己紹介くらいするべきだったわ。御免なさい」

これでも結構動搖してるのよ? と告げ、私は彼女の瞳を見る。

「私の名前は朱鷺戸沙耶。彼方と同じ

反逆者よ。

そりへ、言葉を溢した。

『後悔しなさ~いよ』……END

後悔しなきことよ（後書き）

書いてゐるうちにこの男達が腹立たしくなつてきてまさかの惨劇話  
[こ]  
……。

感想お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0064m/>

AngelBeats My Song

2011年1月23日17時52分発行